

### 3. 関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡 平成18年度発掘調査報告

#### はじめに

関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡の発掘調査は、独立行政法人都市再生機構の依頼を受けて、昭和59年度以来(当時は住宅・都市整備公団)継続して実施している。平成18年度は、内田山遺跡・内田山古墳群B支群、鹿背山瓦窯跡、赤ヶ平遺跡の3遺跡について調査を実施した。

内田山遺跡・内田山古墳群B支群は、京都府木津川市木津内田山に所在する。<sup>(注1)</sup>内田山遺跡・内田山古墳群B支群の調査は、平成11年度の試掘調査に始まり、今回の調査は第7次調査にあたる。<sup>(注2)</sup>今回の調査対象地は、前年度の第6次調査で検出したB2号墳に続く北側尾根を中心とした範囲であり、弥生時代後期集落跡とB支群を構成する古墳の検出が予想された。現地調査期間は、平成18年4月17日～同年10月4日までである。調査面積は約3,900m<sup>2</sup>である。

鹿背山瓦窯跡は、京都府木津川市鹿背山須原に所在する。丘陵上の耕作地で焼土が検出され、重圏文軒丸瓦と重郭文軒平瓦が採集されたことから、瓦窯跡の存在が推定されていた。<sup>(注3)</sup>鹿背山瓦窯跡は今回が初めての調査であり、遺構遺存状態の確認を目的とした試掘調査を実施した。現地調査期間は、平成18年10月8日～平成19年2月27日までである。調査面積は約1,500m<sup>2</sup>である。

赤ヶ平遺跡は、京都府木津川市木津赤ヶ平に所在する。赤ヶ平遺跡は、昭和59年度の試掘調査に始まり、今回で第4次調査にあたる。<sup>(注4)</sup>今回の調査対象地は、遺跡の存在する丘陵北端部に位置し、弥生時代の住居跡を検出した第2次調査地の北東側に隣接する。現地調査期間は平成19年1月5日から平成19年2月27日までである。調査面積は約1,600m<sup>2</sup>である。

発掘調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長石井清司、同主任調査員引原茂治・竹原一彦・田代 弘、同専門調査員石尾政信、同主査調査員柴 暁彦、同調査員村田和弘、同調査第1係調査員筒井崇史、同調査第2係主任調査員戸原和人、同専門調査員竹井治雄が担当し、発掘調査および整理作業には多くの調査補助員・整理員の参加・協力をいただいた。<sup>(注5)</sup>本概要報告は、竹原と柴のほか、大谷博則(奈良大学大学院)、田中智子(立命館大学大学院)、兼子拓也(奈良大学)が分担して執筆した。なお、本概要報告で用いた国土座標系は、過去の調査との関連上、日本測地系(旧座標系)国土座標を使用している。

調査期間中は、京都府教育委員会・木津川市教育委員会・京都府立山城郷土資料館・京都府立木津高等学校などの関係諸機関、網 伸也氏、大脇 潔氏、奥村茂樹氏、小澤 毅氏、金子裕之氏、中井 公氏、西崎卓哉氏、林 正憲氏、菱田哲郎氏、藤原 学氏、藪中五百樹氏からご教示・ご協力をいただいた。

なお、調査にかかる経費は、全額、独立行政法人都市再生機構が負担した。(竹原一彦)

## 1. 位置と環境

木津川市は、京都盆地の最南端に位置する。京都盆地は、旧巨椋池を境に京都市域を中心とする北山城と、南に位置する南山城に区分する事ができる。この南山城地域は、南北約14km・東西約2～3kmの狭長な地形で、その中央には木津川が流れている。木津川は、三重県布引山地を源流とし、西流して南山城地域南部の木津川市木津で流れを北に転じ、大山崎町で宇治川・桂川と合流し淀川となり、大阪湾にそそぐ。木津平野では、井関川・鹿川・山松川・山田川など木津川の支流があり、これらの河川によって沖積平野を形成している。盆地の周囲には、標高100m前後を最高所とする丘陵地形がみられる。

## 2. 歴史的環境

旧石器時代では、東側丘陵に岡田国遺跡の1例が知られ、木津川市域における最古のサヌカイト製彫器が出土している。この遺跡はJR木津駅のやや南方に位置する。

縄文時代では、木津平野の東側丘陵に、後期から晩期にかけて遺跡が形成される。同丘陵北部では、燈籠寺遺跡と片山遺跡が知られ、土器・石器などの遺物が出土している。晩期では、同丘陵の南方に位置する瓦谷遺跡で土壌墓が検出されている。

弥生時代では、木津平野の西側丘陵に扁平鈕式袷袷文銅鐸出土地として知られる相楽山遺跡と、その母村と考えられる大島遺跡(中期)が存在する。東側丘陵上には、赤ヶ平遺跡(前・中期)、燈籠寺遺跡(中・後期)、木津城山遺跡(後期)、内田山遺跡(後期)、上人ヶ平遺跡(後期)、西山遺跡(後期)などが知られる。なお、各遺跡と平野部との比高差はおおむね約20m前後であるが、木津城山遺跡のみは比高差約70mを測る。東側丘陵裾から平野部にかけて、片山遺跡(後期)・白口遺跡(後期)などの集落遺跡が分布する。

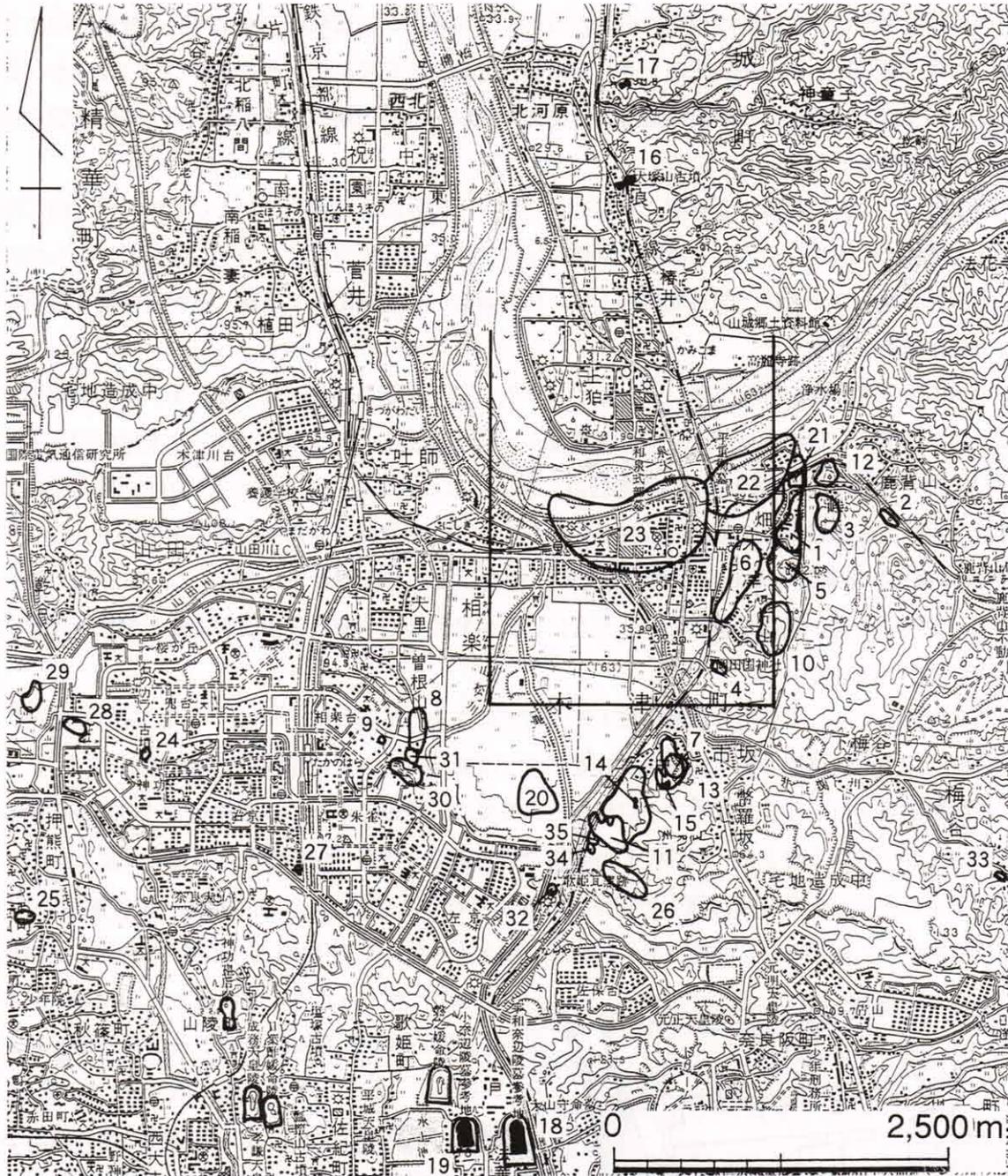
古墳時代では、前期に、木津川を挟んだ対岸の木津川市山城町で、椿井大塚山古墳(全長約175m)・平尾城山古墳(全長約110m)などの大規模な前方後円墳が築造される。椿井大塚山古墳では埋葬された大量の銅鏡から、他地域との広範な交流が窺える。前期から中期にかけて、奈良山丘陵の南側では、佐紀陵山古墳(全長約207m)・ウワナベ古墳(全長約255m)・コナベ古墳(全長約204m)などの大規模な前方後円墳で構成される佐紀盾列古墳群が分布する。木津平野では、前期後半に、前方後円墳である瓦谷1号墳(全長約51m)が築造される。以後、中期から後期にかけて、瓦谷古墳群・内田山古墳群・上人ヶ平古墳群・西山塚古墳などに代表される中小規模の古墳群が順次築造される。この他、同丘陵部に瓦谷埴輪窯跡群・上人ヶ平埴輪窯跡群が築窯される。

古墳時代の集落はほとんど確認されていないが、後期の集落跡として弓田遺跡が知られる。

奈良時代では、平城宮・京に近い関係から、多くの遺跡が集中する。とくに、奈良山丘陵から東側の丘陵にかけて、瓦窯跡や瓦工房跡などが多数分布し、奈良山瓦窯跡群として知られるところである。同瓦窯跡群は、当初、平城京の北側奈良山丘陵に築窯されたようで、中山瓦窯跡・歌姫西瓦窯跡・山陵瓦窯跡などが知られる。以後、時期が下がるにしたがって瓦窯跡は次第に東へと移り、木津平野の東側丘陵部に築窯されていく。東側丘陵では、平城宮・京に供給した瀬後谷

瓦窯跡・市坂瓦窯跡、興福寺に供給した梅谷瓦窯跡、法華寺に供給した音如ヶ谷瓦窯跡・五領池瓦窯跡などが知られる。音如ヶ谷瓦窯跡では、最古の有床式平窯が検出されている。瓦工房跡では、市坂瓦窯跡の北東側に隣接する上人ヶ平遺跡が知られており、市坂瓦窯跡で焼成される瓦を製作していた。

(大谷博則)



第1図 調査地位置図及び周辺遺跡分布図(1/50,000)

1. 内田山遺跡・古墳群
2. 鹿背山瓦窯跡
3. 赤ヶ平遺跡
4. 岡田国遺跡
5. 燈籠寺遺跡
6. 片山遺跡
7. 瓦谷遺跡・古墳群
8. 大畠遺跡
9. 相楽山遺跡
10. 木津城山遺跡
11. 上人ヶ平遺跡・古墳群
12. 白口遺跡
13. 西山遺跡
14. 瓦谷1号墳
15. 西山塚古墳
16. 椿井大塚山古墳
17. 平尾城山古墳
18. ウワナベ古墳
19. コナベ古墳
20. 弓田遺跡
21. 燈籠寺廃寺
22. 上津遺跡
23. 木津遺跡
24. 石のカタト古墳
25. 中山瓦窯跡
26. 瀬後谷瓦窯跡
27. 山陵瓦窯跡
28. 押熊瓦窯跡
29. 乾谷瓦窯跡
30. 歌姫西瓦窯跡
31. 音如ヶ谷瓦窯跡
32. 歌姫瓦窯跡
33. 梅谷瓦窯跡
34. 五領池東瓦窯跡
35. 市坂瓦窯跡

## (1) 内田山遺跡・内田山古墳群第7次

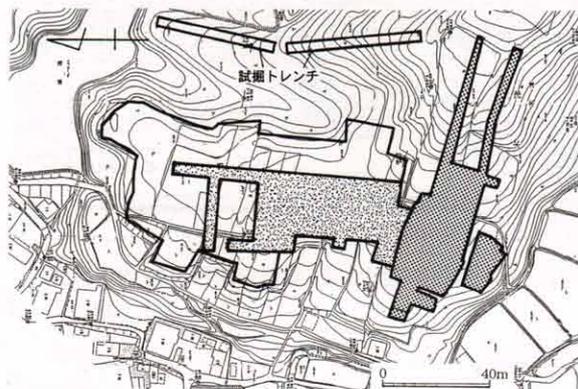
### 1. 調査の経過

内田山古墳群は、古墳時代中期の小型の方墳群で構成され、京都府立木津高等学校敷地内に分布するA支群(6基)と、尾根鞍部を介して南側に位置する丘陵尾根上のB支群(8基)に分かれる。また、A支群の尾根上には燈籠寺遺跡、B支群の尾根上では内田山遺跡など、弥生時代後期の高地性集落が複合して存在している。

調査地は、奈良山丘陵の北東部に所在し、丘陵から旧木津町市街地に向かって西北西方向にのびる支尾根上にあたり、JR木津駅の東側に位置する。今回の調査は、第6次調査で検出した内田山B3号墳・B4号墳と周辺部尾根上での面的調査、東側支尾根で遺構・遺物の確認を目的とした試掘調査を実施した。

内田山古墳群B支群の調査は、これまでに6次にわたる調査が行われ、第1次・第5次調査では、B1号墳は一辺約18mの方墳で、墳頂部から埴輪棺2基(SX01・SX02)と木棺直葬墓2基(SX153・SX154)の合計4基の埋葬施設を検出した。埋葬施設のうちSX154は、棺内に仕切り板を設け、土師器高杯を転用した枕が存在した。また副葬品では六獣形鏡1面が出土した。SX153は礫床で埴輪片を転用した枕が存在し、副葬品として鉄製刀子が出土した。墳丘部の調査では、古墳の規模・墳形を確認するとともに、弥生時代後期の竪穴式住居跡1基と掘立柱建物跡2棟を検出している。

第6次調査では、1号墳の北側尾根上から新たに3基の方墳(B2・B3・B4号墳)を確認したほか、弥生時代後期の竪穴式住居跡8基・溝、時期不明の掘立柱建物跡1棟を検出した。このうち面掘調査を行ったB2号墳は一辺約13mの方墳で、墳頂部中央から埋葬施設(SX12)を検出した。SX12は長さ約5m、幅約0.65mの組合式木棺を直葬し、棺内は仕切り板で4室に区切られ、主室とみる中央の2室は礫床で川原石の枕がそれぞれ存在した。枕の基数・位置関係から、東側主室には1体(東枕)、西側主室には交互に体を入れ替えた2体(東枕・西枕)の被葬者が埋葬

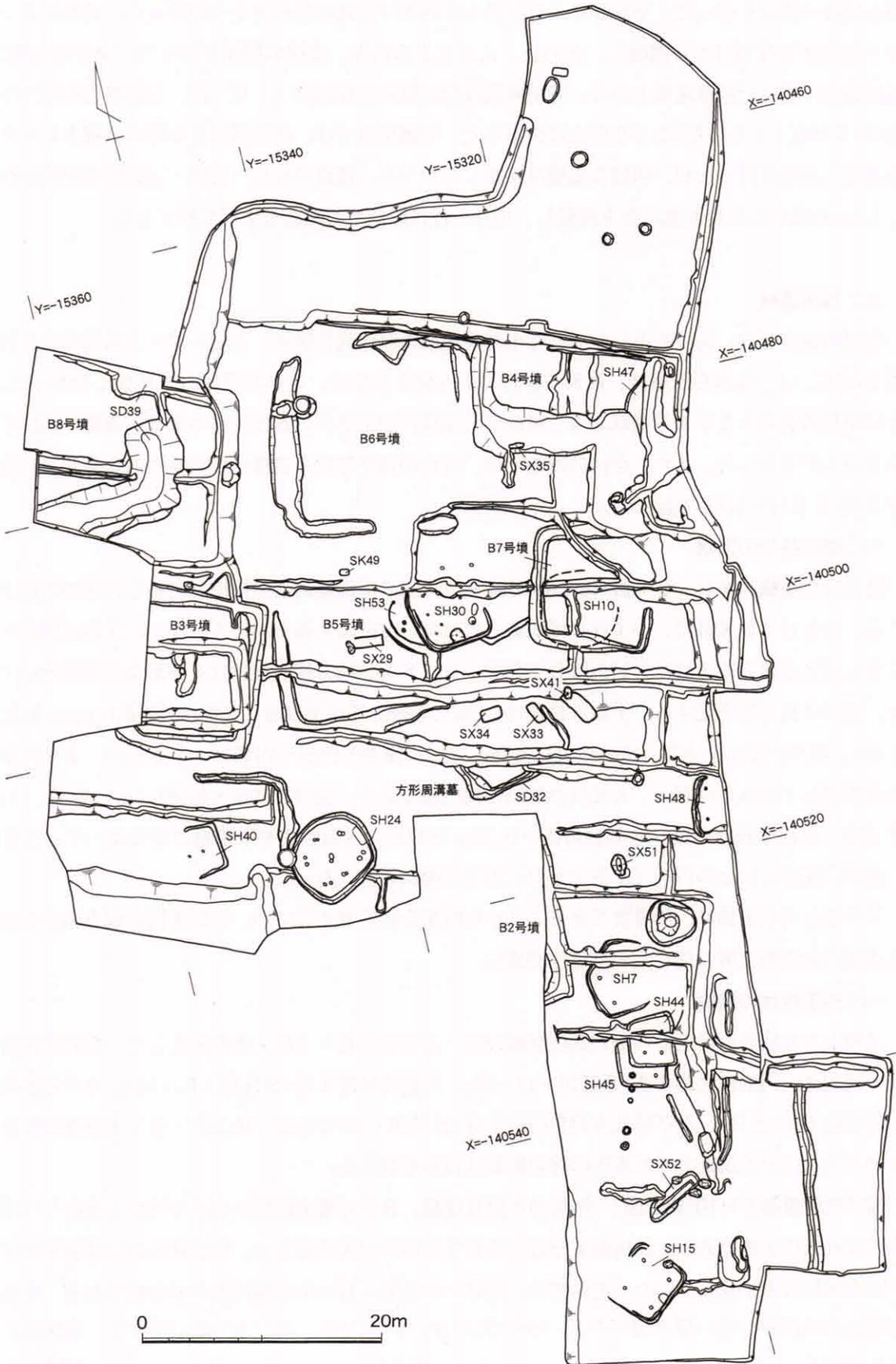


第1次～5次調査 第6次調査 第7次調査

第2図 内田山遺跡・内田山古墳群調査トレンチ配置図

されたと考えられる。副葬品として、東主室の枕周辺から内行花文鏡1面と多量の玉類と竪櫛数点が出土した。また、西主室では、鉄刀と鉄製鉞、竪櫛が出土した。主室以外では、西側小口部の副室から石製紡錘車2点の出土をみている。弥生時代では、竪穴式住居跡の平面形に円形・隅丸方形・方形の各形態がみられ、円形から方形への変化、住居の小型化傾向など変化の過程が明らかとなった。

今回の第7次調査は、都市再生機構が行った



第3図 第7次調査地平面図

樹木伐採の終了を待って、平成18年4月17日から調査対象地の地形測量を開始した。重機による表土掘削は5月15日から開始し、その後、人力による精査、遺構の掘削を行った。調査の結果、面的調査を行った西側尾根上から、弥生時代後期の竪穴式住居跡・土坑・溝、古墳時代中期の方墳(B5号墳～B8号墳)などを新たに検出した。東側尾根では、尾根筋に2か所の試掘トレンチを設定し調査を行ったが、明確な遺構は存在しなかった。遺構の検出・掘削・記録作業が概ね終了した9月23日には現地説明会を開催し、10月4日に現地での調査をすべて終了した。

## 2. 検出遺構

今回の調査では、尾根筋上を中心に弥生時代後期の竪穴式住居跡・土坑・溝・方形周溝墓と古墳を検出した。これら遺構は、後世の耕作により削平を受け、遺存状態はあまり良くなかった。特に尾根筋北端となる4号墳以北は、尾根が大規模に削平され、近世以前の遺構・遺物の検出をみることがなかった。また、今回の調査では、新たに縄文時代の遺構の可能性のある落とし穴状遺構2基(SX41・51)を検出した。

### (1) 縄文時代の遺構

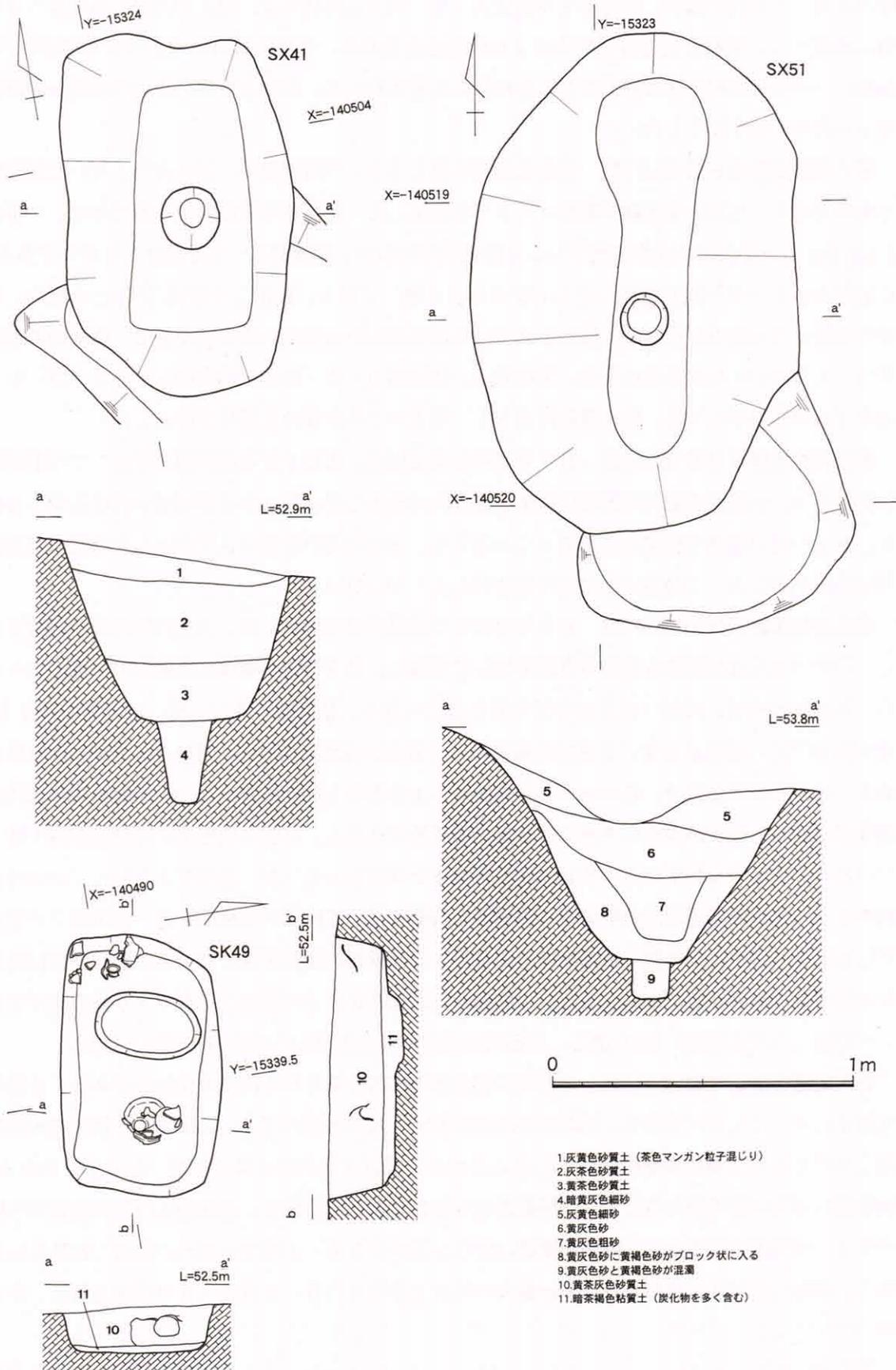
落とし穴状遺構SX41・SX51(第4図) 尾根中央部の東側緩斜面で検出した落とし穴状の遺構である。SX41とSX51は、いずれも尾根筋とほぼ同一方向に主軸を向ける。また、北側に位置するSX41と南側のSX51は約14m離れて存在する。SX41は、掘形上面は不整形な長方形を示すが、底面は長方形を呈する。上面の長径は1.2m、短径0.75mを測る。底面は長径約0.8m、短径0.4m、深さ0.55mを測る。底面中央に直径0.18m、深さ0.28mの円形ピットをもつ。土坑内から遺物の出土はみられない。SX51の掘形は楕円形であり、長径1.65m×短径1.1m、深さ0.7mを測る。底面は長径1.25m×短径0.25～0.35mを測る。底面中央やや南側にかたよって、直径0.18m、深さ0.14mの円形ピットをもつ。出土遺物はみられない。

この落とし穴状遺構は、無遺物であることから時期を特定できないが、類似遺構の調査例から縄文時代の動物捕獲用の落とし穴の可能性が高い。

### (2) 弥生時代の遺構

尾根上と丘陵斜面付近から竪穴式住居跡10基・方形周溝墓・土坑・溝を検出した。竪穴式住居跡の内訳は、円形住居跡3基(SH10・47・53)、方形住居跡4基(SH40・44～46)、その他多角形住居跡1基(SH7)及び隅丸方形住居跡2基(SH30・48)である。第5次・第6次調査例を合わせると、内田山遺跡の竪穴式住居跡の総数は18基を数える。

竪穴式住居跡SH10(第5図) 尾根の中央東端部、B7号墳南西部の墳丘下層から検出した円形の竪穴式住居跡である。住居壁部分はほぼB7号墳の周溝で壊され、住居跡の東部は削平が住居跡床面付近まで及んでいた。住居跡は、南東から北東に長いやや楕円形の平面形である。住居跡床面の外周部に浅い周壁溝が巡る。周壁溝は幅0.15～0.2m、深さ約0.05mを測る。周壁溝から確認できる住居跡の平面規模は、長径約6.9m、短径約5.8mを測る。床面中央部から炉跡を検出した。炉跡はやや歪な円形を呈し、床面を0.2mほどすり鉢状に掘り下げている。また、住居



第4図 落とし穴SX41・SX51、土坑SK49実測図

跡の床面では炉跡のほか、柱穴跡を多数検出した。検出した柱穴は、周溝の内側を巡るような配置の状況から、屋根を支える主柱穴は4か所と考えられる。床面に残る多くの柱穴の存在から、屋根については幾度か建て替えがおこなわれたと考えられる。床面上では、住居の西部と炉跡付近から弥生土器が出土した。

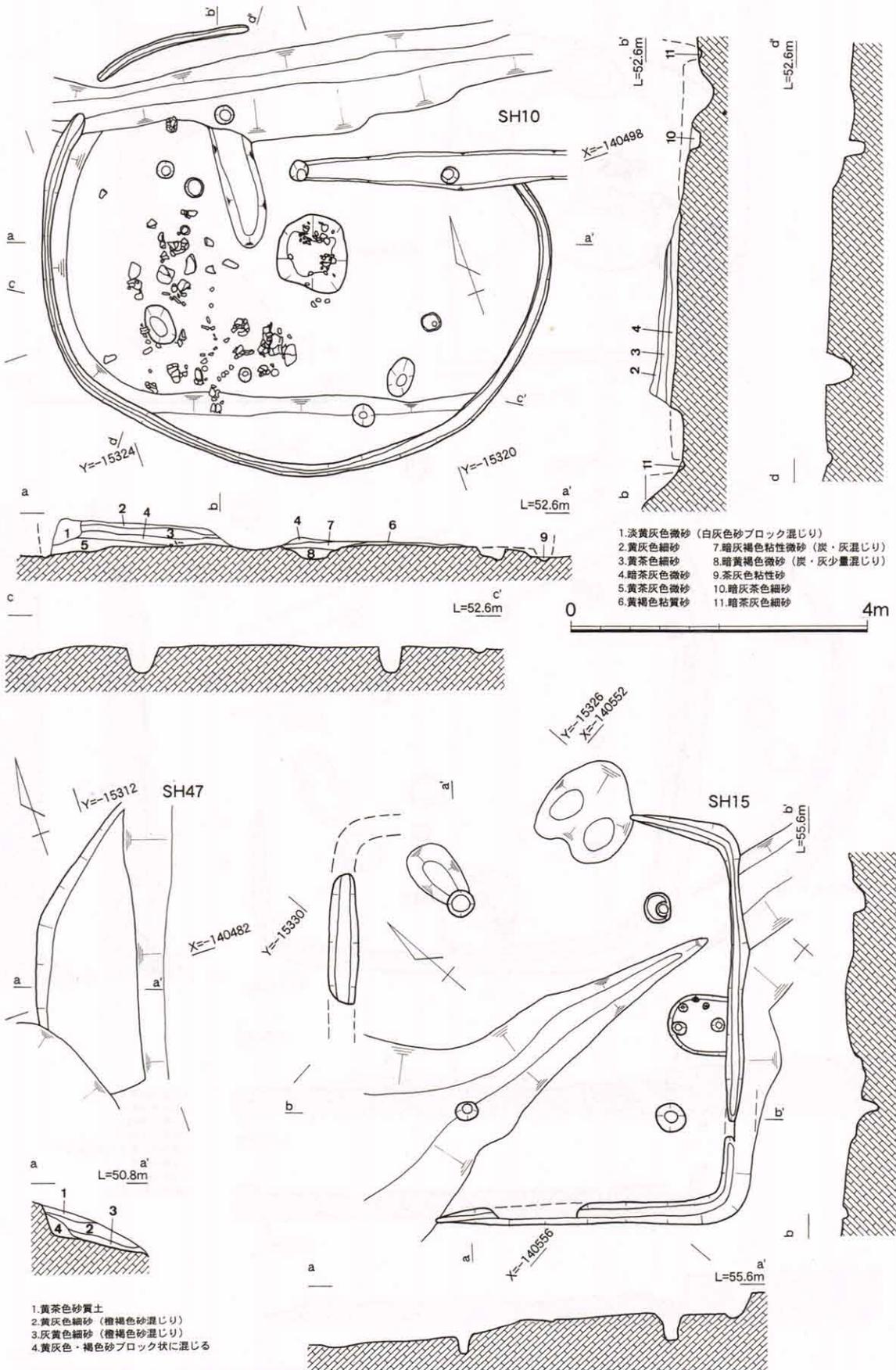
**竪穴式住居跡 S H15(第5図)** 第5次調査の第1トレンチ南端部で一部を検出していた竪穴式住居跡である。今回、住居跡の東側コーナーを検出した。住居跡の平面形は方形であり、一辺約5.6mを測る。住居跡の北半は削平により住居壁が失われ、周壁溝も一部を確認したのみである。住居跡の南コーナー部が壁面の立ち上がりをよく残しており、検出した壁高は0.3mを測る。床面の外周には住居壁に沿って、幅0.2~0.4m×深さ約0.08mの浅い周壁溝が巡る。住居跡の床面から、4か所の主柱穴を検出した。主柱穴は、住居跡コーナーのほぼ対角線上にあり、コーナーから1m前後内側に入る。出土遺物は乏しく、埋土中から少量の土器片が出土した。

**竪穴式住居跡 S H47(第5図)** B4号墳の南東部付近、東に下がる傾斜面で検出した円形の住居跡である。住居跡西部の床面と住居壁を部分的に検出した。柱穴および周壁溝は確認できないが、B4号墳の周溝が住居埋土を切っていること、また周辺の遺構の状況から弥生時代の竪穴式住居跡と判断した。この住居跡に伴う遺物は出土していない。

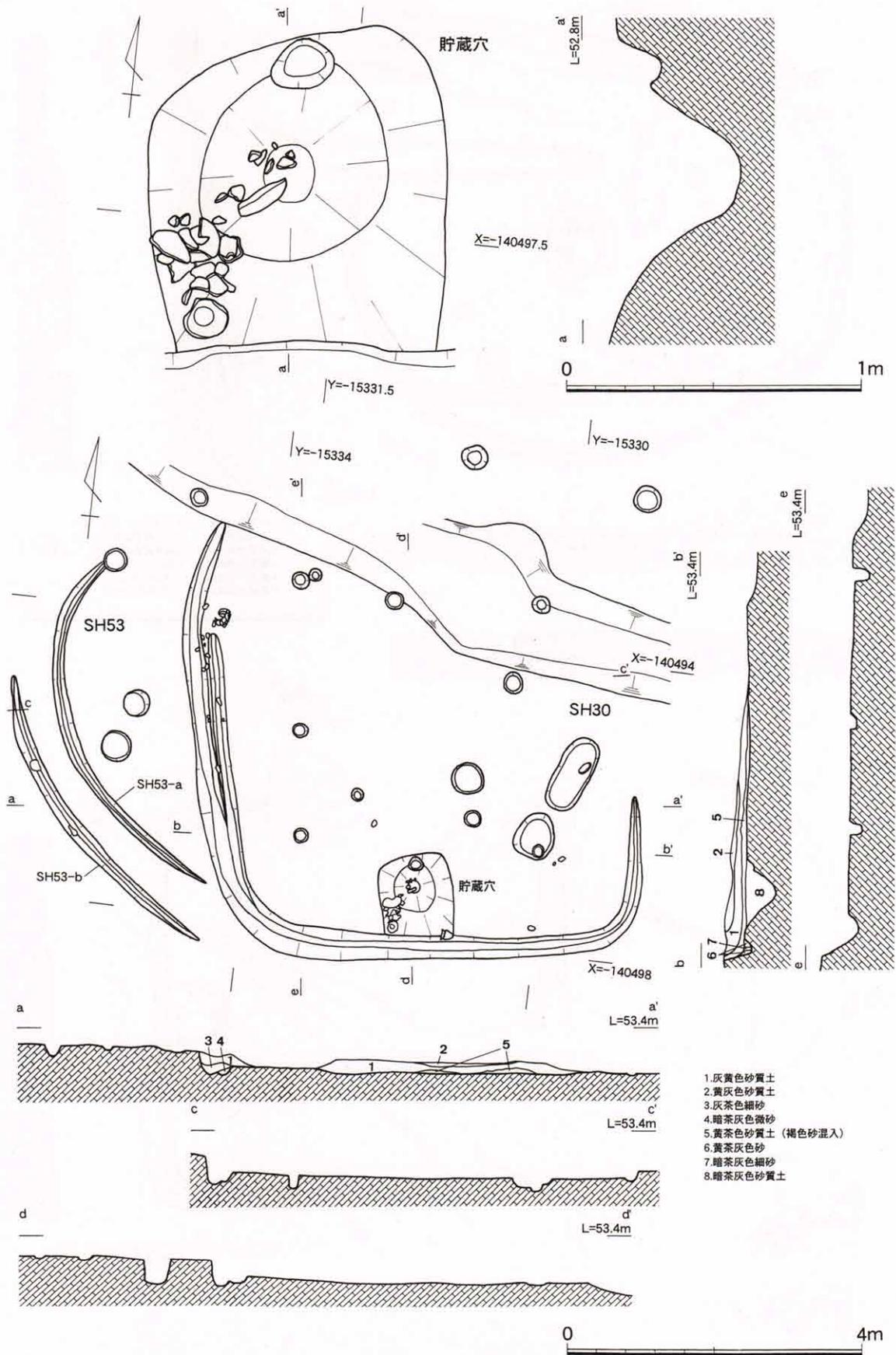
**竪穴式住居跡 S H30(第6図)** B5号墳とB7号墳の間で検出した、方形の竪穴式住居跡である。円形の竪穴式住居跡 S H53の東部を切って重複し、B5号墳の周溝に住居跡の一部を切られる。住居跡規模は、ほぼ一辺6mの正方形と考えられる。住居跡の各コーナーは直角ではなく、やや隅丸に近い形状を示す。S H30の床面は、S H53の床面からさらに約0.2m下がった位置にある。床面はほぼ平坦で、各コーナーの内側から4か所の主柱穴を検出した。床面外周には浅い周壁溝が巡る。住居跡西壁の下面には2重の周壁溝が存在し、外側の周壁溝が内側周壁溝を切っている。このような状況から、S H30は住居規模をほぼ変えないが、造り替えを行っていた可能性がある。住居跡床面南辺の中央部、周壁溝の内側に接して貯蔵穴を検出した。検出面での平面形は方形で一辺約1mを測る。掘形は中位付近までは壁面の傾斜が緩やかであるが、中位付近から底部までは傾斜が急になる。また、中位部から底部にかけての掘形は円形ですり鉢形を呈する。この貯蔵穴の深さは約0.4mを測る。貯蔵穴南西部の埋土上部から壺の破片が出土した。

**竪穴式住居跡 S H53(第6図)** S H30に住居跡の東部を切られた円形の住居跡である。住居壁は削平によって完全に失われ、弧状に巡る周壁溝の一部が検出できた。ほぼ同心円で0.6mの間隔をあけて巡る2条の周壁溝を検出したことから、最低1回の造り替えがあったと考えられる。周壁溝に切合い関係がみられず、住居跡埋土も存在しないことから、造り替えの先後関係は不明である。周壁溝の円弧から、内側周壁溝に伴う住居跡 S H53-a は7m前後の規模と推測される。また、外側の住居跡 S H53-b は8m前後の規模と推測される。S H53-a の周溝北端は、東方向に極端に弧を描く状況から、平面形が楕円形もしくは隅丸方形を呈する可能性もある。

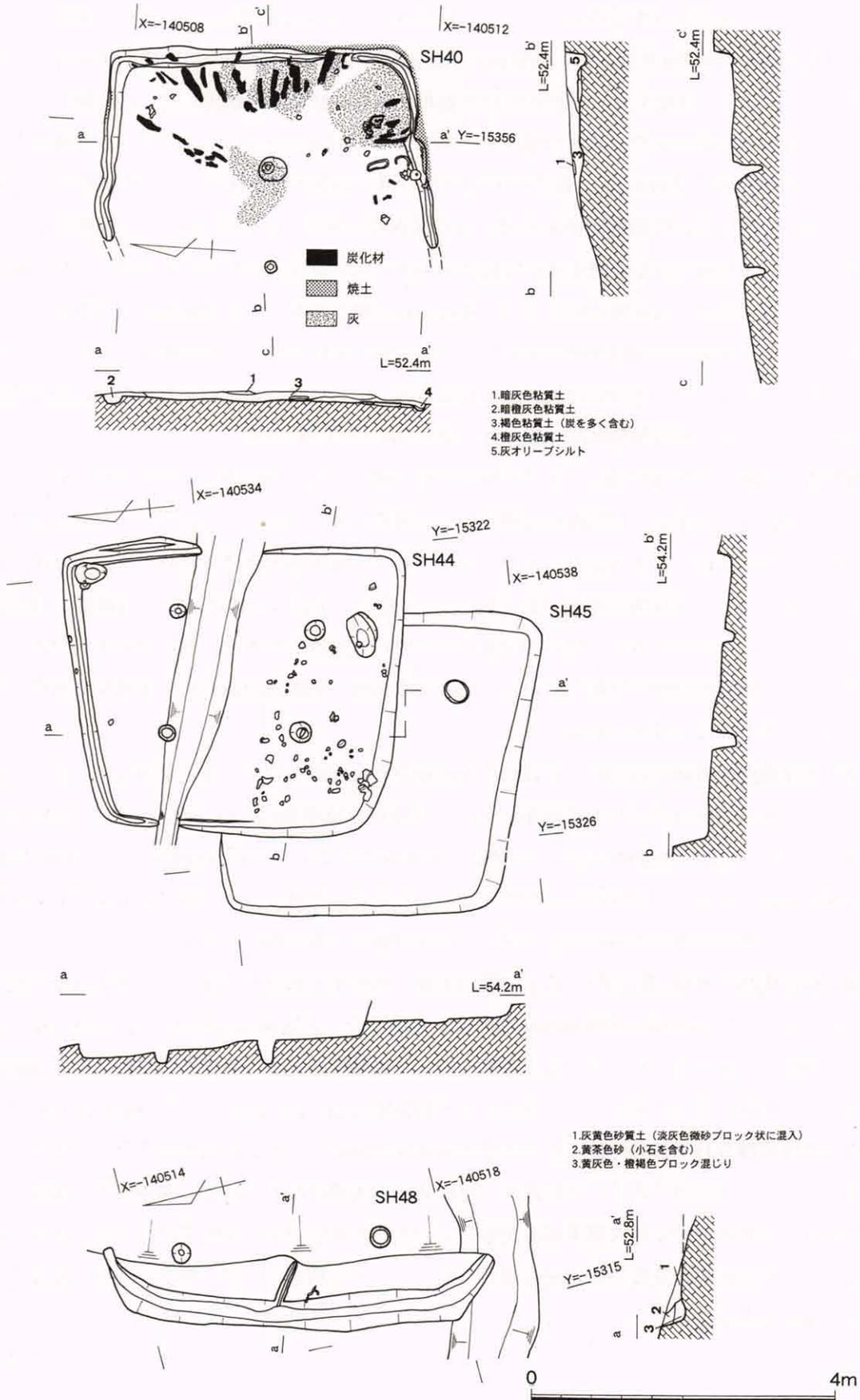
**竪穴式住居跡 S H40(第7図)** 尾根平坦部の中央部西端付近、B3号墳の南側で検出した方形の竪穴式住居跡である。住居跡の東半部はわずかに住居壁の立ち上がりが確認できたが、西半部



第5図 竪穴式住居跡SH10・SH15・SH47実測図



第6図 竪穴式住居跡SH30・SH53実測図



第7図 竪穴式住居跡SH40・SH44・SH45・SH48実測図

は削平によって床面全体が失われている。住居跡規模は南北方向で4.2mを測る。東壁の立ち上がりは周溝底から0.3mを測った。住居跡の検出過程で住居壁には部分的に焼土が存在し、埋土を除去したところ、床面上から屋根の骨材と思われる炭化材を多数検出した。炭化材は住居中央に向って放射状に横たわり、骨材の姿をとどめているのは住居跡壁面に近い0.8mの範囲内であった。床面の外周には幅0.2m、深さ0.05mほどの浅い周壁溝が存在する。床面で検出した炭化材の一部は、明らかに住居跡床面より低い周壁溝内部に延びるものが存在した(図版第4-2)<sup>(注6)</sup>。床面上では、炭化材のほかに焼土塊が住居跡中央部と南東コーナー付近にみられた。住居跡の南東コーナーから西に1m前後の付近では、棒状の石が横たわり、やや東側の地点で甕等の土器破片が出土した。住居内の調理空間が南東コーナー西部に求められる。住居跡内の床面では2か所から主柱穴を検出した。主柱穴は住居跡の中央にあって、東西に並ぶ心々間距離は1.3mを測る。比較的小さい円形の柱穴掘形は深く掘られ、深さは0.4mを測った。

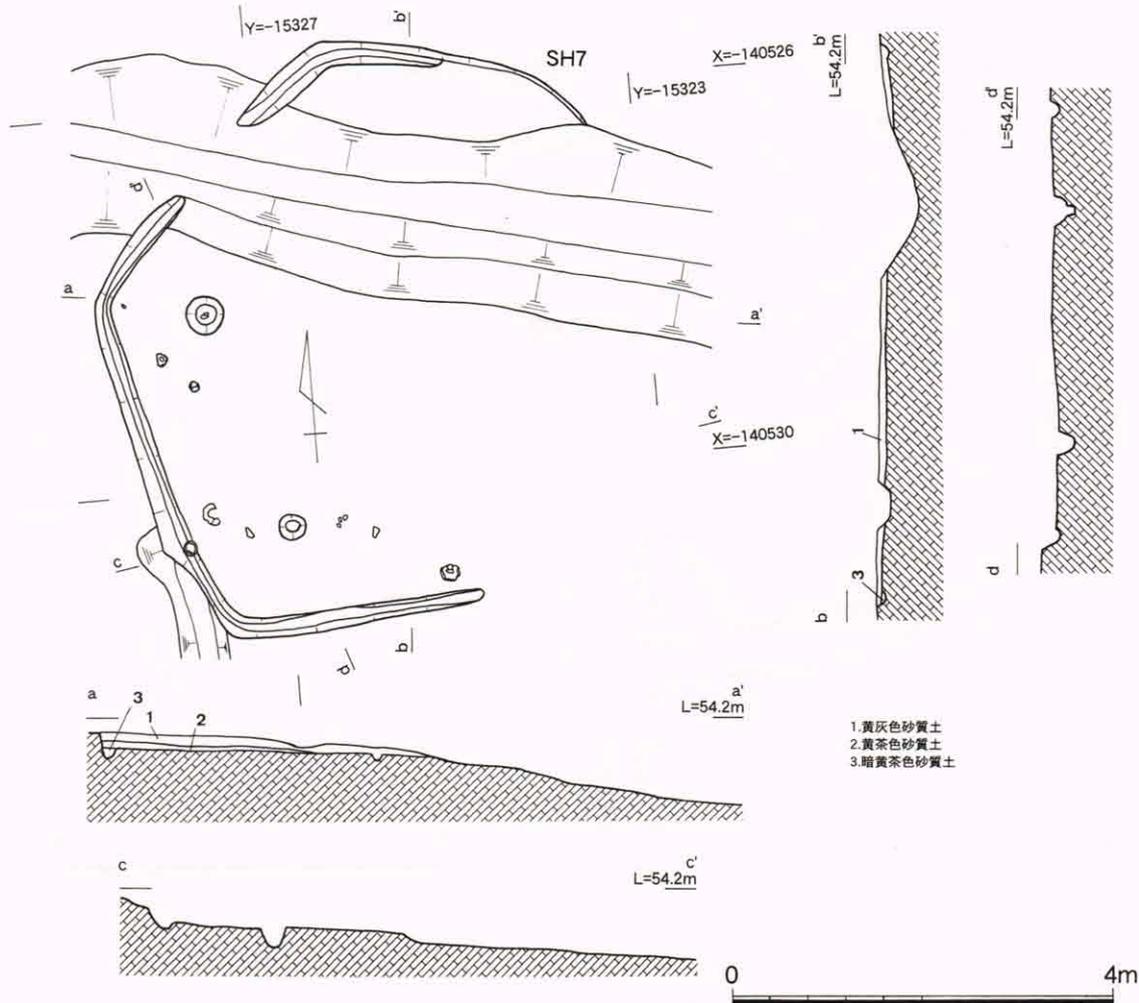
**竪穴式住居跡SH44(第7図)** B2号墳の南東で検出した。やや歪な方形住居跡で最大長南北4.6m、東西3.8mを測る。住居跡の東壁の長さが西壁に比べ、およそ1m長い。SH44は竪穴式住居跡SH45と重複し、SH45ののち、SH44がある。住居跡床面はSH45の床面より深い位置にあり、残りのよい南壁側の壁高は最大約0.4mを測る。床面はほぼ水平で、外縁部に周壁溝が巡る。主柱穴は4か所である。住居跡南部の埋土中から比較的多数の土器片が出土したが、土器片の多くは住居跡床面から遊離していた。住居の廃棄後、住居跡内に土砂が堆積する過程で多くの土器片が埋まったと考えられる。

**竪穴式住居跡SH45(第7図)** SH44と住居跡の北東部が3分の1ほど重複し、SH44に削られている。SH44とほぼ同一な平面形であり、西壁側が東壁側に比べて長さが短い。住居跡は、東西約4.0m、南北は西壁側で3.6mを測る。東壁側はおよそ4.4mと推測される。床面は浅く、周壁溝は確認できない。主柱穴は4か所と考えられるが、南東コーナー側に近い柱穴が1か所存在した。柱穴掘形は床面から0.05mと浅い。少量の弥生土器の破片が出土した。

**竪穴式住居跡SH48(第7図)** B2号墳の東側、尾根中央東斜面で検出した隅丸方形の竪穴式住居跡である。尾根筋側の住居跡西端部のみを検出した。住居跡は斜面地を南北約5.2m、幅約1mの範囲で斜面を削りだしている。壁面に沿って周壁溝が巡る。西壁から内側に約1m離れた床面で、2か所の柱穴を検出した。柱穴の心々間距離は約2.7mを測る。出土遺物はみられない。

**竪穴式住居跡SH7(第8図)** B2号墳の南西側に位置し、第5次調査第1トレンチで、一部を検出していた住居跡である。住居跡は、尾根筋から東側に緩やかに下る傾斜面の上端部にある。住居跡は、後世の削平で住居跡東部が失われ全容をつかめないが、平面形は六角形である可能性が高い。方形住居跡が重複する状況も考えられたことから精査したが、埋土に切合い関係を示す痕跡は確認できない。

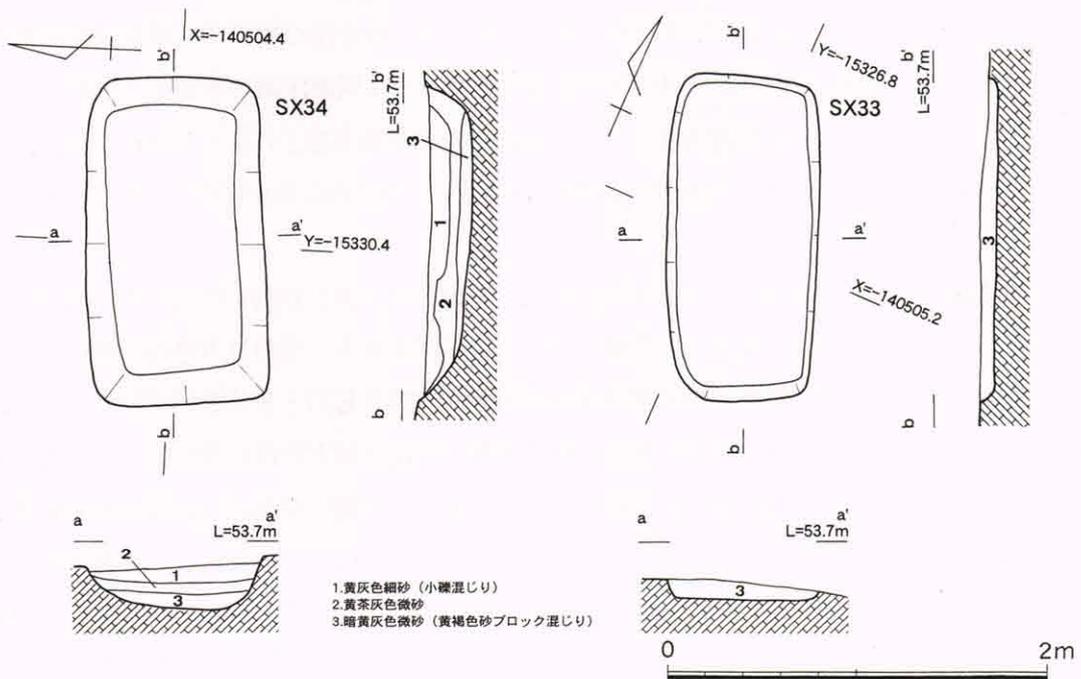
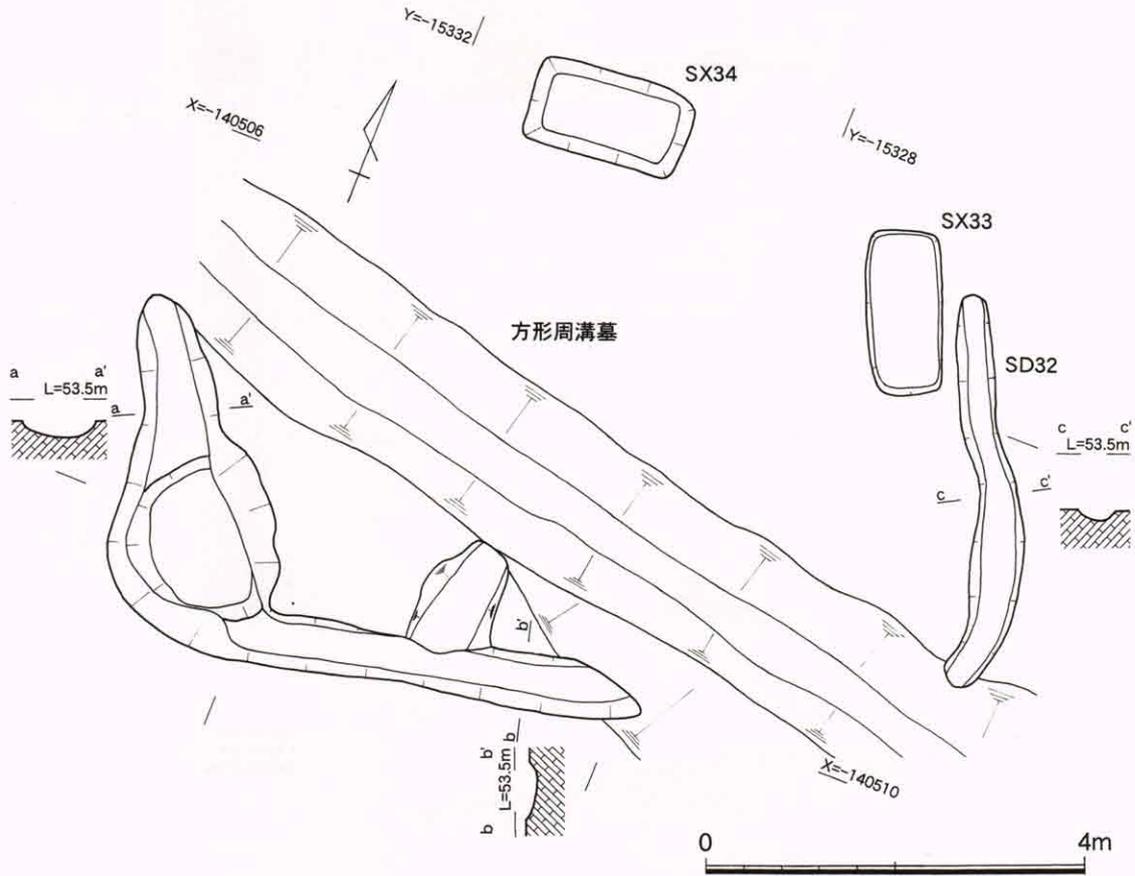
住居跡は、住居の北・西・南西の3か所のコーナーを検出した。各コーナーの内角は北側が約134°、西側で約117°、南西は約105°を測る。住居跡の平面形は、コーナー角度の数値がばらつく状況から、南西から北東方向に長径をもつやや縦長の六角形とみられる。住居跡の長径は



第8図 竪穴式住居跡SH7実測図

6.6mの規模を測る。住居跡床面はほぼ水平で、壁際に浅い周壁溝がめぐる。壁面は住居跡西部で最もよく残るが、壁高は床面からわずかに0.2mを測る。住居跡床面の西部の2か所で、支柱穴を検出した。支柱穴は、住居跡の各コーナーと住居中央を結ぶ線上にあり、壁面から1.2~1.3m離れている。支柱穴の掘形は円形で、直径0.3~0.4m、深さ約0.2mを測る。床面付近から土器片が出土した。

**方形周溝墓(第9図)** 尾根中央部の平坦面から、方形に巡る溝SD32を検出した。検出位置はSH30の南側であり、B2号墳とB5号墳・B7号墳に囲まれる。当初は方墳の周溝とみていたが、方形区画の内側から埋葬施設の可能性が高い2基の土坑(SK33・SK34)を検出した。また、SD32の主軸方位は北から西に大きく振り、他の8基の古墳とは方向性が異なる。SD32にみる方位の差は時期差を示すとみられ、弥生時代の方形周溝墓の可能性が高い。SD32の方位は北から西に約18°振る。SD32は方形区画の南辺と東西辺南側の範囲を検出したが、北側は削平されている。溝幅は0.6m前後、深さは0.2m前後で、方形周溝墓の規模は、東西方向で8.2mを測る。周溝墓の中心埋葬施設は確認できないが、方形区画の中央東端でSD32と軸線をあわせる土坑SK33を検出した。また、方形区画の中央部からやや北にかたよって、南辺のSD32と軸線がほぼ



第9図 方形周溝墓・土坑墓S X33・S X34実測図

合致する土坑 S K 34 を検出した。この 2 基の土坑は掘形平面形が長方形で、ほぼ同規模である。共に長径は 1.7m を測る。幅は S K 33 が 0.8m、S K 34 が 0.9m を測り、近似している。S K 33・S K 34 は、出土遺物が無く木棺痕跡も確認できないが、S D 32 との関連性や他の類例等からみて土壙墓と考えられる。

土坑 S K 49 (第 4 図) S H 53 の北西で検出した長方形掘形をもつ土坑である。土坑は長さ約 0.9m、幅約 0.5m、深さは約 0.2m を測る。土坑底はほぼ水平で、中央やや西側に楕円形の浅いピットが存在する。ピットは長さ 0.35m、幅 0.2m、深さ 0.04m を測る。土坑内から弥生時代後期の甕が出土した。

### (3) 古墳時代の遺構

第 6 次調査で B 3 号墳と B 4 号墳の周溝を検出していたが、今回の調査で新たに 4 基の方墳 (B 5・B 6・B 7・B 8 号墳) を検出した。墳丘は後世に大きく削平され、調査前の地表面の観察では古墳の存在を示す状況はまったく観察できなかった。B 5・B 6・B 7・B 8 号墳の 4 基の方墳は B 2 号墳の北側に位置する。B 支群の古墳が存在する尾根では最も幅が広がる場所でもあり、東西方向に 3 基 2 列 (B 3 号墳・B 5 号墳・B 7 号墳と B 4 号墳・B 6 号墳・B 8 号墳) の古墳が整然と並ぶ状況にある。古墳以外では、埋葬施設 S X 52 を単独で検出した。

#### 内田山 B 3 号墳 (第 10 図)

第 6 次調査で周溝 (S D 1) の一部を検出していた方墳である。今回の調査で、後世の削平で失われた墳丘西側を除く、周溝の大部分を検出することができた。この調査により、北西側を除く 3 か所の古墳コーナーを検出し、古墳の規模が判明した。B 3 号墳の規模は、周溝底墳丘裾で、東西約 9m、南北約 11.7m を測る。古墳の方位は北から東に約 21° 振る。

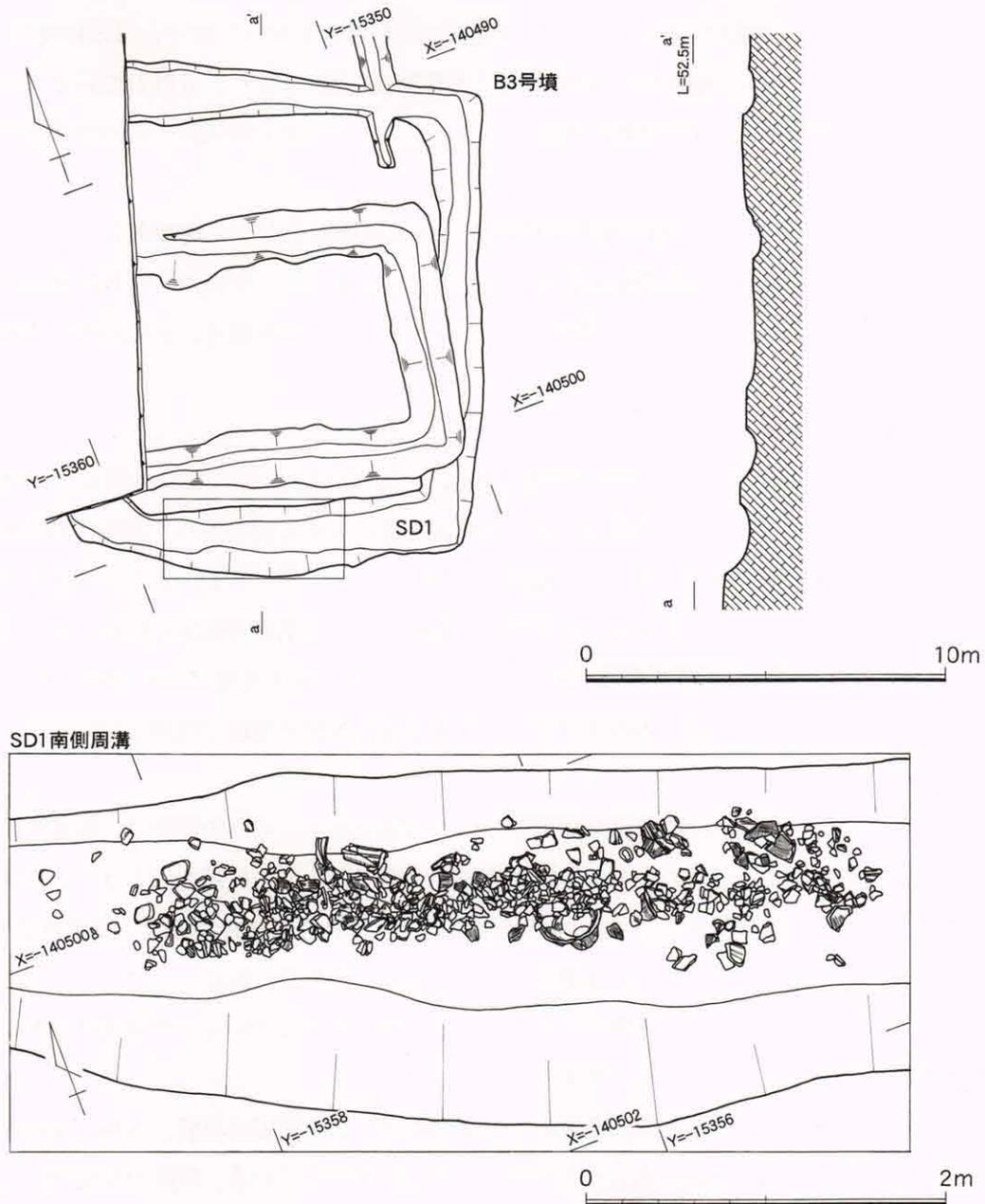
**墳丘** 後世の耕地化で、周溝底よりさらに深く削り取られている。墳丘高は不明である。

**埋葬施設** 墳丘と共に削平され、検出できなかった。

**外部施設** 古墳の周囲を巡る周溝を検出した。周溝は、B 3 号墳の北側と南側と東側の 3 辺の周溝を検出することができた。残る古墳西側の周溝は削平されている。周溝の規模は、北側周溝で幅約 1.3m、深さ約 0.2m、南側周溝で最大幅約 2m、深さ約 0.5m を測る。古墳が尾根西側斜面部に築かれたことから、底面は東から西方向に下がり傾斜をもつ。周溝の中層 (黄茶色粘質土) に埴輪破片が多量に存在し、特に南側周溝部分に集中している。この南側周溝では円筒埴輪と朝顔形埴輪の破片が多量に出土した。古墳築造後、周溝底に土砂が堆積する一定の時間が経過した後、墳丘上の埴輪が破片化して周溝内に転落、堆積したと考えられる。埴輪片は北側周溝にもみられたが、出土量は南側周溝に比べ圧倒的に少ない。この北側周溝では、家形埴輪の屋根の一部が出土した。

#### 内田山 B 4 号墳 (第 11 図)

B 3 号墳と同じく、第 6 次調査で周溝 (S D 3) の一部を検出した方墳である。古墳群のうち最も北東部に位置する。古墳の北側は後世に大きく削平されており、南西コーナーを中心に周溝を検出した。古墳の方位は、北から東に約 10° 振る。

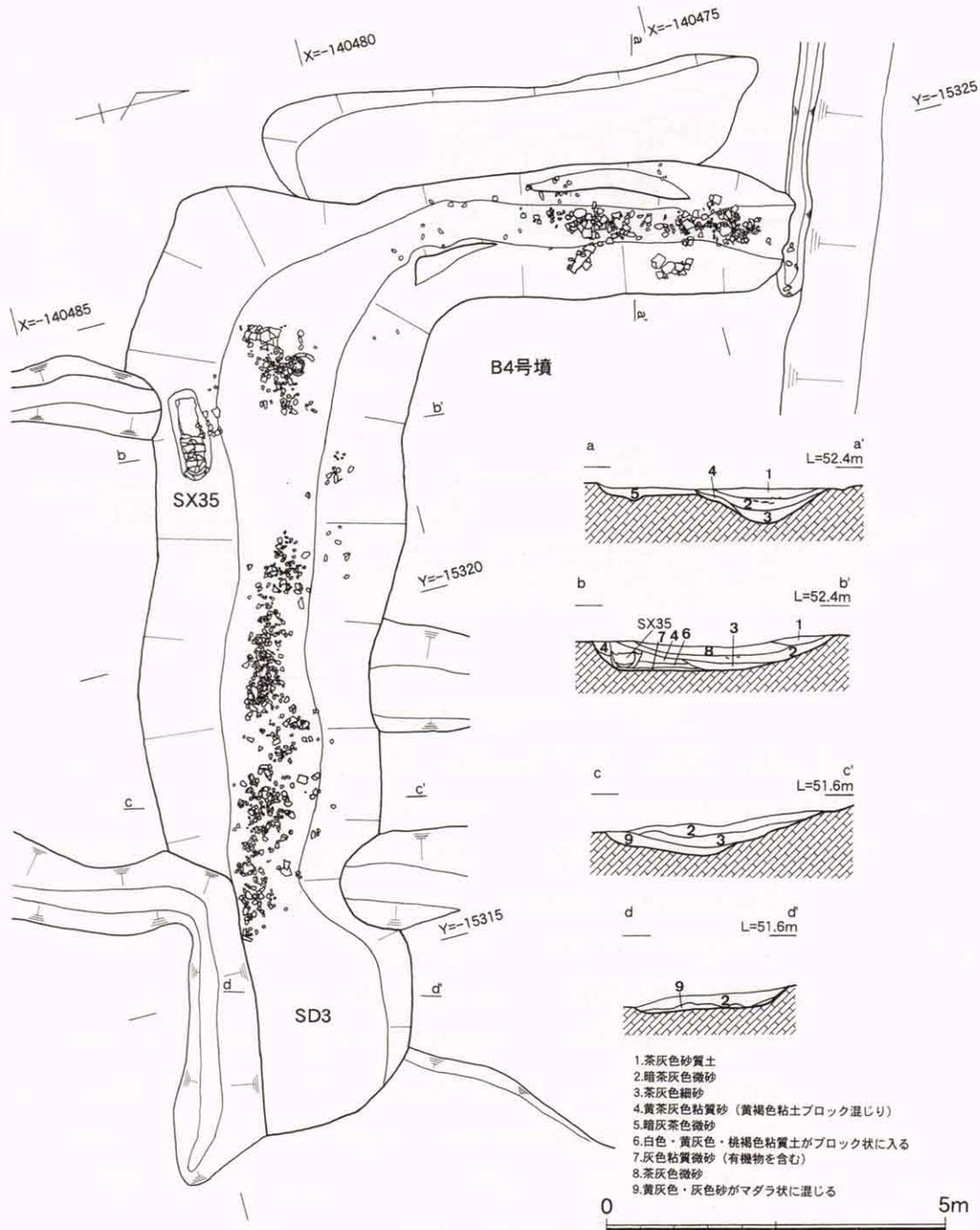


第10図 B3号墳実測図

**墳 丘** 墳丘は地山を残し完全に失われている。検出した地山面が周囲からやや盛り上がる状況から、このB4号墳は尾根筋の高まりを利用して築かれたと考えられる。古墳の東側は尾根斜面であり、盛土の流出が著しい。

**埋葬施設** 墳丘と共に削平されており不明である。

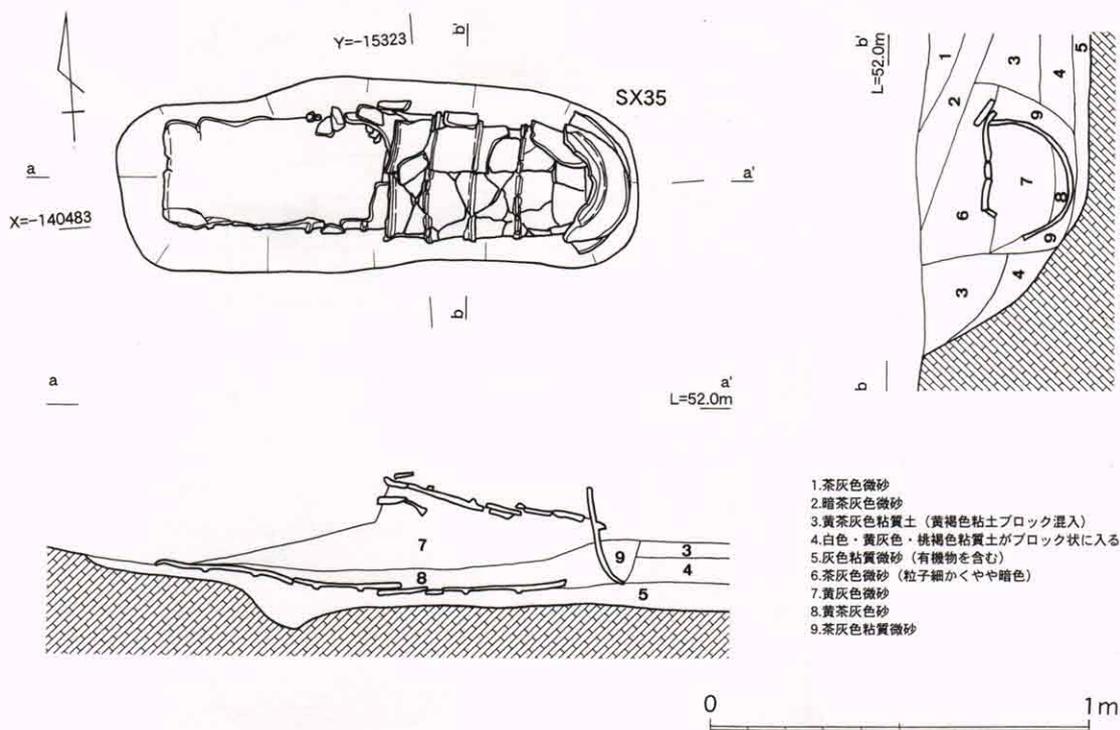
**外部施設** 墳丘を巡る周溝を検出した。さらに周溝内から溝中埋葬と判断する埴輪棺(S X 35)を検出した。周溝は、西に隣接して築かれたB6号墳の周溝と切合い関係にあり、4号墳の周溝(SD4)がB6号墳の周溝を切っている。周溝は、B4号墳の南西コーナーを基点に北へ約5.5m、東に約12mの範囲を検出した。北方向に延びる西側周溝は、幅約2m、深さ約0.5mを測る。周溝底はほぼ水平である。南側周溝は幅約3.5m、深さ0.5mの規模を測り、西側周溝に比べて幅が広がる。東方向に延びる南側周溝は、尾根の傾斜に応じるように西から東方向に傾斜し、西側



第11図 B4号墳実測図

周溝底と南側周溝東端底面との比高差は約1mを測る。周溝中央から墳丘側にかけて埴輪片が集中して出土した。また、大多数の埴輪片は周溝底から遊離していることから、周溝内に土砂の堆積が進んだ時点で、埴輪片が堆積している。埴輪片のうち大多数を円筒埴輪が占めるが、少量ではあるが壺形埴輪も含まれている。

埴輪棺 S X 35(第12図) 第6次調査の第1トレンチ壁面で、周溝の堆積土を掘り込む埴輪棺を一部検出していた。今回の調査で埴輪棺全体の調査を実施した。S X 35は、B4号墳の南西墳丘外にあって、掘形がB4号墳南側周溝の埋土を切っている。掘形は、南西外周コーナーから東約3mに位置する。埴輪棺の掘形は東西に長い楕円形で埴輪棺より一回り大きく、長さ約1.5m、



第12図 B4号墳周溝内埋葬施設SX35実測図

幅約0.45mの規模を測る。掘形は、底面の横断面形が埴輪棺の形状にあわせて丸みを帯び、周溝底に堆積する黄茶灰色砂質土を切っている。SX35の主軸は、東から南に約 $5^{\circ}$ 振る。

SX35は円筒埴輪2個体を結合させて棺とし、東側小口と埴輪の円孔部を別の埴輪破片でふさぐ。棺身となる円筒埴輪はそれぞれ口縁部を西に向け、東側円筒埴輪の口縁部内にもう一方の円筒埴輪基底部を差込んで結合する。結合部は0.21mの範囲で入れ子になる。埴輪棺の長さは約1.1m、結合部の円筒埴輪の基部の内径は0.22mの規模を測る。棺内は土砂で完全に埋まり、丁寧に土砂を除去したが内部は無遺物であった。埴輪棺の西半部分は、後世の攪乱の影響で、円筒埴輪の上部と小口の閉塞部を失っている。埴輪棺の東小口は、打ち欠いた朝顔形埴輪の口縁部を利用して小口のふさぎとしている。朝顔形埴輪での小口閉塞は、口縁部を下にして内側を棺身に向け、頸部が棺の小口を覆いかぶさるように設置されている。攪乱で失われた埴輪棺の西側小口においても、東側小口と同様に朝顔形埴輪の破片で閉塞していた可能性が高い。

内田山B5号墳(第13図)

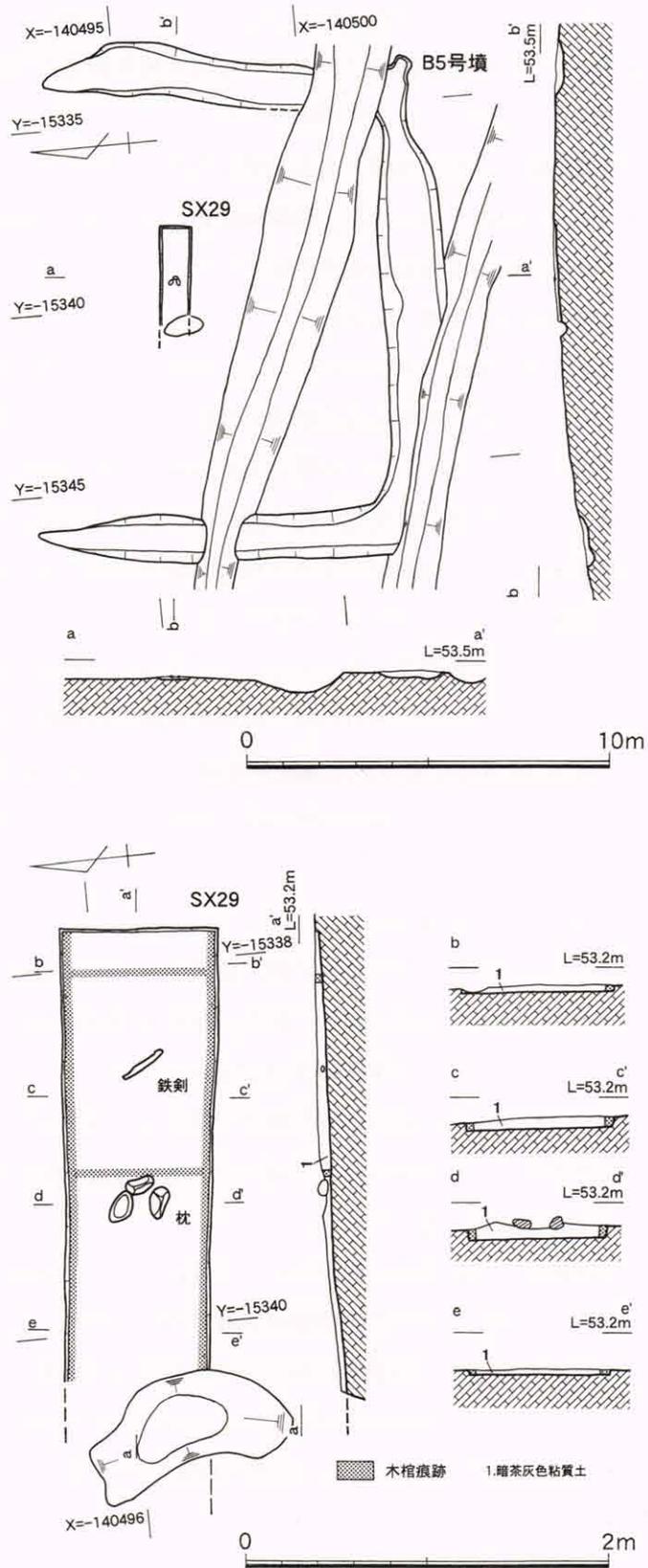
B2号墳の北側で、西側のB3号墳と東側のB7号墳の間に位置する。また、北にはB6号墳が存在する。B5号墳は尾根上の平坦部に築かれ、東西約12mの規模を測る。南北規模は不明であるが、ほぼ方形の方墳と考えられる。古墳の方位は北から東に約 $4^{\circ}$ 振る。

墳丘 後世の耕作に伴う削平で墳丘盛土は失われている。墳丘高は不明であるが、埋葬施設の木棺が検出できたことから、墳丘高はそれほど高くないと考えられる。

埋葬施設SX29(第13図) 古墳中央部から地山を掘り込む埋葬施設SX29を検出した。

SX29は木棺直葬墓であり、主軸は東から南に $6^{\circ}$ 振る。埋葬施設の遺存状況は悪く、東部側

の棺底部をわずかに残すのみで、墓壙の大部分は後世の削平で失われている。墓壙掘形は不明であるが、B2号墳埋葬施設SX12と同様な二段墓壙と考えられる。木棺を据え付ける掘形が埋葬施設東側で確認できた。木棺掘形は東小口から西に2.45m分を検出し、幅約0.78m、壁高は最大で0.08mを測る。木棺掘形の精査で、掘形の内側から棺材の痕跡を検出した。棺材は腐朽過程で土に置きかわり、棺内埋土(淡茶灰色土)よりやや暗色が強い棺材痕跡が確認できた。この痕跡にみる棺材の厚さは約4cmを測った。棺材痕跡の長側板は木棺掘形の内壁に沿い、掘形東端にまで達している。木棺は組合式で東小口の小口板が長側板の内に入る、いわゆる「H形木棺」と呼ぶものである。小口板は長側板の東端から西に約0.24m内に入る。また、棺内は仕切り板で区画されている。仕切り板は、長側板東端から西に1.32mの位置に存在する。この仕切り板の西側から、3個の川原石を配石した枕施設を検出した。枕に使用された川原石は、拳より一回り大きく、やや平たい石が使用される。3個の石は「コ」の字形に配置され、空間側を西に向ける。この枕の形状から、被葬者は東枕で安置されていたと考えられる。B2号墳埋葬施設SX12に存在した礫床はこのSX29では認められなかったが、枕石の下面と掘形底面との間にわずかに土砂が入られていた。後頭部が置かれたとみる東端の石は墓壙底から1cmほど遊離し



第13図 B5号墳・埋葬施設SX29実測図

ている。頭の両横に位置する残る2石は、5～6cmほど墓壙底から遊離する。棺は底板を持たないと考えられることから、棺内主室には薄く土を張っていたようである。枕石下の土は、特に選別された土の使用は観察できない。仕切り板を挟んだ東側は副室とみられ、ほぼ中央付近の床面から鉄剣(第19図1)が1点出土した。

**外部施設** 古墳の周囲を巡る周溝SD36を検出した。SD36は、北側周溝部を除き、東西と南側の3方の周溝を検出した。周溝幅は約1.5m、深さは最大0.4mを測る。周溝内から、わずかな量ではあるが円筒埴輪の破片が出土した。

#### 内田山B6号墳(第14図)

B5号墳の北側、東側のB4号墳と西側のB8号墳に挟まれた方墳で、尾根上の平坦部に築かれている。古墳の周囲を巡る周溝を検出したことから、B6号墳は東西13.5m、南北約14mの規模であることが判明した。古墳の方位は北から東に約11°振る。

**墳丘** 後世の耕地化に伴う削平で、墳丘は完全に失われている。

**埋葬施設** 墳丘の削平により、埋葬施設は検出できなかった。

**外部施設** B6号墳を巡る周溝SD27を検出した。このSD27は北東コーナー東肩部が東に隣接するB4号墳の周溝に切られている。SD27は各所で途切れる部分があるが、B6号墳の四辺で周溝が確認できた。SD27は、古墳の北側では幅約1m、深さは0.2mを測る。西側は幅約2.2m、深さは0.4mを測る。周溝底に堆積した暗茶褐色粘質砂層の上部、周溝底から数cm遊離して埴輪片が出土する。埴輪は西側周溝に数多く存在する。特に西側周溝の中央付近で、家形埴輪の壁面部分が集中して出土した。

#### 内田山B7号墳(第14図)

B5号墳の東側、B4号墳の南に位置する小型の方墳である。古墳の規模は一辺約9mを測る。古墳の方位は北から東に約15°振る。尾根東側斜面上部に築かれた古墳であり、墳丘部分の下層には弥生時代の竪穴式住居跡SH10が存在した。

**墳丘** 後世の耕作に伴う削平で墳丘盛土は失われている。

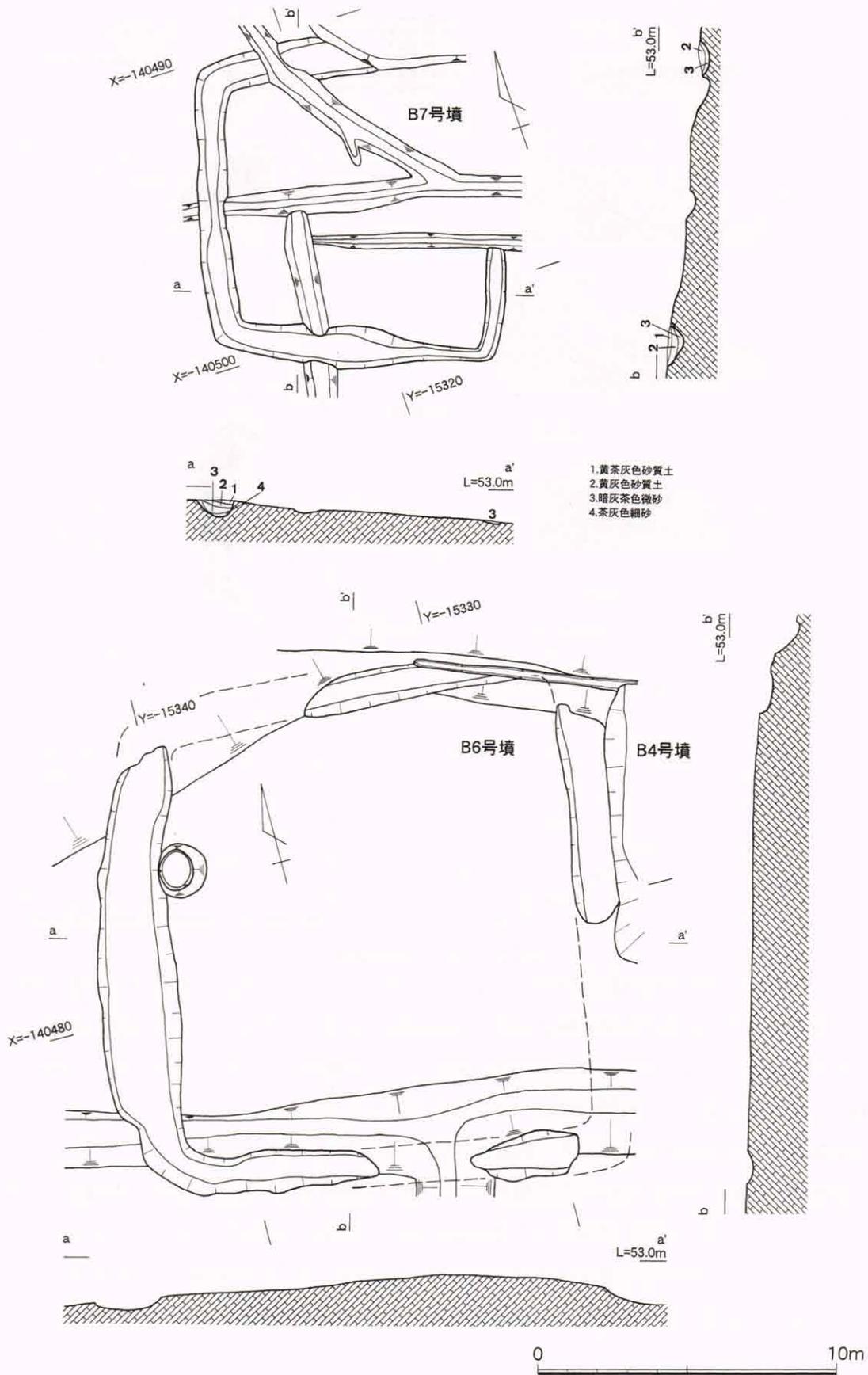
**埋葬施設** 後世の耕作に伴う削平で、埋葬施設は確認できない。他の古墳と同じく木棺直葬が主要な埋葬施設と考えられる。

**外部施設** 墳丘を巡る周溝SD31を検出したが、北東コーナー部分が失われている。

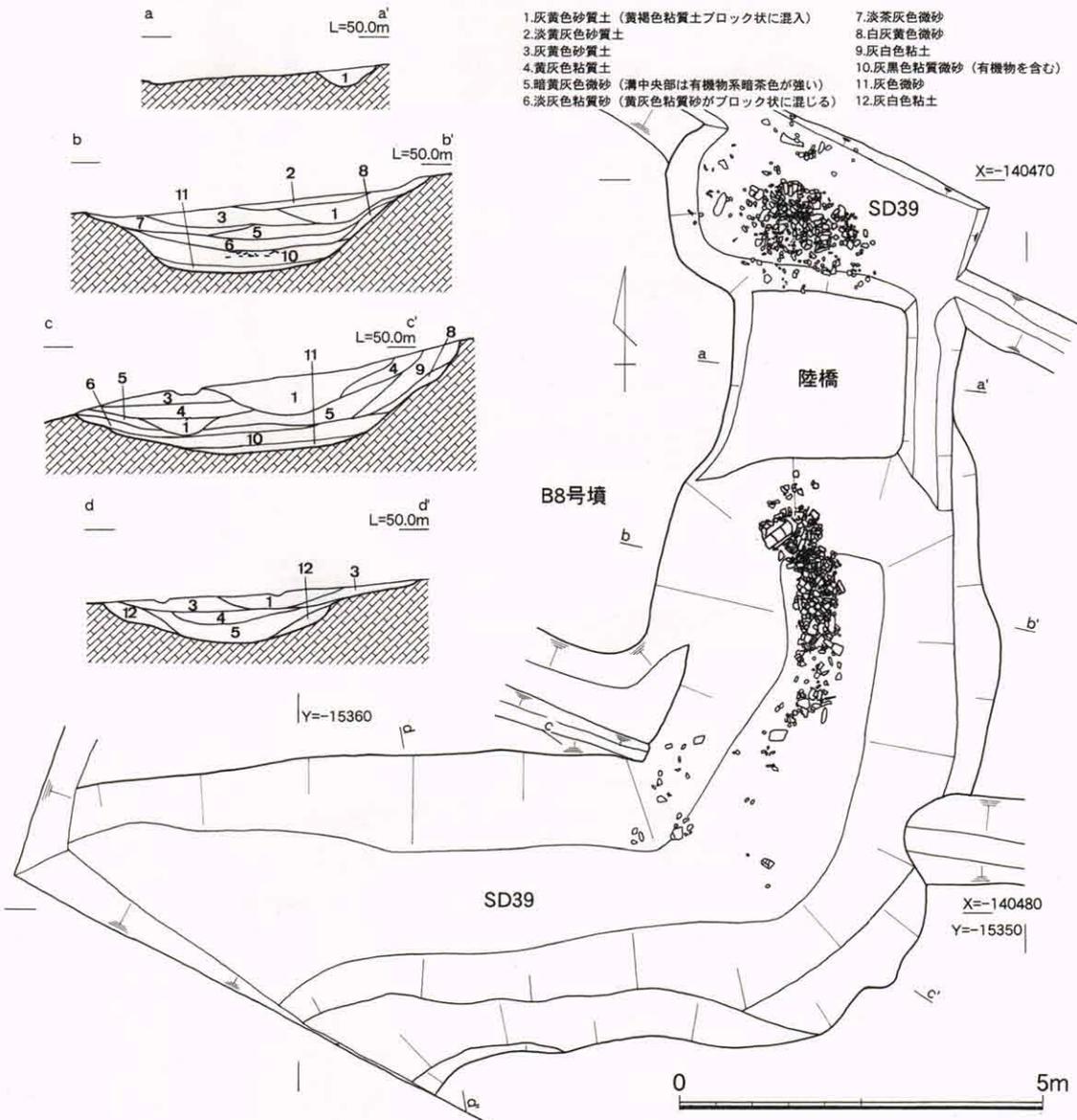
SD31は尾根上部の古墳西側が良好に残り、幅約1.4m、深さ約0.5mの規模を測る。周溝底面はほぼ水平に近い。周溝内の埋土には、竪穴式住居跡SH10に関連するとみられる弥生式土器が混入していたが、埴輪は含まれない。古墳時代の遺物として、西側周溝内から石製紡錘車(第19図3)1点出土した。また、周溝の検出に伴う精査の折、周溝埋土上面で平安時代の土師皿が出土した。

#### 内田山B8号墳(第15・16図)

B8号墳は、尾根筋から西にやや離れた緩斜面に築かれた方墳である。古墳の東側が尾根筋に続く高所側であり、緩やかに西に下る緩斜面に築かれている。B支群の中では最も北西端に位置



第14図 B6号墳・B7号墳実測図



第15図 B8号墳実測図

している。墳丘は後世の耕地化に伴い、大きく削平されている。古墳の全体規模は不明であるが、周囲の地形からB8号墳の検出範囲は古墳の南東部約4分の1と考えられる。古墳の南東コーナーを基点に北に約7m、西に約8mの範囲を検出した。古墳の方位は北から西に約1°振る。

**墳丘** 墳丘盛土は、後世の耕作に伴う削平で失われている。

**埋葬施設** 後世に削平されており、埋葬施設は不明である。

**外部施設** 古墳の東側に存在する陸橋部と、古墳を尾根から切り離して区画する周溝SD39を検出した。SD39は、地形の状況から、尾根斜面となる西側には延びていなかった可能性が高い。SD39は、尾根と古墳を切り離す区画溝であるが、尾根筋に続く古墳東側の一部を陸橋状に掘り残す。陸橋部は東西4m×南北2mの規模を測り、上面は平坦に整えられる。B8号墳の墳丘部は盛土が失われて地山が露出し、陸橋上の上面は墳丘地山面から約0.1m低い位置から検出した。周溝を検出した段階では陸橋の存在が判明せず、陸橋は周溝埋土で完全に覆われていた。このよ

うな検出状況から、陸橋は古墳築造時の姿を残すとみられたため精査をおこなったが、遺構は存在しなかった。

周溝SD39は、B1号墳を除く他の古墳周溝に比べ規模が大きく、周溝幅は約4mを測る。また、陸橋を挟んで南側の周溝と北側周溝は、深さに大きな差が認められた。陸橋の南側周溝部の深さは約1.4mを測り、周溝底にかけて急勾配で掘り下げられる。対する陸橋北側は、幅は4mで南側と同規模であるが、深さは0.3mと極端に浅い。陸橋北側の周溝は検出長が2.5mと短く、全体の状況を把握できないが、周溝の傾斜状況から浅いものと思われる。南西平地側からの古墳の見栄えを意識し、古墳背後の周溝は形を重視し、簡略化して仕上げていた可能性がある。陸橋南側のSD39は、周溝最下層の灰色微砂がおよそ0.1mの厚さで堆積し、その上に0.2m前後の厚さの有機物を含む灰黒色粘質微砂層が堆積する。SD39では、多量の家形埴輪片の出土をみたが、大部分はこの灰黒色粘質微砂層中から出土している。陸橋北側では、調査範囲内にこの灰黒色粘質微砂層は確認できない。

SD39は、奈良時代末～平安時代には完全に埋没していたとみられ、周溝外縁に沿って素掘り溝が掘り直されていた。この溝は、陸橋の東端部では幅約0.8m、深さ約0.3mを測るが、古墳南側では溝が約3m、深さ約0.9mに増大し、西に向かって大きく下がる。溝の埋土は、SD39の埋土とは明瞭に識別ができ、灰黄色砂質土の中に黄褐色粘質砂がブロック状に混入し、土馬の一部が出土した。

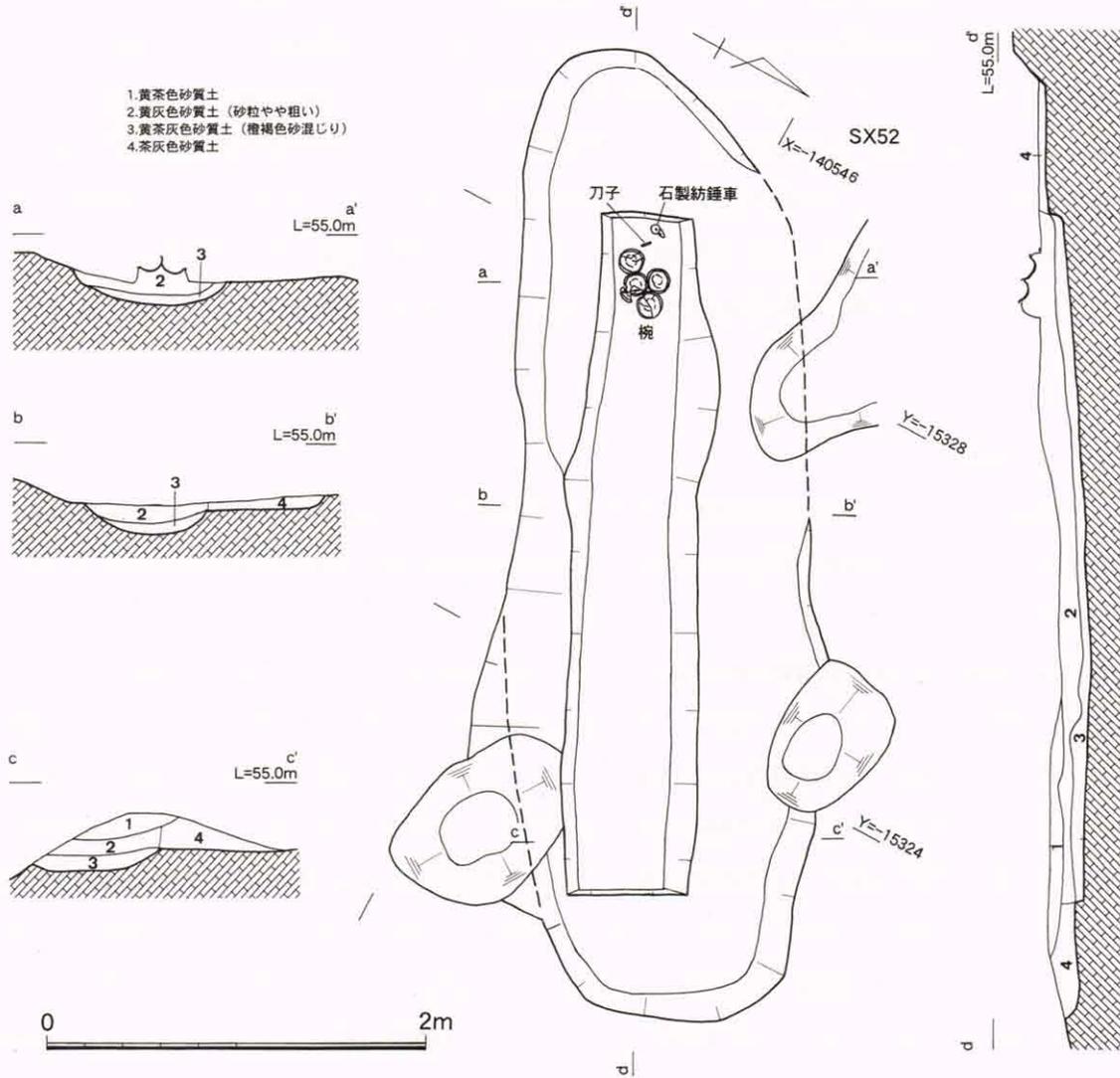
埴輪出土状況 古墳東側の周溝内から多量の家形埴輪の破片が集中して出土した。取り上げ後の整理作業の中で、家形埴輪に混じって船形埴輪の破片も含まれることが判明した。特に家形埴輪の破片は、古墳の東側、陸橋を挟んだ南北のSD39内に集中する。SD39陸橋南側での調査を進めた中で、最も早く姿を現したのが家形埴輪1の切妻屋根部分であった。大型の破片とみて周囲の土砂を慎重に除去していく過程で屋根全体が姿を現し、さらに壁面が壊れていない状況が明らかとなり、家形埴輪1はほぼ完全な形を保って周溝内に埋没していることが判明した。この家形埴輪1は陸橋の南辺直下から出土している。この家形埴輪1(図版第15-1)が他の破片群の北端にあり、南方向に向かって約3mにわたって家形埴輪の破片が集中する。破片を取り除くうち、家形埴輪1の東隣から天地が逆転状態の切妻造りの家形埴輪2(図版第15-2)が出土した。この家形埴輪2は、全体が中央で2つに折れ、壁板も大きく壊れていたが、1棟分の破片が集中していた。陸橋南側では家形埴輪1・2以外に、入母屋造の家形埴輪1棟と切妻造りの家形埴輪2棟分の破片が出土している。特に、入母屋造の家形埴輪3(図版第15-3)は重層式であり、他の切妻造の家形埴輪に比べ大型である。

陸橋北側では、大型で入母屋造の家形埴輪の破片ほぼ1棟分が、およそ2m四方の範囲に散ばっていた。また、破片の多くは陸橋に近い側にかたよって特に集中している。集中範囲は1mをやや超える範囲であり、最下部の破片は地山に接して出土した。

SD39では、家形埴輪・船形埴輪以外に円筒埴輪片の出土もわずかにみられた。ただし、円筒埴輪破片の出土位置は、家形埴輪群からやや離れた古墳南東コーナー付近である。円筒埴輪の破



第16図 B 8 号墳陸橋南側周溝内家形埴輪出土状況図



第17図 埋葬施設 S X52実測図

片はいずれも小破片で、数量も20点程と少ない。

その他の遺構 B 3号墳～B 8号墳に関連する以外の遺構として、調査対象地の尾根東斜面付近で埋葬施設 S X52を検出した。

埋葬施設 S X52(第17図) B 1号墳から北方向に派生する尾根の基部付近で検出した埋葬施設である。検出地点は、B 1号墳とB 2号墳のほぼ中間に位置する。周辺部での精査をおこなったが、古墳に関連する墳丘および周溝の存在は確認できなかった。墓壙掘形は底面近くまで強い削平を受け、掘形平面形も崩れた楕円形を呈するが、本来は長方形の掘形と考えられる。主軸は北から東に約 $63^\circ$  振る。墓壙はいわゆる2段墓壙と呼ぶものである。墓壙規模は、長辺約5.1m、短辺約1.7mを測る。上段の墓壙底の深さは、最大で0.2mを測る。墓壙の中央部に、2段目墓壙としての木棺据付のための掘形が認められる。

2段目墓壙は、全長約3.6m、北東側小口約0.68m・南西側小口約0.48m、深さ約0.12mを測

る。2段墓壇の掘形は、両小口部はほぼ直角に墓壇壁が立ち上がるが、横断面は底の丸いU字形を呈する。この2段目墓壇の形状からみて、SX52では割竹形木棺が使用されたと判断する。木棺内の南西小口付近から、副葬品の出土をみた。副葬品の内訳は、土師器椀4点(第18図18~21)、鉄製刀子1点(第19図2)、石製紡錘車2点(第19図4・5)である。4点の土師器椀は棺内南西側に整然と置かれ、いずれも口縁を上にした正位置の状態出土した。鉄製刀子と石製紡錘車は、土師器椀と木棺小口間のわずかな空間に置かれている。2段目墓壇の北東側が幅広であることから、棺内の披葬者の頭位置は北東側と判断される。その場合、副葬品は足元側に置かれたものと考えられる。

### 3. 出土遺物

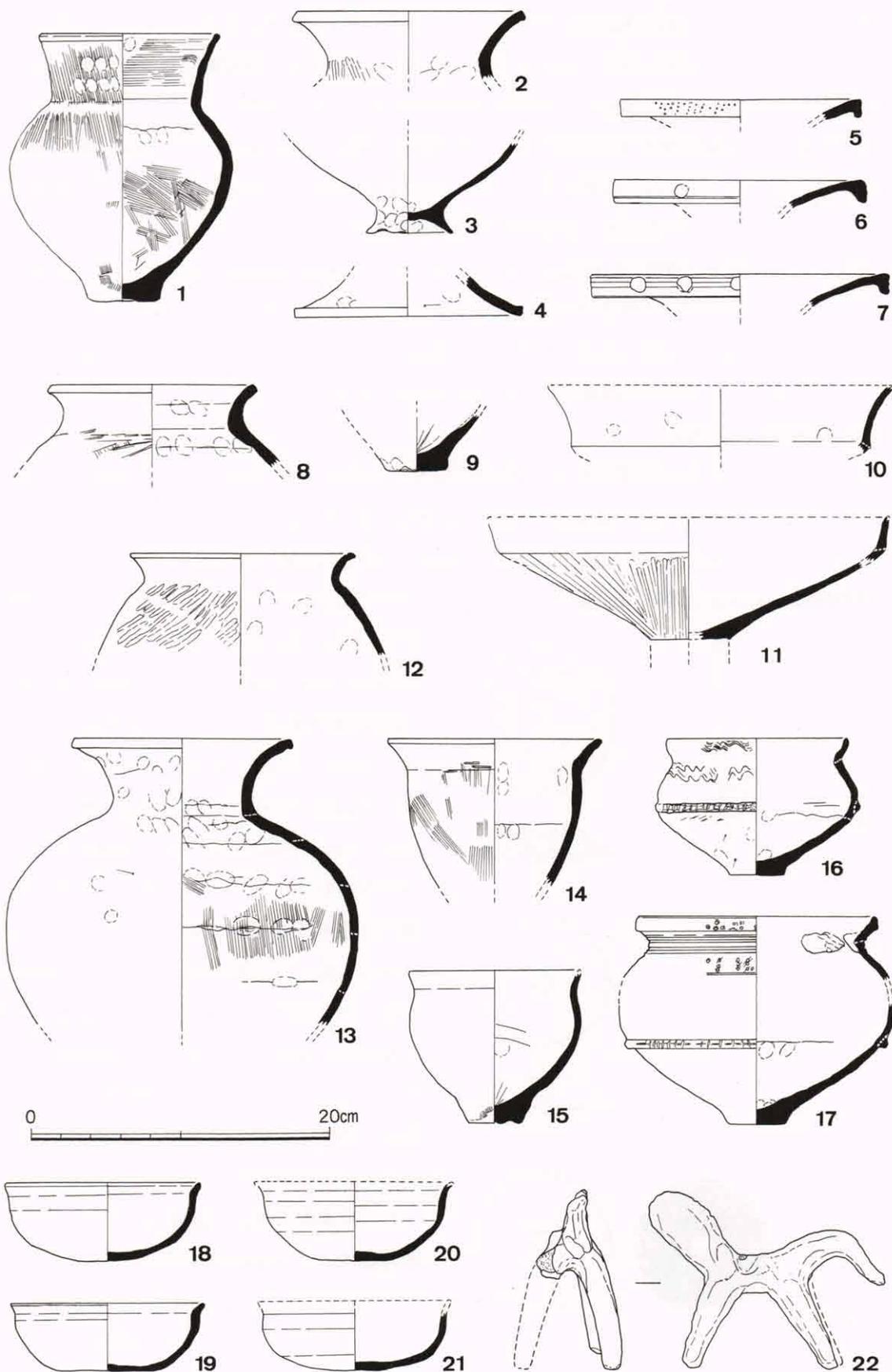
(1)土器 弥生時代の竪穴式住居跡から多くの土器が出土したほか、古墳時代の埋葬施設SX52の副葬品として土師器椀(第18図18~21)、竪穴式住居跡SH15の東側丘陵斜面から土馬(第18図22)が出土した。

竪穴式住居跡SH44出土遺物(第18図1~7) 1は、直口壺である。体部外面は縦方向にハケ調整し、体部下半はハケメをナデ消す。内面は横方向のハケで調整し、口縁端部はヨコナデ調整する。器高は18.1cm、口縁部直径は12.1cmである。2は広口壺の口縁である。口径は15.1cmである。外面はミガキ調整する。3は脚台付鉢の底部であり、底径5.8cmを測る。脚台部は内外面とも指押さえ痕を明瞭に残す。4は脚部である。脚端の直径は15.3cmである。5~7は器台の口縁部である。5は口縁垂下部をヨコナデし、列点文を施す。口縁部上端面には波状文を施す。口径は16.2cmである。6は口縁垂下部をヨコナデ調整し、下端部に1条の沈線文と中央に円形浮文を施す。口径は16.7cmである。7は口縁垂下部の上半に3条の擬凹線文をもち、およそ2.5cm間隔で円形浮文を施す。口径は20.1cmである。

竪穴式住居跡SH10出土遺物(第18図8~11) 8は甕の口縁部、9は甕の底部である。短く外反する口縁部は、口径15.4cmである。体部の外面はハケメを施し、内面は浅くヘラケズりする。口縁外面には煤が付着する。9は内面をヨコハケする。底径は4.2cmである。10は高杯口縁である。口径は約23cmである。器表面は摩滅が進み、調整は不明である。11は高杯の杯部である。口縁部は短く上方に立ち上がる。口径は26.8cmである。杯部外面は長いヘラミガキを施す。

竪穴式住居跡SH7出土遺物(第18図12) 12は甕の口縁部である。体部外面はタタキを施す。口径は14.9cmである。

竪穴式住居跡SH30出土遺物(第18図13~17) 13は広口壺である。口径14.5cm、残存高19.4cmである。体部内面はタテハケを施すが、粘土接合痕とユビオサエ痕を残す。14は小型の甕である。口径は14.3cmである。体部の張りは弱く、外面はタテハケを施す。内面は縦方向にヘラケズりする。15は小型の甕である。口縁端部を欠くが、口径11.5cm、器高10.3cm前後とみられる。器表面は摩滅し、調整は不明である。16・17は、受口口縁で体部外面に貼り付け突帯をもつ鉢である。体部のやや上方に最大幅をもつ。16は小型で口径11.9cm、器高9.2cmである。口縁部外面と体部



第18図 出土遺物実測図1(土器・土製品)

上端に波状文を施す。体部外面の貼り付け突帯にはキザミ目を施す。体部内面はハケメ調整する。17は大型品である。口径15.8cm、器高13.9cmを測る大型品である。口縁端部外面には列点文、体部上半は擬凹線文と列点文を施す。体部の内外面はヘラミガキを施す。

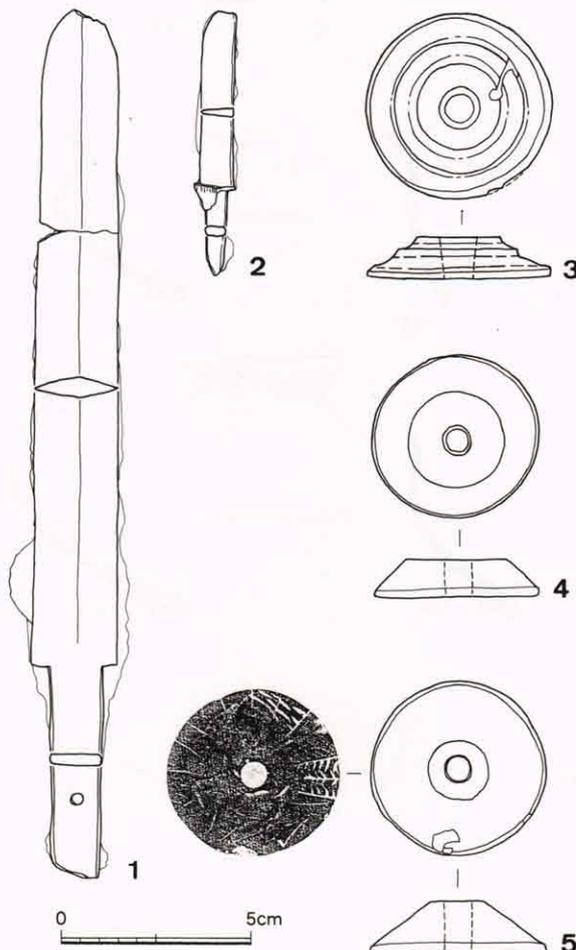
埋葬施設 S X 52出土遺物(第18図18~21) いずれも土師器の椀である。口縁端部は短く外反し、底部は丸みをもつ。器表面の剥離が著しいが、口縁部と内面はヨコナデ、外面はケズリ調整を施している。4点とも口径約13cm、器高は4.8~5.2cmである。

丘陵斜面包含層出土遺物(第18図22) 22は土馬である。頭部と右前足を欠いている。頸部が横に平たく、たてがみ部分は特に尖り気味に仕上げている。尻尾は臀部から上方に一旦上げた後、下方に下がり、端部は外側に外反して終わる。残存部にみる全長は15.8cm、高さ11.9cmである。手づくねであり、表面をナデ調整する。色調は茶褐色である。

(2) 金属製品・石製品

B 5号墳 S X 29出土遺物(第19図1) 鉄剣である。全長23.1cm。剣身は長さ17.3cm、幅2.3cm、厚さ0.5cmである。茎(ナカゴ)は長さ5.8cm、幅1.3cm、厚さ0.2cmである。切先の一部を欠く。茎は、関(マチ)から柄尻方向3.4cm付近に目釘穴があり、柄尻は斜めに切り落とす。

埋葬施設 S X 52出土遺物(第19図2・4・5) 2は小型の鉄製刀子である。全長7cm。刀身は



長さ4.6cm、幅0.9cm、厚さ0.2cmである。茎は関部分に木質が残る。4と5は滑石製紡錘車(紡錘車形石製品)である。断面形は台形である。4は上辺2cm、下辺4.3cm、高さ1cmである。中心部の円孔は0.6~0.7cmである。5は上辺1.4cm、下辺4.6cm、高さ1.4cmである。中心部の円孔は0.7~0.8cmである。下面の外縁側には綾杉文を組み合わせたような線刻が、外縁から約1cmの範囲内にみられる。線刻は中央の円孔方向から外に向かって3本の直線を放射状に刻み、その間に短い線を斜めに刻み、これが1単位の文様を構成する。線刻は浅くて消えるものもあるが、全体ではおよそ5単位の文様が刻まれたと考えられる。

B 7号墳周溝内出土遺物(第19図3) 3は滑石製紡錘車(紡錘車形石製品)である。体部は2段に匙面取りし、体部中央に鋭い稜をもつ。上辺の直径2.2cm、下辺の直径4.9cm、高さ1.1cmである。中心部に直径0.8~1cmの円孔が穿たれる。(竹原一彦)

第19図 出土遺物実測図2(金属器・石製品)

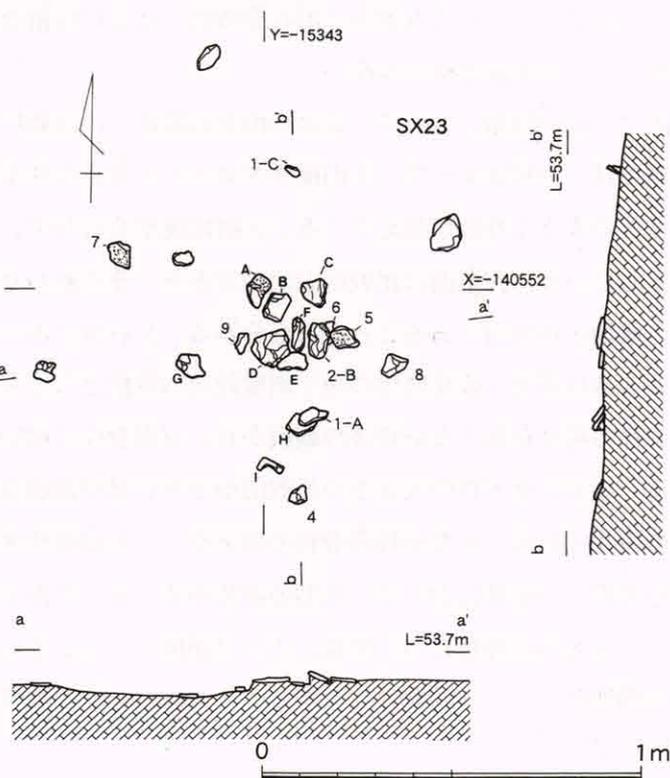
(3)集積遺構 S X 23出土石器(第21図～第24図)

第6次調査で検出した集石遺構 S X 23(第20図)と、S X 23が集積遺構と判明する以前にはほぼ同一地点から包含層遺物として取り上げたサヌカイト製石器については、本年度に整理作業を進めたことから、今回の調査成果とあわせて報告する。今回の報告では S X 23出土石器の一部、主要なものについて実測図を掲載した。実測図は特に記述がない限り S X 23出土の石器である。また、出土石器の法量は観察表(付表1)に示した通りである。

集石遺構 S X 23では、B 1号墳の北側、北西方向に下がる小規模な谷地形の堆積土である黄色微砂質土層から、サヌカイト製剥片や石核類が集中して出土した。また、この黄色微砂質土は弥生時代後期の竪穴住居跡 S H 19・20が掘られた基盤層でもある。S X 23は S H 19の西側にあつて、剥片や石核は約1.5mの範囲に集中した。S X 23出土の剥片・石核の総重量は、約1993.3gを測った。S X 23は、石核3点、剥片19点、二次加工とみられる剥離のある剥片1点からなるが、調査の過程ではほぼ同一地点から石核1点と剥片5点が出土していたことから、S X 23の総数は石核4点、剥片24点となった。このうち、1-a・1-cの剥片と1-bの石核は接合固体となり、さらに2-aと2-bの剥片も接合した結果、接合固体は合計2点となった。

第21図1と2は接合固体である。1は第22図1-a・1-b・1-cからなる。1-aは剥片である。最大長7.6cm、最大幅8.0cm、最大厚2.1cm、重量215.5gで、S X 23出土剥片の中では最大のものである。背面は打面転移をしながら多数の剥片が取られ、剥離面が複雑に入り組んでいる。主要剥離面は打面転移をして2度打撃が加えられているが、1度目の打撃では母岩から剥離できず、2度目の打撃により剥離されている。側面は自然面を多く残し、相対する2辺にツブレ痕がある。1-bは石核である。実測図の左側は1-aの剥片が剥離された面である。1-aが剥離された後に1-bも母岩から剥離されている。さらにその後剥片がとられ、石核として利用されたことが分かる。1-bも側面に自然面が多く残されている。1-cは1-bからとられた剥片である。

第21図2は、第22図2-aと2-bからなる接合固体である。いずれも淡黄褐色を呈し、他の石器と比較して極めて風化が著しい。2-a・2-bは剥片である。2-aは S X 23確認以前の出土で、末端が折損している。最大長6.0cm、最大幅5.1cm、最大厚0.9cm、重量38.7gである。実測図では2-a



第20図 集石遺構 S X 23石器出土状況図

の左側の面と2-bの右側の面が接合する。側面には自然面を多く残す。

第23図の3～5は石核である。3は、S X 23付近の同一の包含層内の出土である。最大長7.6cm、最大幅5.6cm、最大厚1.5cm、重量93.3gである。表面全体の約6～7割は自然面で覆われている。作業面は実測図の右側の面のみで、ネガティブな剥離面を残す。このことから、この石核は原石から直接剥片を取っていったものと考えられる。4は作業面が3面である。5は作業面が1面で主要剥離面を持つ剥片を素材としている。

第23図6は二次加工とみられる剥離のある剥片である。主要剥離面の両端矢印で示した部分にその剥離がみられる。しかし、その剥離が人為的なものであるかどうかは断定できない。

第24図7～9は剥片である。このうち、7は仮1の接合資料と同一母岩であると考えられる。S X 23出土の剥片は総じて自然面の残るものが多い。

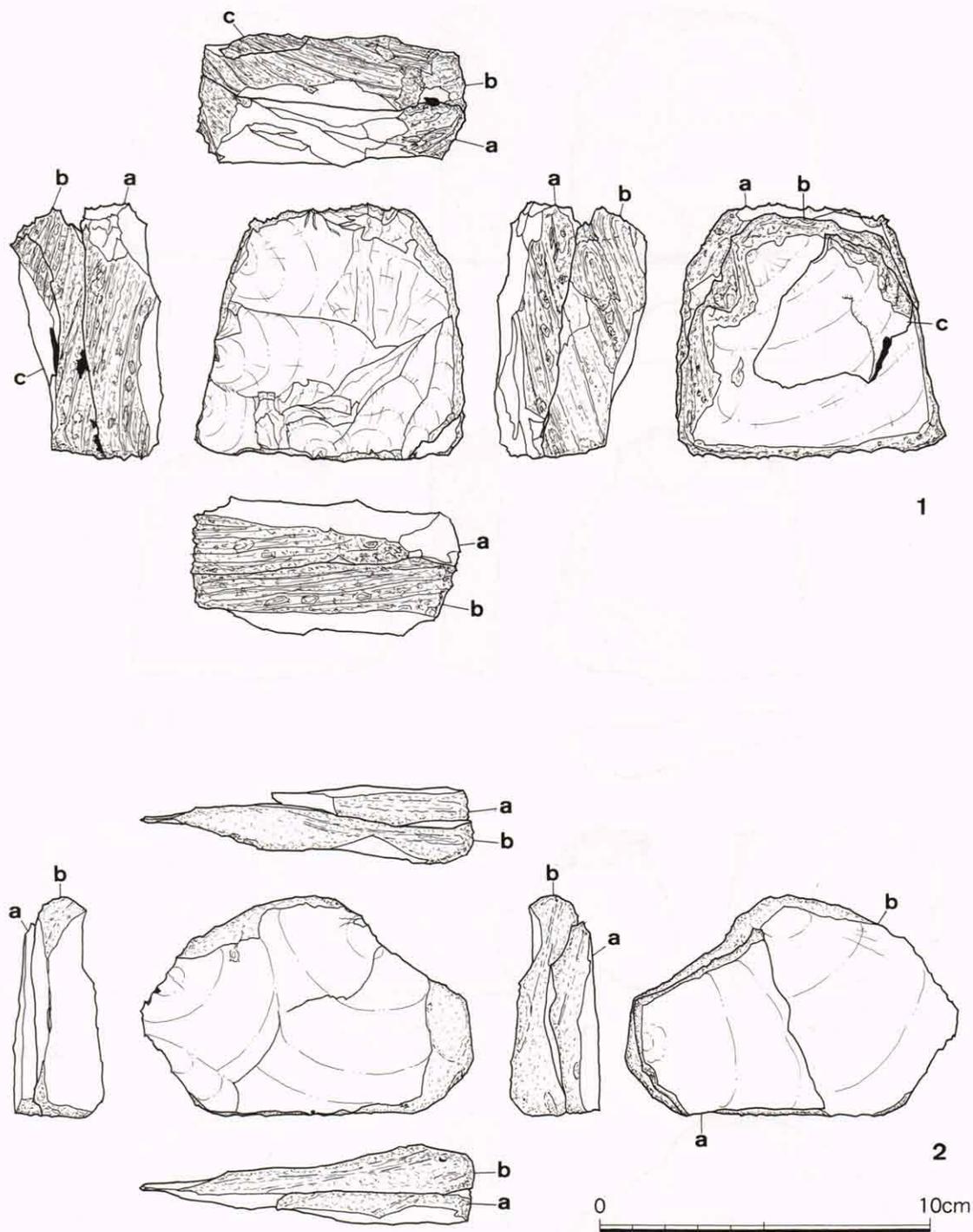
小結 今回の調査では、集石遺構S X 23において石核・剥片類がまとまって出土した。S X 23以外でも数点石器が出土しているが、ここではS X 23出土石器について若干の検討をおこなう<sup>(註7)</sup>。

石器の帰属時期については、S X 23を検出した黄色微砂質土から石器以外の遺物の出土がみられず、竪穴式住居跡や土坑などに伴う状況も確認できないことから、時期の比定は難しい。内田山遺跡周辺には縄文時代後期に比定される片山遺跡や燈籠寺遺跡があり、特に片山遺跡では同様なサヌカイト剥片群が出土している。それらを参考にすれば縄文時代後期～弥生時代の可能性が高い。また、瀬戸内技法関連遺物を含んでいないことから、旧石器時代の可能性は低いと考えられる。石器の様相から時期を比定することは難しいが、剥片剥離技術の研究からS X 23出土の石器の剥片剥離技術は、後述するように縄文・弥生時代に通有のものといえることができる。しかし、まだこのことについても本当に旧石器時代にはない技術なのかなど議論もあり、S X 23の帰属時期については確証が得られない。

出土石器の様相について、S X 23出土石器は、ほぼ剥片と石核で構成されている。また、肉眼観察では、石材はすべて二上山産サヌカイトと考えられる。剥片剥離技術の観点から観察すると以下のような特徴が見えてくる。①打面調整を行わず、自然面を打面としている。②作業面を固定している。作業面は比較的固定的であり、そのかわりに打面転移を行なっていることが、石核の側面が自然面であることから分かる。③石理に沿って剥片を剥がしているものが多い。以上の3点は縄文・弥生時代の剥片剥離技術の特徴としても従来から指摘されてきたことである<sup>(註8)</sup>。

剥片の接合資料1と石核3の観察から、石器製作に用いられた原石の大きさがある程度復原できる。原石は拳大程の大きさの比較的小さな石材が選別されたようである。また、1のように3枚の剥片・石核からなる接合資料の出土や、二上山産サヌカイトの供給地としては、遠隔地である京都府下の遺跡において、大型の剥片がまとまって出土したことは極めて稀で、貴重な資料である。S X 23の性格については、チップが出土していないこと、接合資料の数が少ないことから、石器製作跡の可能性は低い。しかし、S X 23の剥片と石核の大きさ・形状・自然面の状態などが相互に似通っていることから、他所で製作された剥片が一括して持ち運ばれたことは疑いない。

出土状態をみると、石器製作のために廃棄・遺棄されたものではないことなどからS X 23は

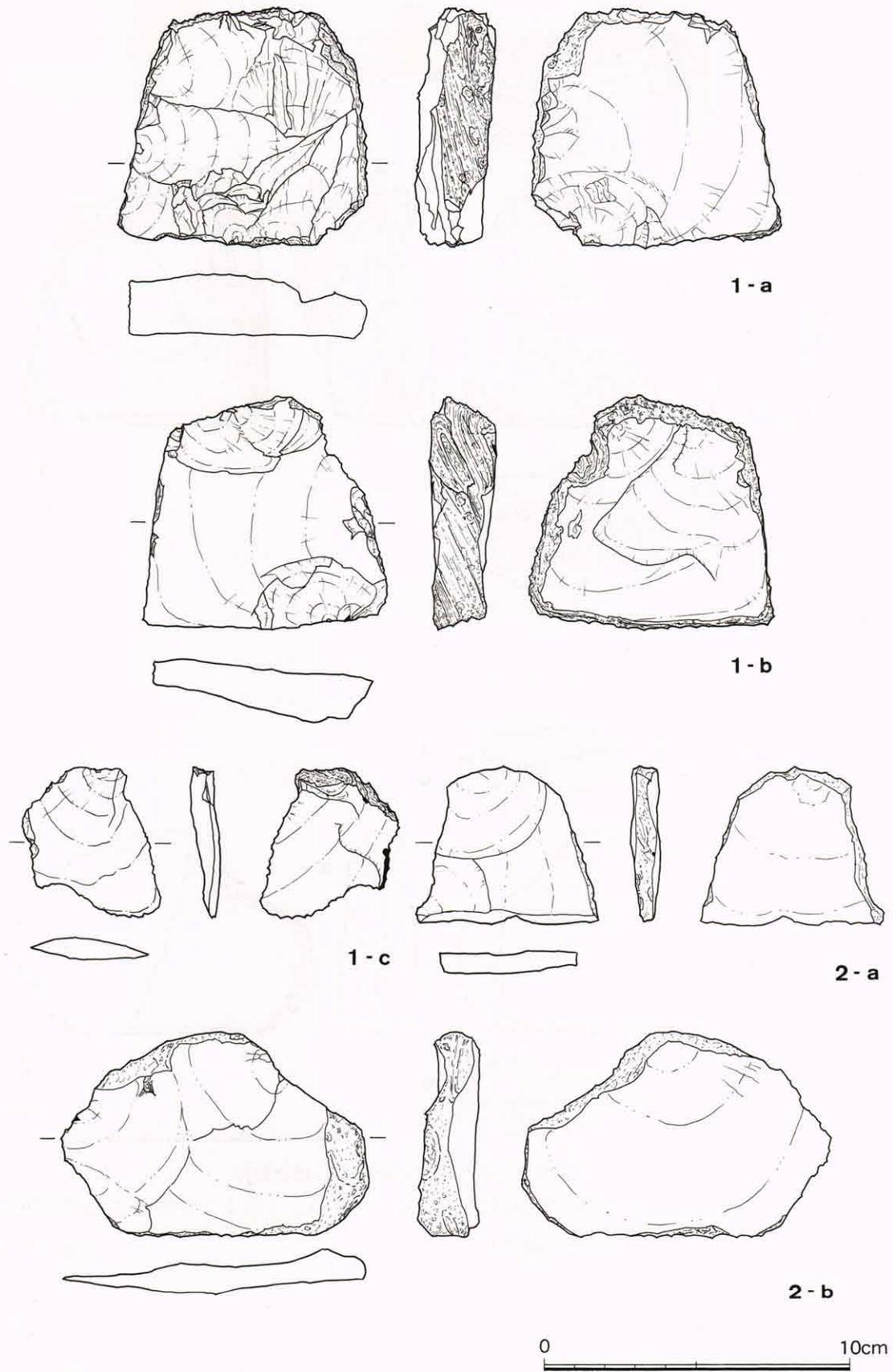


第21図 SX23サヌカイト剥片実測図1(接合資料)

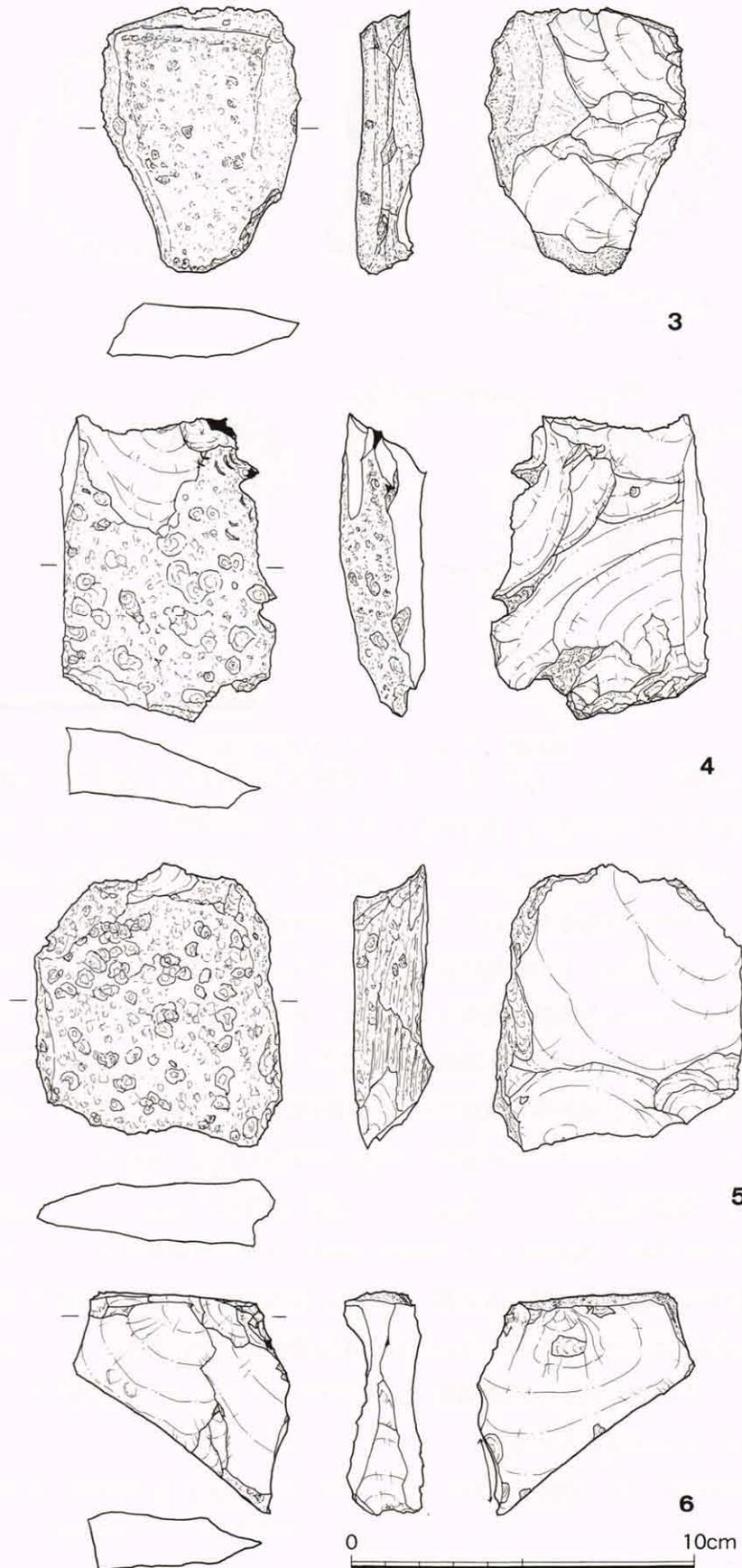
「サヌカイト集積」または「デポ」と呼ばれる状態であるといえる。このような遺構は流通論の観点から注目されているが、今後の研究に期待したい。(兼子拓也)

(4) 埴輪

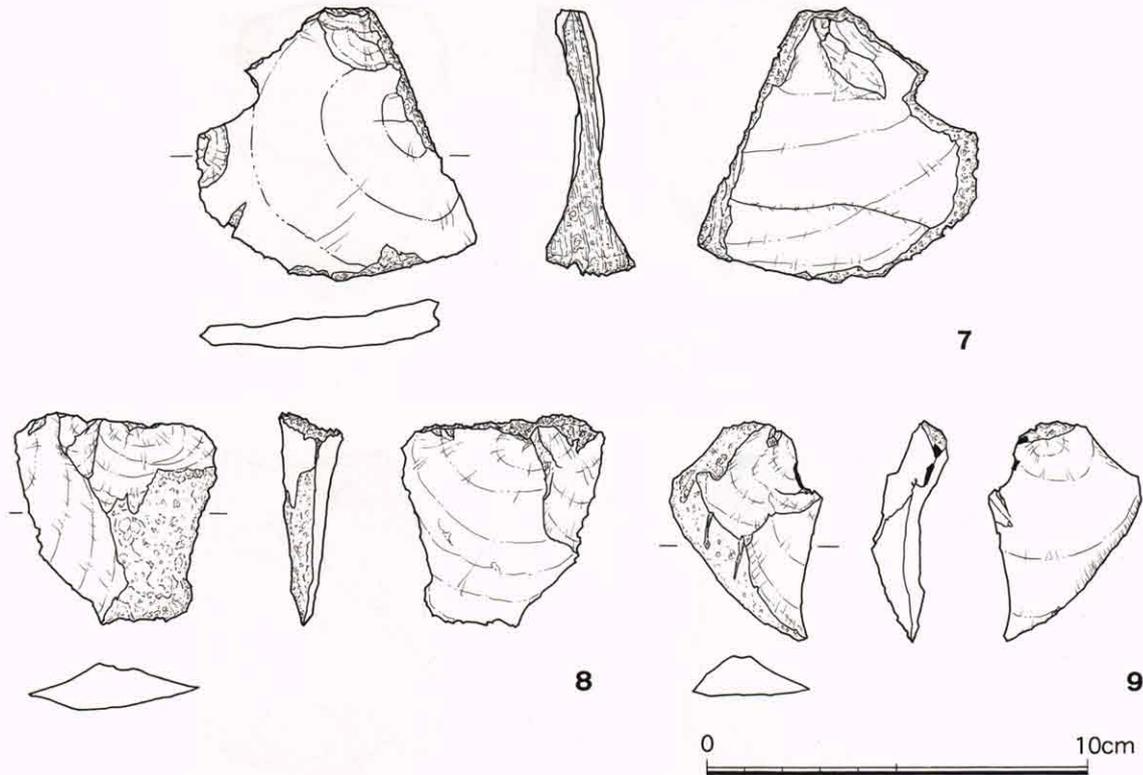
第7次調査に加え、第6次調査で出土した資料も合わせて報告する。埴輪の大半は、B3号墳、B4号墳、B5号墳から出土した。埴輪の数量はコンテナバット35箱分を数えた。今回報告では、円筒埴輪、朝顔形埴輪、壺形埴輪について報告する。



第22図 S X23サヌカイト剥片実測図2



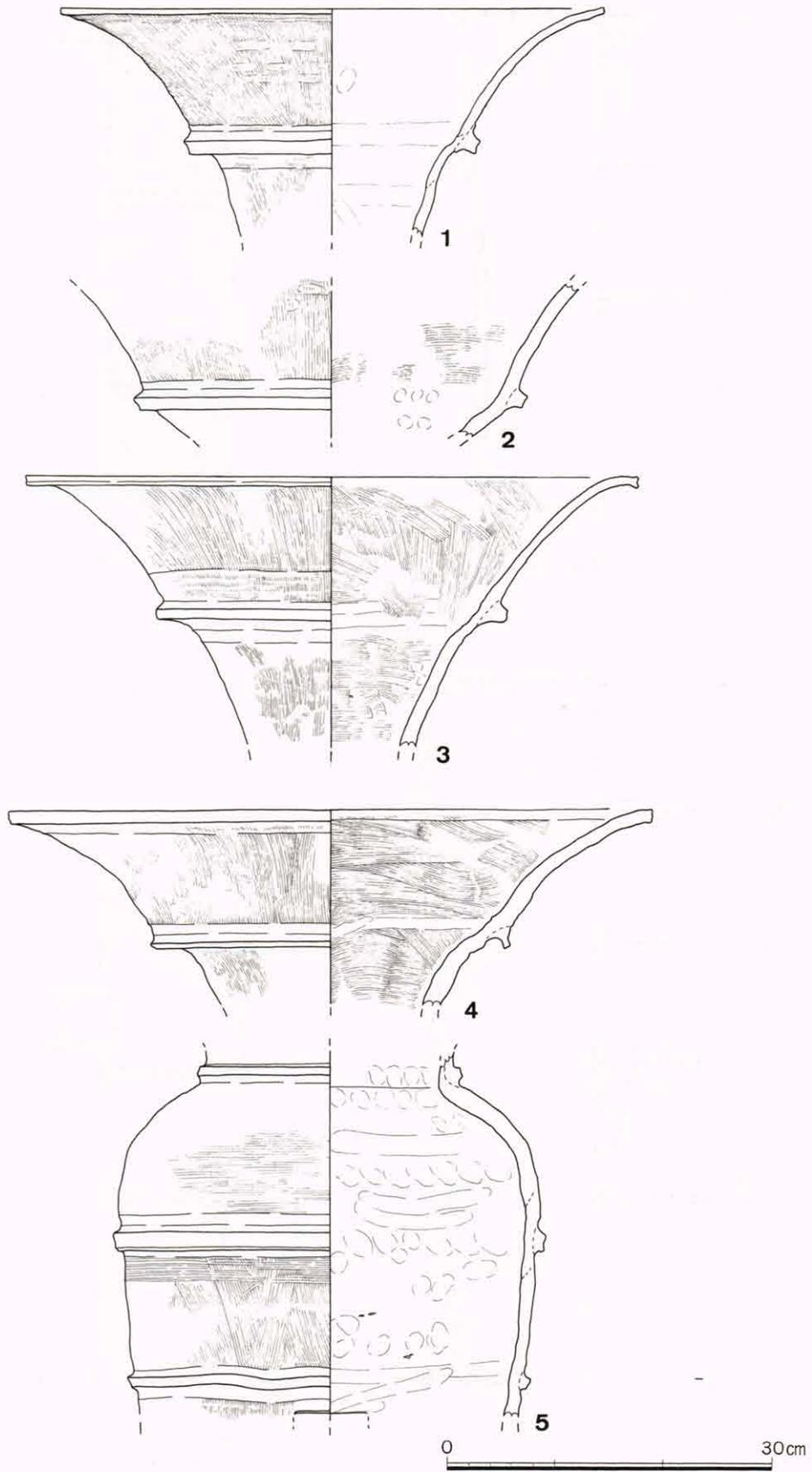
第23図 SX23サマサイト剥片実測図3



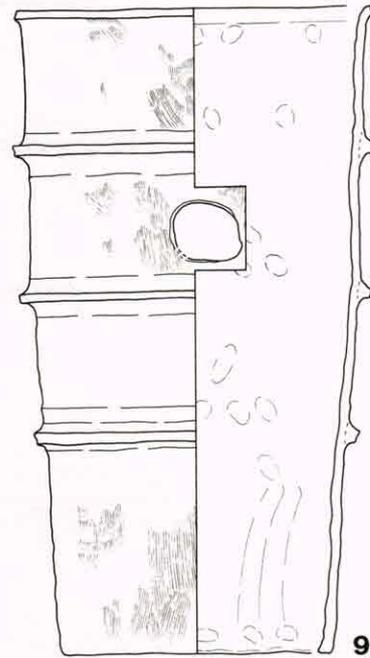
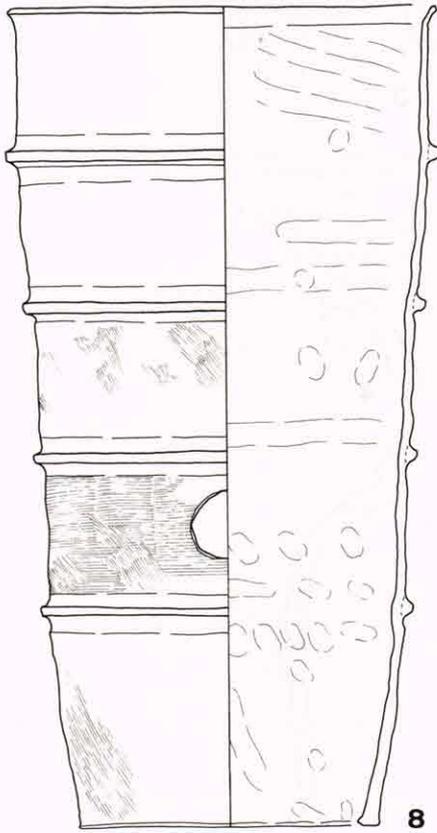
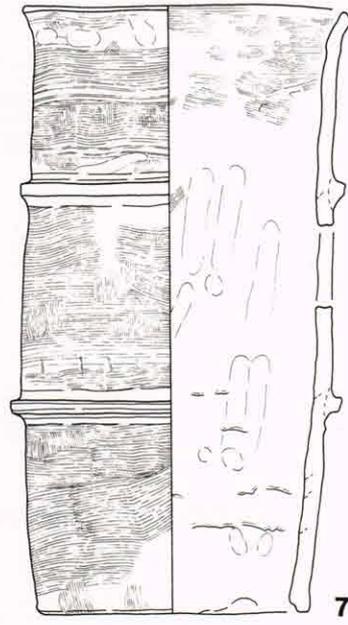
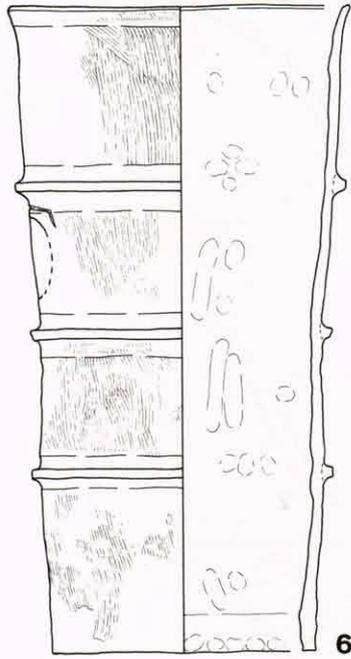
第24図 S X23サヌカイト剥片実測図4

朝顔形埴輪(第25図1～5) 1は、B4号墳の埴輪棺の東側小口に使用された資料であり、口径50.4cm、口縁部高16.8cmを測る。外面調整にタテハケ、内面調整にナデが施され、外面調整タテハケの後、一部の箇所横方向のユビナデが確認できる。黒斑は、口縁部付近の内面にのみまばらに付着し、外面には残存しない。2は、一次口縁部に該当する部位である。外面はタテハケ調整をおこない、内面は一次口縁部付近をユビオサエ、二次口縁部内面にはヨコハケを施している。外面にはかすかに赤色顔料が残存する。3は、B3号墳出土資料であり、口径57.0cm、口縁部高16.2cmを測る。外面はタテハケ調整をおこなう。頸部から一次口縁部にかけての内面は、ヨコハケをおこなうが接合痕が多く確認される。口縁部突帯内面をヨコナデした後、二次口縁部内面をタテハケもしくはナメハケを施す。外面には黒斑が色濃く残存するところがあるが、突帯下辺部に付着は確認できない。4・5は、B3号墳出土資料である。4は、口径は59.7cm、口縁部高は16.8cmを測り、外面はタテハケ調整、内面はヨコハケ調整を施す。5は、胴部から肩部に該当する資料で、胴部径は37.2cmを測り、胴部には方形透孔と思われる水平な平滑面が確認できる。胴部外面にはタテハケをおこない、最上条突帯の直下から肩部にかけては、一次タテハケ調整後、ヨコハケ調整を施す。内面調整は、ユビオサエとユビナデを併用する。黒斑は、胴部の対照的な位置に2か所認められる。

円筒埴輪(第26図6～9・27図10～13) 6・7は、B4号墳出土の資料である。6は、器高51.0cm、口径27.6cm、口縁部高13.3cm、底径21.3cm、底部高14.6cm、突帯間隔が上から11.4cm、10.8cmを測り、3条4段に復原される。全体的に器壁が薄い。円形透孔が三段目に確認され、透孔の上縁部に沿って器壁にヘラ書きのような沈線が認められる。外面調整にタテハケ、内面調整



第25図 出土遺物実測図3(朝顔形埴輪)



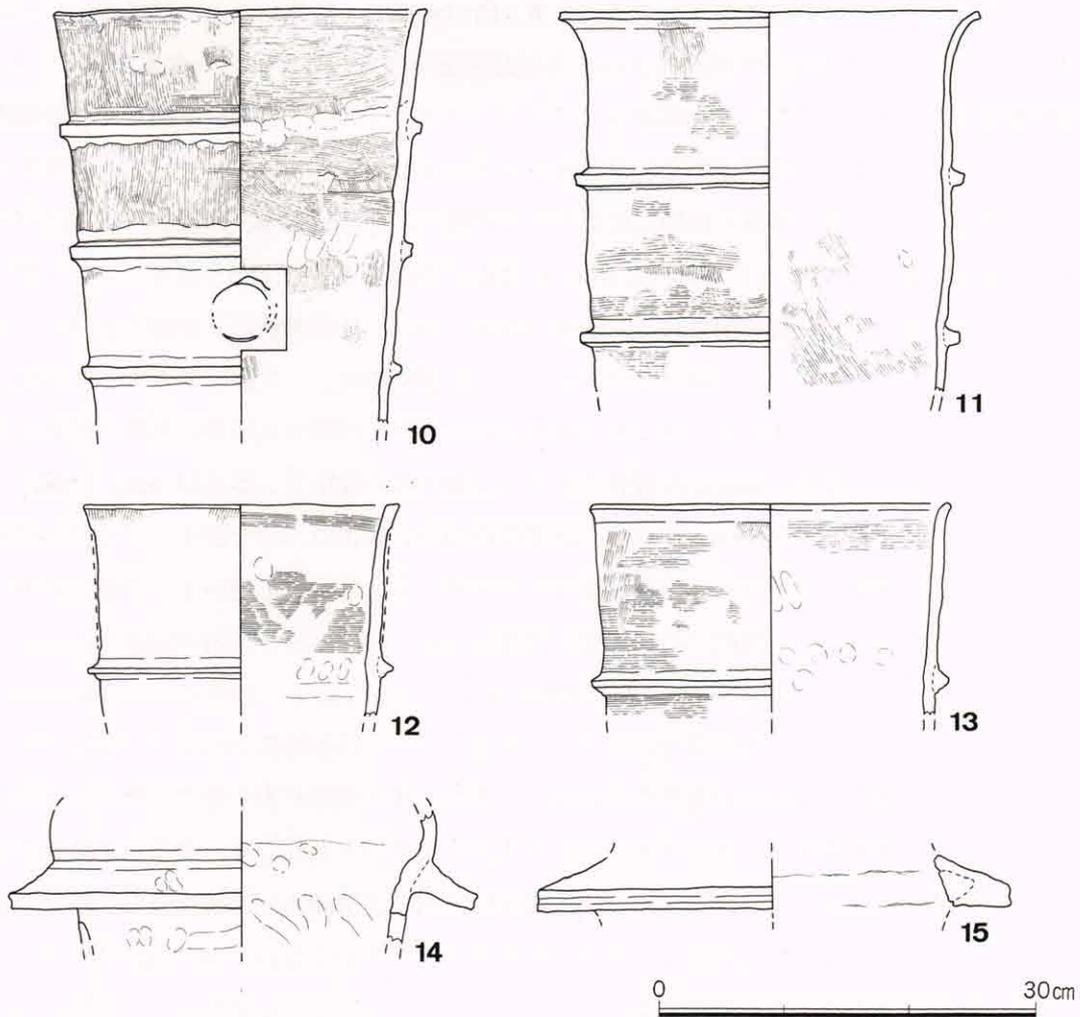
0 30cm

第26図 出土遺物実測図4 (円筒埴輪)

にユビナデ・ユビオサエをおこなう。7は、2条3段の資料で、器高48.5cm、口径26cm、口縁部高12.6cm、突帯間隔16.8cm、底部高16.8cm、底径21.6cmを測る。外面は、一次調整タテハケ後、二次調整にヨコハケをおこなう。底部から口縁部までの内面はユビナデ調整を施し、口縁部内面にはヨコハケをおこなう。器壁は厚く、口縁端部は外折する。8・9は、B4号墳に使用された埴輪棺である。8は、B4号墳の西側に使用された資料で、器高64.9cm、口径34.0cm、口縁部高10.8cm、突帯間隔が12.0cm、11.4cm、12.0cm、底部高17.7cm、底径23.6cmを測り、4条5段に復原される。円形透孔が2段目に配される。器壁が非常に薄い。外面調整は、底部と3段目にタテハケ調整がかすかに確認でき、2段目では一次タテハケ調整の後、二次調整のヨコハケが施される。内面は全段ともにユビオサエ・ユビナデ調整をおこなう。外面の大部分に黒斑が付着している。9は、B4号墳の東側で出土した資料である。3条4段の規格で、器高51.6cm、口径28.4cm、口縁部高10.2cm、突帯間隔10.8cm、10.8cm、底部高18.0cm、底径21.6cmを測る。2段目に円形透孔が配され、外面調整はタテハケ、内面調整はユビオサエとユビナデを用いる。外面に黒斑は認められず、内面の2分の1の範囲にのみ黒斑が確認される。10は、B3号墳の周溝から出土した資料で、口径19.6cm、口縁部高8.7cm、突帯間隔9.6cm、9.6cmを測る。口縁部から3段目の位置に円形透孔が穿たれている。外面調整はタテハケを用いるが、口縁端部の際まで丁寧にタテハケを行わず、口縁端部のナデ調整が施されていない。突帯の成・整形が不十分で、突帯下辺部の粘土紐がやや浮く。内面調整は、ユビナデ、ユビオサエ、タテハケ調整の後、ヨコハケ調整を施す。11は、B5号墳出土資料で、口径28.0cm、口縁部高12.7cm、突帯間隔12.0cmを測り、器壁が非常に薄いのが特徴的である。外面調整は、タテハケ後ヨコハケをおこない、内面調整はナメハケを施す。口縁端部はやや大きく外反する。12は、B4号墳から出土した資料で、口径25.0cm、口縁部高12.1cmを測る。外面は摩滅と剥離が著しいが、口縁端部にわずかにタテハケ調整が確認できる。内面はユビオサエ後、ヨコハケ調整を施す。突帯は上面が狭く、三角形状を呈する。黒斑は外面の広い範囲に付着している。13は、B4号墳出土資料で、口径28.6cm、口縁部高13.3cmを測る。外面は一次調整タテハケの後、二次調整のヨコハケをおこなう。口縁端部はわずかに外反し、突帯は三角形状を呈する。

**壺形埴輪**(第27図14・15) 14、15ともにB4号墳から出土した。14は、基部から肩部に該当する部位で、基部径は24.8cm、鏝部の突出は5.1cmを測る。基部には円形透孔の上端が確認でき、調整は内外面ともにユビオサエ、ユビナデを施す。15は、基部から剥離した鏝部に該当し、鏝部の突出は約4.7cmを測る。基部との接着面には接合痕が確認できる。断面観察によると、上面をユビオサエした突帯程度の粘土紐を土台とし、それを覆うようにして鏝部の成形が成されたことがうかがえる。

**小結** 円筒埴輪の法量は、口径20～34cm、底径21.3～23.6cmの範囲に収まり、規格は2条3段～4条5段である。透孔は円形を主体としながら、一部、朝顔形埴輪に方形透孔が認められた。いずれの資料も口縁端部がわずかに外反する形態を呈する。大半の資料は焼成が甘く、有黒斑であることから野焼きと判断できる。外面調整は、タテハケのみのものと、タテハケ後部分的にヨ



第27図 出土遺物実測図5(円筒埴輪・壺形埴輪)

コハケを施すもの、タテハケ後全段にヨコハケを施すものの3種が認められた。ヨコハケは断続的な調整と連続的な調整とがあり、静止痕が明瞭なヨコハケはみられない。ちなみに、今回の資料で突帯間隔設定技法が観察できる個体はなかった。

以上の特徴に加え、底部高が突帯間隔よりも1.3~1.4倍ほど高い点や鱗付円筒埴輪が見られない点などから、内田山B3号墳・B4号墳・B5号墳出土の埴輪は、川西編年のⅡ期末~Ⅲ期初頭の時期に相当すると考えられ、壺形埴輪の存在や、蓋形埴輪(B1号墳)の様相からも同様の時期が見込まれる。(田中智子)

**B8号墳出土家形埴輪** 出土した家形埴輪と船形埴輪は、肉厚も薄く脆弱なものが多いことから、現在整理作業を進めているところである。今回は、整理が進んだ家形埴輪1~3と船形埴輪について概略を報告することとし、遺物写真(図版第32)を掲載した。家形埴輪と船形埴輪についての詳細な報告は、実測図を含め機会を改めて別の紙面でおこなう予定である。

**家形埴輪1** ほぼ完形で出土した切妻造の家である。大きさは、両破風板の先端の長さは56.1cm、壁底部から破風先端までの高さは37.8cmを測る。壁体は平側で29.9cm、妻側基部で

23.8cmを測る。屋根には、縦方向に4本、横方向に1本の押縁を、線刻で表現している。押縁の幅は縦方向では中央の2本が約2.5cm、破風に近い両端と横方向の押縁が約2cmである。また、屋根軒先から2.4cmの位置に横方向の線刻があり、軒先の押縁が表現されている。

壁体の平側には、中央と両端(隅柱)に縦方向に厚さ約4mmの突帯が貼付けられ、柱が表現されている。妻側では、突帯による柱は隅柱と梁が表現される。柱の数から、桁行2間、梁間1間の規模であることがわかった。壁体と基部の境に幅2.5cmの突帯(裾廻突帯)を巡らせている。基部には、平側と妻側にそれぞれ1か所、半円形の抉りが存在する。

壁体には、平側の片面に出入り口と窓の表現とみる方形のスカシを左右それぞれ1か所開けている。右側のスカシは縦12.9cm、横6.2cmを測り、下端は裾廻突帯に接している。左側のスカシは壁面の中央にあり縦6.1cm、横7.1cmで方形を測る。スカシの位置・形状から、右側が出入り口、左側が窓を表現していると考えられる。

**家形埴輪 2** 家形埴輪1の東隣から、2つ折れの状態屋根を下にして出土した切妻造の家である。大きさは、両破風板の先端の長さが63.2cm、基部から破風先端までの高さは41.4cmを測る。壁体は平側の基部で36cm、妻側基部で24.9cmを測る。屋根には縦方向に4本の押縁を線刻で表現している。押縁の幅は縦方向では中央の2本が約2.2cm、破風に近い両端の線刻は1本で表現されている。横方向の押縁の幅は2.5cmである。軒先の押縁は表現されない。

壁体の平側と妻側には、それぞれ中央と隅の柱が縦方向の線刻で表され、さらに妻側では梁も線刻されている。柱の数から、桁行2間、梁間2間の規模であることがわかった。また、壁体と基部の境に幅2.9cmの突帯を巡らせている。基部には、平側に2か所、妻側に1か所、半円形の抉りが存在する。

壁体では、平側と妻側のそれぞれ片面に1か所、方形のスカシが開けられる。平側のスカシは向かって右側にあり、裾廻突帯から上方に約3cm離れている。スカシは横に長く、縦4.6cm、横約9.9cmを測る。妻側のスカシは縦に長く、妻の左側にあって縦12.9cm、横6.2cmを測る。妻側のスカシは下端が裾廻突帯に接し、縦長であることから出入り口と考えられる。平側のスカシは窓とみられ、出入り口から屋内に入った左側に位置している。

**家形埴輪 3** 家形埴輪2の南側から出土した、重層式(高床構造)で入母屋造の家である。全体のおよそ8割の破片が出土した。破風板間の復元長は約50.3cm、屋根軒先の長さは平側が約48.5cm、妻側が約35.4cm、復元高は約58.2cmを測る。壁体の平側の長さは約40cm、妻側の長さは約38.5cmを測る。屋根上半部には、中央付近で縦方向に3本と、両破風に接して押縁を線刻で表現している。屋根上半部は、全体に線刻による網代が描かれるが、押縁部分は無文である。

壁体の裾部と中間に幅約3cmの突帯が巡らされる。特に壁体中間部の突帯は、先端部が外側下方に逆L字状に下がり、裾部の突帯とは形状が異なる。この中間部の突帯は、高床を表現したものであろう。家の内部は吹き抜け状態であるが、壁体外面の床廻り突帯と同位置の家屋内には、幅約4.5cmの突帯が巡っている。この内部の突帯は屋内の床を表現したものと考えられる。壁体には、粘土貼りの突帯で柱を表現させている。柱の数は壁体の上層部と下層部で本数が異なる。

下層部では平側2間×妻側1間であるが、上層部は中柱が増えて平側2間×妻側2間の規模を測る。下層部は柱部分を除き4面とも大きなスカシが開けられ、柱だけが表現されているようである。上層部は4面の壁面全てに方形のスカシが開けられている。上層部のスカシ8か所のうち1か所は縦方向のスカシであり、下端の中央部が下方向に2段に削り込まれている。この削り込みは床廻り突帯に接していることから、出入り口を表現したものと考えられる。他の7か所のスカシは床廻り突帯から上方に離れて存在し、窓を表現したものと考えられる。上層部の壁体外面には窓のスカシの直下に、横方向に2条の綾杉文が線刻されている。また、この綾杉文は、出入り口部分だけ途切れている。

**船形埴輪** 船は構造船を模したものと考えられる。丸木舟の舳先部分と船体中央の一部が出土した。船体中央部の幅は約17.2cm、高さは約11.5cmを測る。舳先側は、底面が緩やかに上がると共に幅も狭まる。舷側外面には、中央付近では縁から約4cm下がった外面に、幅約1cm、厚さ約4mmの1条の突帯が存在する。この突帯は波除けもしくは丸木舟と舷側板の接合部分を表現したものと考えられる。また、舷側外面には縁から1cm下がった位置に1本の線刻が施されている。舷側の縁部には約7.5cmの間隔で小さな山状の突起が存在する。舳先部分の内側には、豎板とみられる粘土板の一部が残っていた。この粘土板は舷側に対して斜め方向に貼り付けられている。船体の底には約6.5cmの間隔で、直径約2.5cmの円孔が開けられている。残存範囲内には4か所に円孔が確認できた。

#### 4. まとめ

内田山遺跡と内田山古墳群B支群の発掘調査は、今回の第7次調査で終了を迎えることとなった。遺跡の内容は、内田山遺跡は弥生時代後期を中心とした遺跡であるが、遺物の上では縄文時代から平安時代までが含まれる。また、弥生時代の集落跡はいわゆる高地性集落と呼ばれるものである。内田山遺跡と立地が重複する内田山古墳群B支群は、古墳時代中期の方墳で構成される群集墳である。

##### 内田山遺跡について

今回の第7次調査では、弥生時代後期から平安時代にかけての遺構の他に、新たに縄文時代に属する落とし穴状遺構を検出した。第6次調査では、サヌカイトの石核・剥片の集石遺構の検出をみており、縄文時代から当地の丘陵で狩猟等の活動が行われていた状況が確認された。

内田山遺跡は木津平野の東側丘陵上にある高地性集落跡である。遺跡の標高はおよそ54mであり、平野部との比高差は約10mである。内田山遺跡では、第5次から今回の第7次調査までの間、弥生時代後期の竪穴式住居跡18基を検出している。竪穴式住居跡の内訳は円形住居跡5基、隅丸方形住居跡3基、方形住居跡10基(多角形住居跡1基)であり、住居跡の切合い関係から、円形から隅丸方形を経て方形へと変化する住居跡の変遷過程が明らかになった。また、住居規模も住居形態が円形から方形に変化していく過程で、しだいに小規模化する状況が確認された。竪穴式住居跡が方形プランに変わる時期は、およそ弥生時代後期前半とみられる。内田山遺跡周辺部の丘

陵には、赤ヶ平遺跡・白口遺跡・燈籠寺遺跡・木津城山遺跡など、弥生時代の高地性集落が多数存在する。出土土器の検討からこれらの高地性集落は、赤ヶ平遺跡(前期)・木津城山遺跡(後期前葉)から燈籠寺遺跡(後期中葉)へと移る変遷が考えられる。内田山遺跡は、燈籠寺遺跡とおおむね同時期に位置づけられる。当地の高地性集落は、木津城山遺跡以降、小規模単位で周辺丘陵に分散する状況にある。

#### 内田山古墳群B支群について

内田山古墳群B支群は、これまでに8基の方墳が確認された。埋葬施設のみ検出したSX52は古墳に伴う埋葬施設とも考えられ、大規模な削平を受けた尾根北端部にもさらに古墳が存在した可能性もある。このような状況から、B支群の古墳は8基から10数基の方墳で構成されていた可能性が高い。規模が判明した古墳は8基中で6基(B1～B3号墳、B5～B7号墳)を数える。このうち最小規模は一辺約9mのB7号墳である。最大規模は、一辺約18mのB1号墳である。20mを超える規模の古墳が無く、小規模古墳で構成されている。

古墳は、方位性によって2グループに分かれる。ほぼ座標軸に近いA群はB1号墳・B2号墳・B5号墳・B8号墳の4基であり、北から東におよそ11°～21°傾くB群はB3号墳・B4号墳・B6号墳・B7号墳の4基である。個々の古墳の築造時期の先後関係は不明であるが、A群の4基の古墳は尾根筋の好位置に築かれることから、B群に先行して築かれた可能性が高い。B群は、A群が尾根筋を占めるのに対し、尾根に直行して緩斜面上部に築かれる傾向にある。

ほぼ全ての古墳は墳丘が後世に削平され、埋葬施設を残す古墳はわずかにB1号墳・B2号墳・B5号墳の3基であった。古墳の埋葬施設は、B1号墳でSX01・SX02・SX153・SX154、B2号墳SX12、B5号墳SX29の6基である。それ以外の埋葬施設として、尾根上の1基(SX52)・B4号墳墳丘外埋葬施設1基(SX35)がある。

古墳の立地や墳丘規模と副葬品の内容から、六獣形鏡1面を副葬したSX153の存在するB1号墳がB支群の盟主墳とみられる。B1号墳の4基の埋葬施設は木棺(SX153・SX154)と埴輪棺(SX01・SX02)に分かれ、規模・位置関係において突出したものはみられない。B2号墳は古墳中央に大型の埋葬施設が1基存在する。また、副葬品として仿製内行花文鏡1面の出土をみている。B5号墳でもB2号墳と同様に、古墳の中央に埋葬施設を設けている。B支群では、家族墓的な墓制の流れをくむB1号墳が尾根南端に最初に築かれ、北に向かってB2号墳・B5号墳と次々に築かれていったと考えられる。B2号墳の埋葬施設は中央部に単独で存在し、規模も大きくなる。これはB2号墳の被葬者が、集団内での権力や家長の地位が高まるとともに、それまでの古い墓制から中央政権の影響下にある墓制に組み込まれていったことを示している。

埋葬施設の特徴として、B2号墳・B5号墳の埋葬施設は二段墓壇の木棺直葬で、木棺も4～5mと長大である。木棺内は数区画に分割され、礫床や石枕などが伴う。礫床はB1号墳SX153にも伴う。枕施設はB1号墳SX153では蓋形埴輪片を転用し、SX154では高杯の杯部を転用している。B2号墳では1棺に3体の複数埋葬を行っている。このような埋葬施設は、北部九州から丹後地域にかけて、日本海側の古墳に類例が多い。礫床は北部九州から加賀地域にかけて

みられ、円礫や土器を転用した枕は但馬から丹後地域に類例が多い。長大な木棺の内部を仕切り、礫床が伴うものは、出雲から丹後地域にかけての古墳に類例が多く認められる。

内田山古墳群B支群では、埋葬施設を検出したB1号墳・B2号墳・B5号墳の3基全てから、礫床・枕等を伴う埋葬施設を検出した。日本海側の墓制に共通点が認められる状況から、内田山古墳群B支群を築いた集団は、このような地域と密接な関係を持っていた集団と考えられる。

奈良盆地は古くから大和王権やその後の歴代の都城が営まれた地であり、木津の地域は、物資の運搬・交易の中継地として交通網の要衝の地として重要な位置を占めている。木津川市域では、内田山古墳群B支群以外にも西山塚古墳・上人ヶ平古墳群の16号墳主体部で礫床が伴う埋葬施設の類例がある。また、京都府下では、丹後地域以外に丹波地域の福知山市・綾部市・南丹波市、山城地域では宇治市・城陽市に礫床が伴う古墳が存在する。これらの古墳は、淀川水系と由良川水系を介して大和地域と丹後地域を結ぶルート上に点在し、大和と丹後(日本海沿岸地域)との交易・交通路を考える上で興味深い。出土遺物では、B1号墳とB2号墳ではそれぞれ銅鏡が出土している。また、多く古墳には円筒埴輪・朝顔形埴輪が伴うとともに、家形埴輪・船形埴輪など形象埴輪も多数存在する。小規模な方墳でありながら、副葬品・埴輪の内容が充実している。

内田山古墳群を築いた集団は、大和王権の影響下にある地方小豪族でありながら、大和と地方を結ぶ交通網の一翼を担っていたものであろう。(竹原)

付表1 集石遺構SX23関連出土石器観察表

番号	報告番号	器種	法量 (cm・g)				石材	備考 (取り上げ番号)
			最大長	最大幅	最大厚	重量		
1	1-a	剥片	7.6	8.0	2.1	215.5	サヌカイト	SX23-15
2	1-b	石核	7.6	7.9	2.1	152.2	サヌカイト	SX23
3	1-c	剥片	4.9	3.8	0.6	14.6	サヌカイト	SX23-4
4	2-a	剥片	5.9	6.2	0.9	38.7	サヌカイト	SX23
5	2-b	剥片	6.6	10.1	1.4	108.1	サヌカイト	SX23-12
6	3	石核	7.7	5.8	6.0	93.3	サヌカイト	SX23
7	4	石核	8.5	6.3	2.3	126.5	サヌカイト	SX23-18
8	5	石核	7.8	7.0	2.1	160.1	サヌカイト	SX23-19
9	6	二次加工剥片	6.2	6.4	2.0	66.2	サヌカイト	SX23-20
10	7	剥片	7.3	7.9	2.2	61.2	サヌカイト	SX23-3
11	8	剥片	5.1	5.2	1.5	31.8	サヌカイト	SX23-13
12	9	剥片	5.8	4.0	1.1	23.4	サヌカイト	SX23-8
13	A	剥片	6.1	10.0	2.1	127.4	サヌカイト	SX23-5
14	B	剥片	7.5	6.6	1.5	80.1	サヌカイト	SX23-6
15	C	剥片	8.5	5.9	1.5	88.4	サヌカイト	SX23-7
16	D	剥片	9.3	4.6	1.1	56.2	サヌカイト	SX23-9
17	E	剥片	8.5	6.9	1.6	82.9	サヌカイト	SX23-10
18	F	剥片	6.5	4.5	1.7	58.6	サヌカイト	SX23-11
19	G	剥片	5.5	4.8	1.4	47.6	サヌカイト	SX23-14
20	H	剥片	6.5	7.1	2.8	116.6	サヌカイト	SX23-16
21	I	剥片	5.0	3.6	2.5	35.1	サヌカイト	SX23-17

\*備考欄SX23のみの資料は包含層出土として取り上げたものである。

## (2) 鹿背山瓦窯跡第1次

### 1. はじめに

鹿背山瓦窯跡は、京都府木津川市鹿背山須原に所在する。瓦窯跡は、木津川の支流である大井手川右岸の合流部から約800m遡った右岸丘陵部にあり、大井手川によって南東から北西方向に開析された狭長な谷筋の低い舌状台地上に存在する。当該地は、平城宮・平城京などの瓦を焼いた官窯が密集する奈良山丘陵のなかでも、最も北東端に位置する。

鹿背山瓦窯跡は、過去に丘陵部から重圏文軒丸瓦や焼土塊が採取されたことから、瓦窯跡の存在が推定されていたところである。これまで本格的な発掘調査が実施されなかったことから、瓦窯跡の詳細については不明であった。今回の発掘調査は、鹿背山瓦窯跡の範囲と遺構確認を目的として試掘調査を実施した。

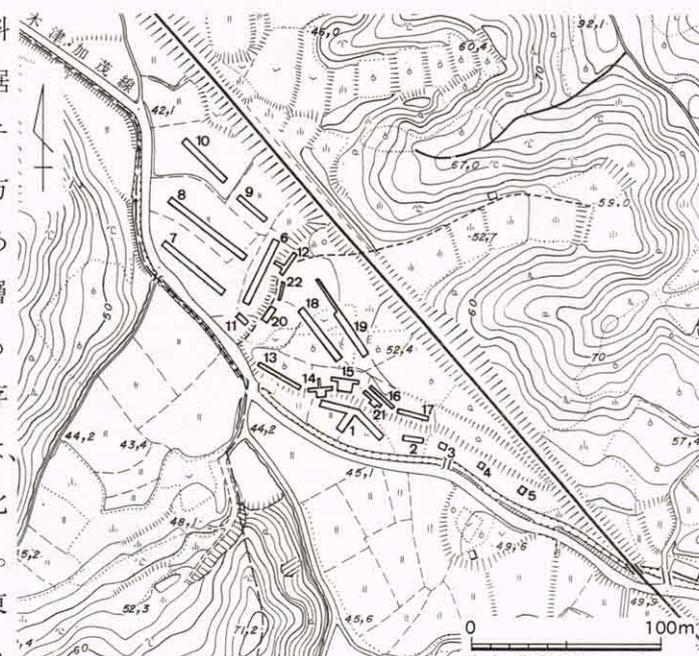
### 2. 調査概要

鹿背山瓦窯跡が存在する丘陵部には畑地や柿畑、丘陵裾には水田が広がる。調査対象地は、瓦窯跡が存在すると推定された丘陵部と水田部に分かれる。丘陵を挟んだ南と西の水田部に11か所(第1～第11トレンチ)、丘陵部で11か所(第12～第22トレンチ)、合計22か所の試掘トレンチを設けて調査を実施した。調査の結果、丘陵南側斜面で2基の瓦窯跡、瓦窯裾部の水田下から灰原を検出した。さらに丘陵上の平坦部では、柱穴等の遺構や、奈良時代の須恵器や瓦が出土した。

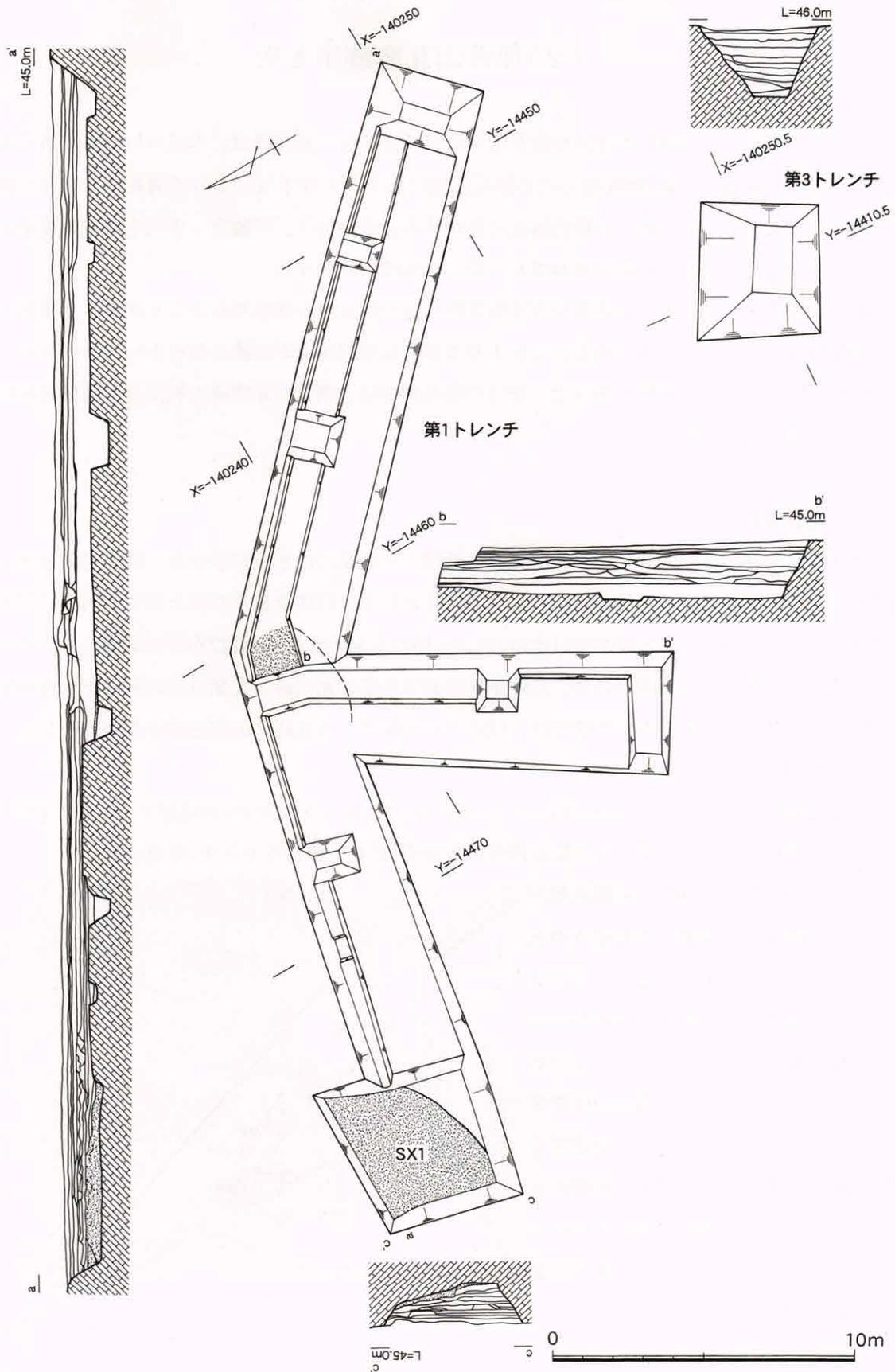
#### (1) 水田部の調査

丘陵南側水田部では、丘陵裾に沿って5か所(第1～第5トレンチ)の試掘トレンチを設けた。また、丘陵西側では、裾周りと下段水田部に6か所(第6～第11トレンチ)を設けた。

第1トレンチ(第29図) 丘陵南側斜面が、馬蹄形に丘陵側に窪む地点の裾部に設けたトレンチである。トレンチは中央を基点に西と南東と南西の3方向に延びる。トレンチ幅は約4mである。トレンチ西端部から黒色の灰原層を検出したほか、トレンチ中央部でもわずかな範囲であったが薄い灰層が存在した。トレンチ西端部検出の灰原は、1号窯に近い南側丘陵斜面にあり、北から南方向に下がる堆積状況を示す。灰原はトレンチ北西コーナーから南東方向に扇形に広がり、灰原の先端はトレンチ外に延びている。トレンチ南端



第28図 鹿背山瓦窯跡調査トレンチ位置図



第29図 第1トレンチ実測図

で確認した灰原層上面は、水田下1.4mを測った。灰原内には多量の丸瓦・平瓦のほか、量的には少ないが須恵器の出土もみられた。また、瓦窯跡発見の契機となった重圏文軒丸瓦と同種の瓦と、重弧文軒平瓦の破片も灰原から出土した。灰原の調査はトレンチ内での検出にとどめ、表層部の瓦についてのみ取り上げた。

第1トレンチの中央部以東と、中央以南は、大井手川に関連するとみられる砂・粗砂・砂礫によるラミナ層の堆積がみられた。

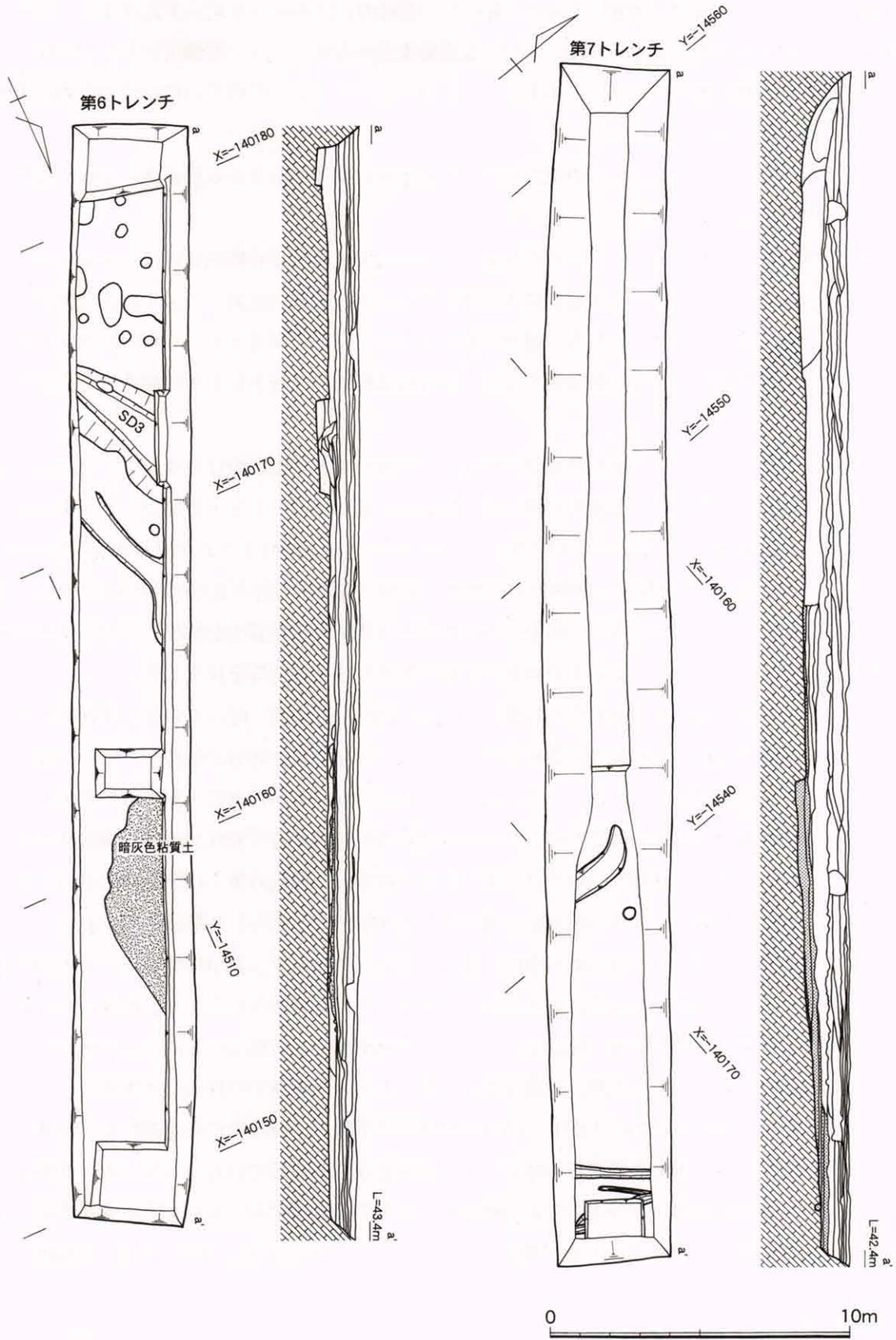
第2～第5トレンチ 第1トレンチの東側、大井手川の上流側で丘陵裾に設けたトレンチである。いずれも大井手川関連の堆積層が耕作土の直下にあり、重機で地表下2mを超えて掘削をおこなった。各トレンチでは、灰原等の遺構は存在しない。湧水によるトレンチ壁面の崩壊もあることから安全面を考慮し、柱状断面図を作成・記録写真撮影後に各トレンチは埋め戻しをおこなった。

第6トレンチ(第30図) 丘陵西側裾部の位段高い位置にある水田に設けたトレンチである。水田面の標高は約43mを測る。丘陵裾に沿って全長37m、幅4mのトレンチを設定した。水田面下0.8mで地山面(黄褐灰色系砂質土)を検出した。地山面上には瓦器片を含む中世遺物包含層(暗灰色砂礫混じり粘質土)が堆積し、同層中には鹿背山瓦窯に関連する軒平瓦(第36図1)や平瓦の破片も存在した。トレンチ北東部で、灰原の可能性のある暗灰褐色粘質土を検出したが、灰層や遺物が含まれていなかった。トレンチの南部で素掘り溝SD3と柱穴等を検出した。

SD3は、幅約2m、深さ約0.6mを測り、方位は北から西に27°振っている。溝の最上層には暗灰色粘質砂が堆積し、中世の土器片が出土した。中層には粗い砂層が堆積し、下層には灰色粘質砂やシルトの堆積がみられた。この下層から、僅かではあるが須恵器・瓦の破片が出土した。下層に中世遺物が含まれないことから、SD3は奈良時代に属する可能性が高い。遺構は部分発掘にとどめたことから、詳細については不明である。検出した柱穴の多くは円形の平面形であり、直径は0.3～0.5mを測る。時代の明らかな遺物の出土が無いことから、時期は不明である。

第7トレンチ(第30図) 丘陵西側の水田に設けたトレンチであり、水田は第6トレンチの西側下段に位置する。水田面の標高は41.9mを測る。トレンチは瓦窯跡の存在する丘陵裾から大井手川にかけて、南東から北西方向に延びる。トレンチの東半部で、南東から北西方向に緩やかに下がる地山(緑灰色砂)を検出したが、遺構はなかった。トレンチ東端での地山面は標高41mである。この地山面の上には暗灰色粘質土が0.2～0.3mの厚さで堆積し、同層中から瓦器片など中世に属する遺物が出土した。出土土器の多くはローリングを受けて摩滅している。トレンチの東半部では、先の中世遺物包含層の上部に灰色系の砂質土や粘質砂が堆積する。トレンチ中央部以西では淡灰色や灰色の粗砂や砂礫、拳大の円礫を含む砂礫が幾層も存在する。また、これら砂礫層は、東から西方向に傾斜する状況などから、大井手川旧流路の右岸部に相当すると考えられる。トレンチ西端付近では標高40.2m付近まで掘り下げたが湧水が激しく、トレンチ壁崩壊の危惧もある状況から、さらに下層の調査については断念した。

第8～第10トレンチ 第7トレンチの北東側の水田部に設けたトレンチである。各トレンチは、



第30図 第6・第7トレンチ実測図

第7トレンチと同様に丘陵裾側から大井手川にかけて、南東から北西方向にトレンチを設定した。第8トレンチは、トレンチ東部では灰色系の粘質砂と砂が堆積し、西部では粗砂や砂礫の堆積がみられた。第7トレンチと同じく、中世遺物を含む暗灰色粘質土が存在するが、出土量は僅かであり小片が多い。第9・第10トレンチは、JR関西線に近い水田域の北東部に位置し、現大井手川からはやや距離がある。第10トレンチでは、水田面下1.5m(海拔約40m)まで掘り下げたが遺構の検出はみられず、灰色系の粗砂・粘質土の堆積が連続している。砂の粒子が小さいことから、大井手川の氾濫原の様相を示す。

**第11トレンチ** 丘陵西側裾部、第6トレンチの南側の水田に設けたトレンチである。水田床土直下に、硬い淡黄褐色砂質土の地山が存在した。地山層は東側丘陵から続いており、丘陵裾部を削平して平坦面が作られている。調査範囲が狭く遺物包含層もないことから削平の時期は不明であるが、周辺の状況から中世頃に平坦地が造られたと考えられる。トレンチ内から柱穴の可能性のある大小の不定形な窪みを検出した。

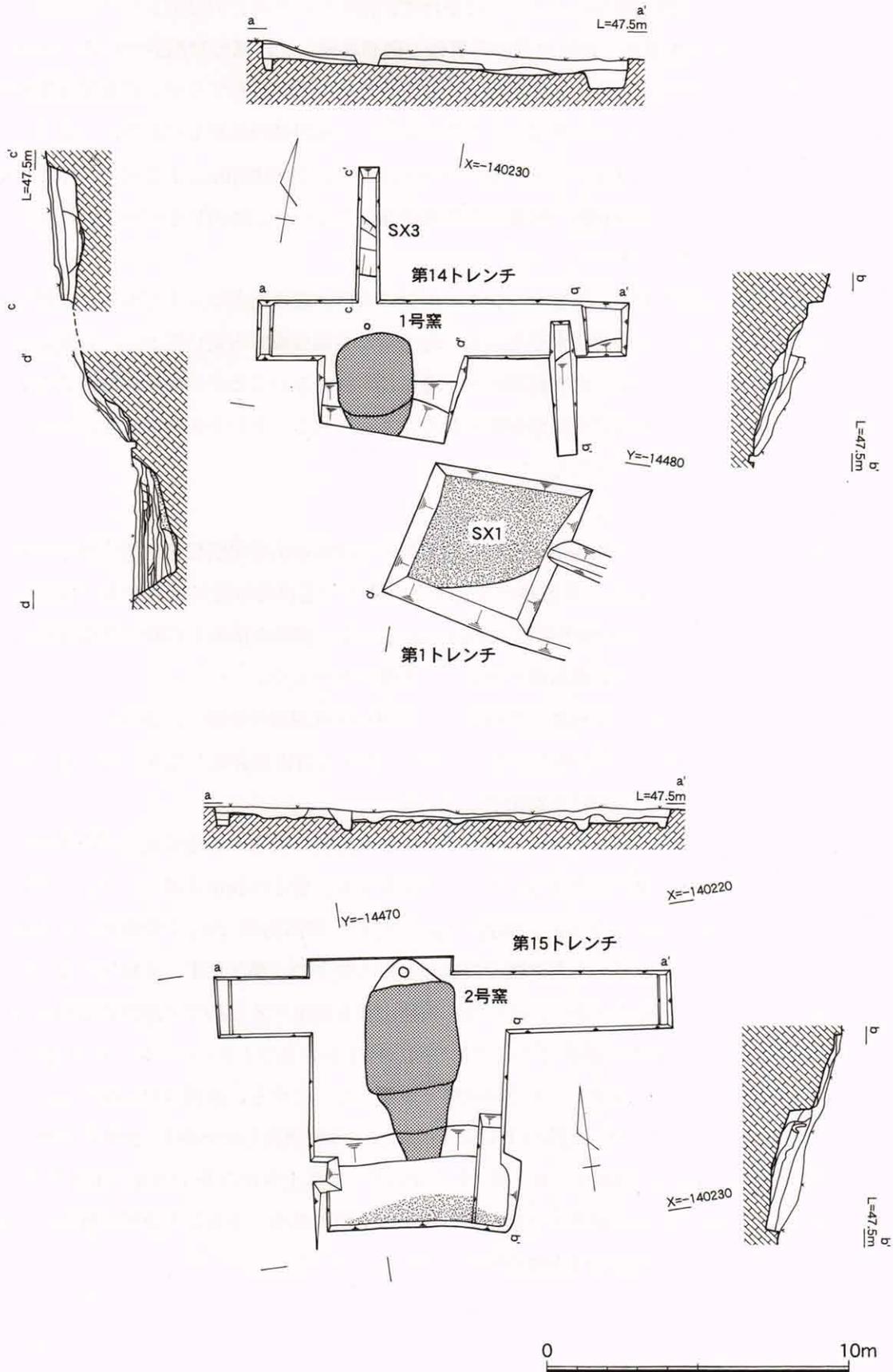
## (2)丘陵部の調査

**第12トレンチ** 第6トレンチ北東部で検出した灰原の可能性のある暗灰褐色粘質土部分の真上丘陵上に設けたトレンチである。瓦窯跡の存在する丘陵上の北西端付近に位置する。表土下約0.3mで地山面を検出した。地山面の標高は約46.1mである。窯跡の検出を目指し丘陵西斜面にも幅1mのトレンチを設けたが、斜面部と丘陵上に遺構はなかった。

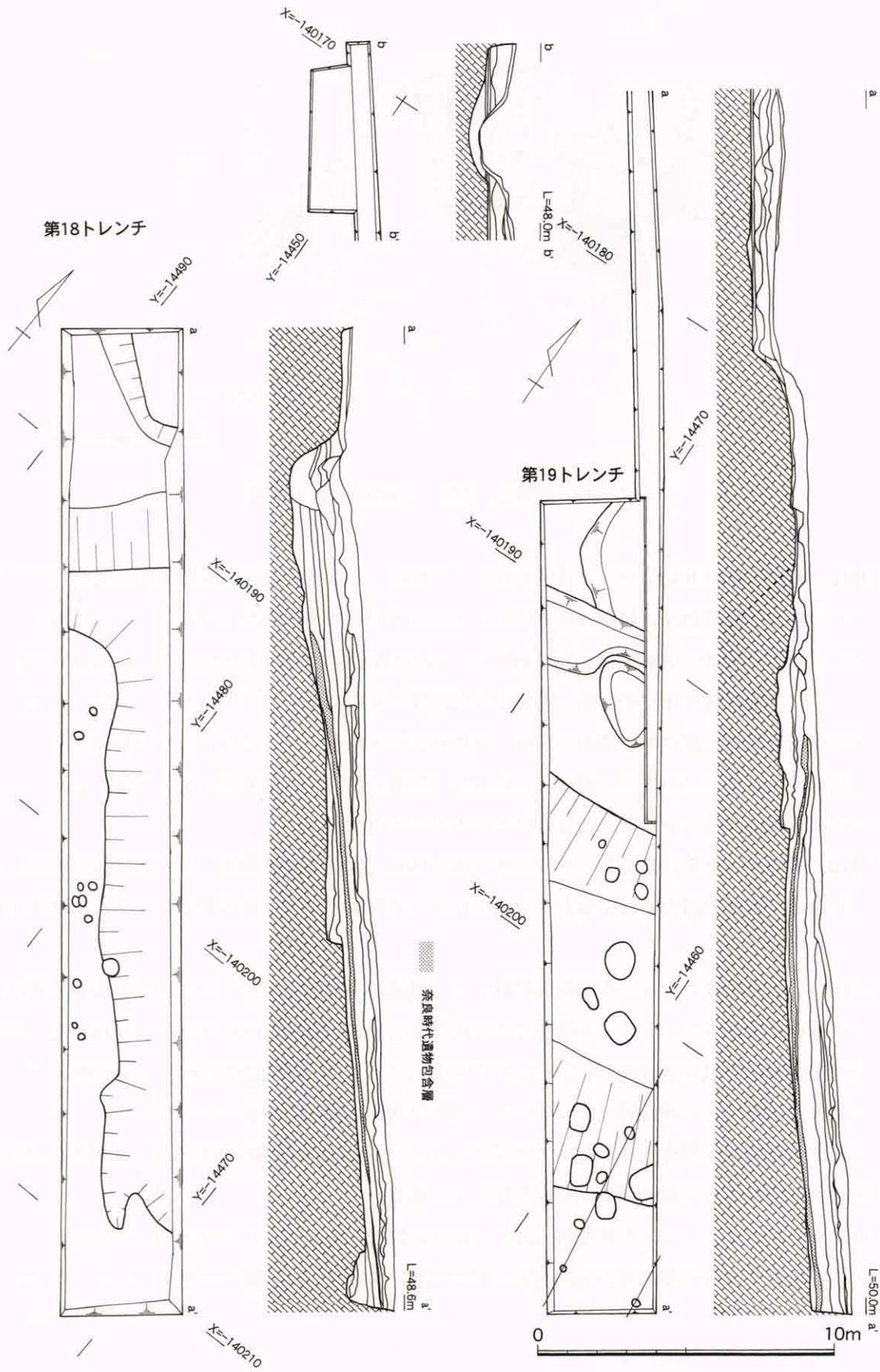
**第13トレンチ** 西方に張り出す丘陵の先端部で、南側斜面西端部の丘陵上に設けたトレンチである。地表下0.3mで砂礫混じりの地山を検出したが、顕著な遺構は存在しなかった。表土層から近世陶磁器に混じって数点の布目瓦が出土している。

**第14トレンチ(第31図)** トレンチは、丘陵の南斜面が北方向に大きく馬蹄形状に窪む地形の上端にあり、第13トレンチの東に位置する。トレンチは幅2m、長さは16mを測る。トレンチ幅は2mで、人力による掘削をおこなった。地表下約0.3m付近(標高約46.2m)で砂礫混じりの地山を検出し、精査の結果、1号窯とした窯跡の焼成部奥壁の焼土の一部と煙出しを検出した。窯本体の大部分が丘陵斜面にあることから、その後、窯跡全体を検出する目的で丘陵斜面を幅5mの範囲で拡張した。また、本体中軸線に沿って北方向に幅1m、長さ4.5mのトレンチを設けた。さらに、トレンチ東端付近の地山上に黒色の灰層を確認したことから、斜面に対し幅1mのトレンチを設定し調査をおこなった。北側のトレンチでは、1号窯煙出しから約1.5m離れた地点でSX6を検出した。SX6は幅約1.5m、深さ0.6mを測り、埋土中から多くの瓦の出土をみた。瓦廃棄土坑もしくは溝の可能性が考えられるが、詳細は不明である。トレンチ東部で検出した灰層は、性格不明であり、斜面部では本体の検出にいたらなかった。

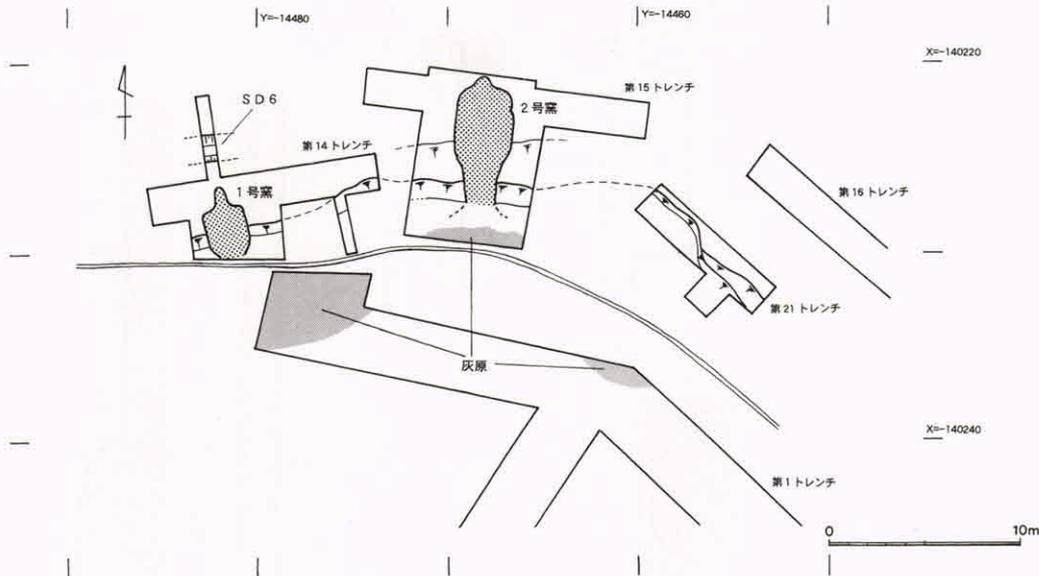
**第15トレンチ(第31図)** 第14トレンチの東側、馬蹄形状の窪み地形の最奥部で、丘陵上の縁辺に設けたトレンチである。トレンチ幅は2mで、人力による掘削をおこなった。トレンチ中央部から、2号窯跡に関連する焼成部と煙出しの一部を検出した。2号窯の大部分が南側丘陵斜面にあることが予想されたことから、その後、本体の検出を目的として斜面部に対して拡張をおこな



第31図 第14・第15トレンチ実測図



第32図 第18・第19トレンチ実測図



第33図 鹿背山1号窯・2号窯・灰原位置図

った。

第16・第17・第21トレンチ 2号窯を検出した第15トレンチの東側、丘陵上縁辺部に設けたトレンチである。現地形は、北から南方向に下がる丘陵斜面の南端部が縁辺に沿ってほぼ水平に削平されている。第16・第17では、厚さ約0.3mの表土層直下に地山を検出した。地山面で精査をおこなったが遺構は存在せず、出土遺物は近代以降のものであった。第21トレンチは、第16トレンチの南側斜面部に設けた。調査の結果、丘陵斜面の下端近くで、丘陵に沿って斜面を削ったカット面を検出した。このカット面は、1号窯と2号窯の焚口から東方向に続きとみられる。トレンチ内に窯跡は存在しないが、奈良時代の須恵器等が出土した。

第18・第19トレンチ(第32図) 丘陵上中央部の西側、大きな谷状地形とその東側緩斜面部に設けた北西から南西方向の並行するトレンチであり、南西側トレンチを第18トレンチ、北東側を第19トレンチとした。

第18トレンチでは、トレンチ西部が東側より1段低い谷地形であり、特に顕著な遺構・遺物の出土がみられなかった。トレンチ東部では地表下約1m(標高約48.6m)付近で、奈良時代～中世の土器を含む遺物包含層(暗灰茶色砂質土)が存在した。この遺物包含層は約0.2mの厚さで、南から北方向に緩やかに谷方向に下っている。遺物包含層を除去し精査をおこなったところ、トレンチ東部の傾斜面上端付近から柱穴や不定形土坑と考えられる遺構を検出した。遺構の土色は、周囲の土よりわずかに暗色が強い茶灰色粘質土である。

第19トレンチは、トレンチ東部が丘陵上の高所に位置する。トレンチ東端部では第18トレンチと同じく地表下0.4m(標高47.8m)付近に遺物包含層を確認した。調査の結果、トレンチ東部に遺物包含層が認められ、西側の谷地形部には及ばないことが確認できた。また、遺物包含層は、東西両端部が高く中央部が緩やかに下がることから、小さな谷地形に堆積した状況にある。この谷地形は第18トレンチ東部の傾斜地形に続く状況にある。トレンチ東端部付近から柱穴を検出し

た。柱穴は直径約0.3mの円形を呈する。柱穴には南北方向に直線的に並ぶものもあり、南北3間(約5.1m)、東西1間(約2.8m)の柱穴を検出した。柱穴は遺物包含層の下から検出し、奈良時代に属する可能性が高いことから、瓦窯跡に関連する建物跡の一部と考えられた。

第20・第22トレンチ このトレンチは、丘陵上の西側縁辺部に設けたトレンチであり、JR関西線を越えた東側から西に延びる谷地形の延長部に位置する。南側の第20トレンチでは、南端部の地表下約1.2m(標高約45m)付近で北方向に急激に下がる地山面を検出し、第22トレンチでは、北端の地表下約0.6m(標高約46m)付近で南に下がる地山面(白灰色系粘質土)を検出した。両トレンチでは共に標高44.5m付近まで2m前後の掘削をおこなったが、地山の検出にはいたらなかった。出土遺物は僅かで、いずれも近世以降のものであった。トレンチ調査の制約と作業の安全面から、谷底までの調査については今回は行っていない。調査範囲内では、灰原など窯跡の存在を示す様相はうかがえなかった。

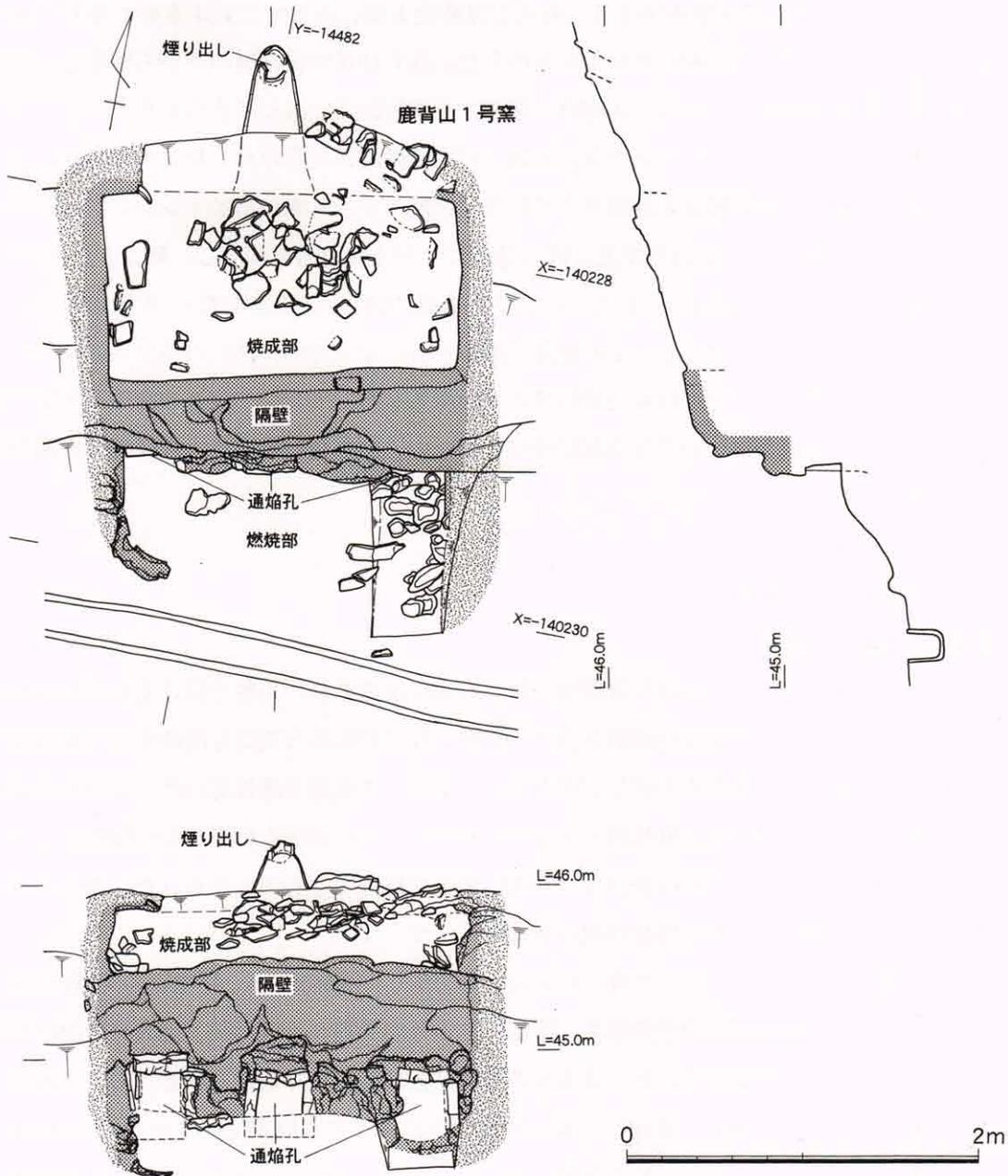
### 3. 1号窯および2号窯

#### 鹿背山1号窯(第34図)

第14トレンチで検出した。窯は丘陵斜面に直行方向に築造され、主軸方位は北から西に約11°振る。窯は、丘陵斜面上端部に焼成部を設け、斜面下部に焼成部と焚口を配置する。焼成部奥壁から北側にやや離れて、煙道の煙出しが存在する。また、焼成部と燃焼部の間には隔壁が存在する。窯跡検出時点で、焼成部と燃焼部の天井は失われていた。窯跡を検出した丘陵裾にはコンクリート製の水路が存在し、窯跡の焚口はこの水路の下に位置するものと思われた。今回の調査では焚口の検出には至らず、また窯体内部の調査も行っていない。

検出した焼成部は等高線に沿って横に長い長方形を呈し、横幅2.0m、隔壁から奥壁間は1.1mを測る。検出面での焼成部の観察の結果、礫混じりの地山を掘り下げた後、焼成部壁面の内側に粘土を貼っていることが確認できた。焼成部内壁の粘土は特に良く焼けた状態にあり、内面は淡黄橙色や灰白色を呈して硬い。煙出しは窯の中軸線上にあって、焼成部奥壁から約0.6m離れた位置に存在する。煙出しは丸瓦2個を筒状に合わせていることから、下部の煙道にも瓦が使用されている可能性が高い。煙出しに近い焼成部奥壁は大部分が壊されており、焼土を含まない埋土が存在した。瓦製品の取り出しに伴って壊されたと判断される。隔壁で検出した通焰孔の存在から、焼成部床面の位置を推定することができた。多くの事例から焼成部床面と通焰孔の底面はほぼ同じ高さにあることから、焼成部の壁高は奥壁側で約1.5m前後と思われる。

焼成部の前部に、燃焼部と区画する厚い隔壁が存在する。隔壁は淡い桃橙色で良く焼けた状態にある。隔壁の上端面から燃焼部側壁面は、構築時の粘土の積み上げ痕跡と判断するごつごつした凹凸がみられた。隔壁は約0.6mの厚さを測り、上端部は両サイドから中央部にかけてドーム状に高まる。燃焼部奥壁中央付近の上端から約0.3m下がった位置に、直径約4～5cm、深さ約25cmの小穴が存在する。穴は焼成部までは貫通せず、開口部から先端にかけてすぼまる。また、穴は隔壁に対して直交し、開口部が先端に対してやや下がる。この小穴は、隔壁を構築する際の



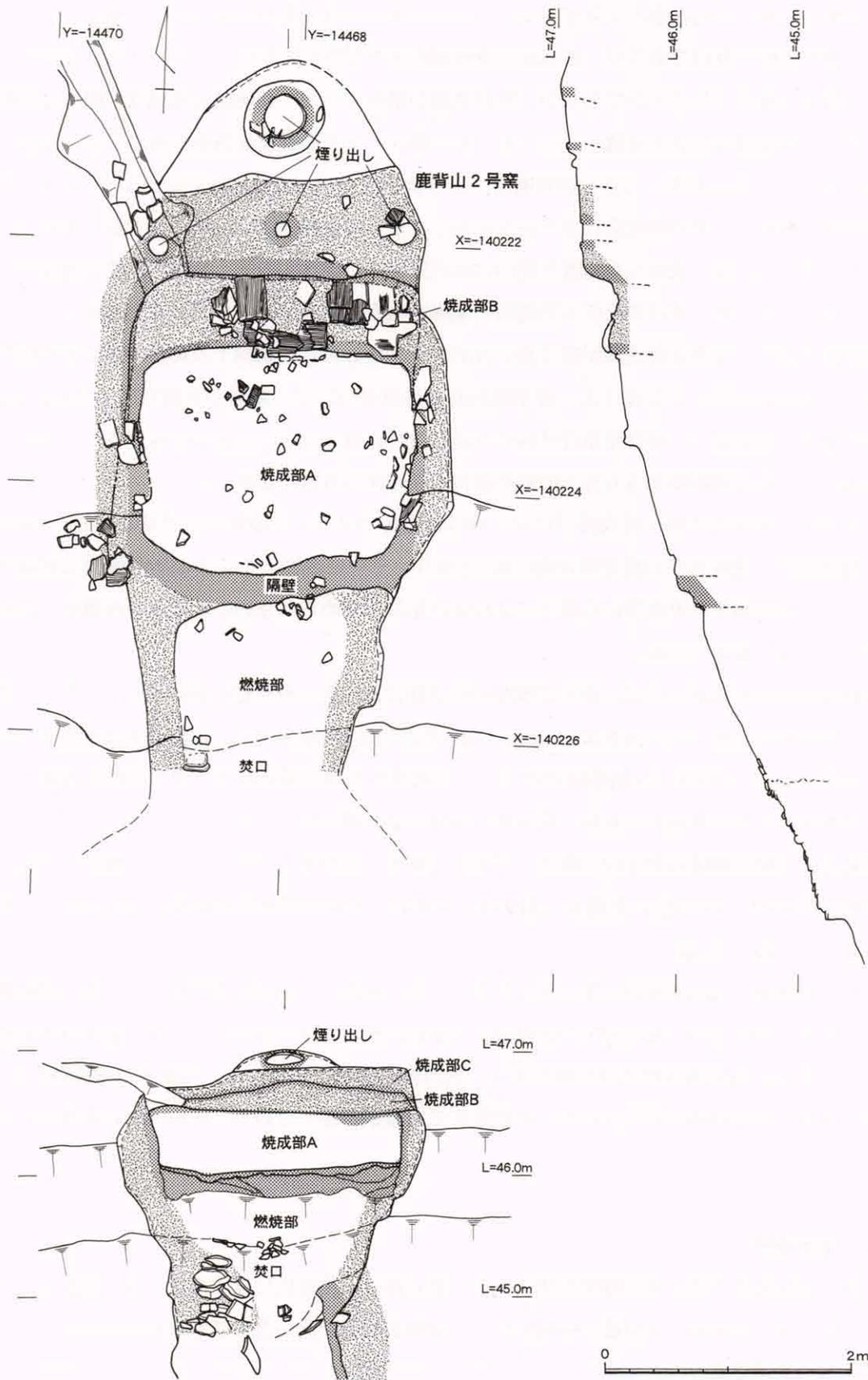
第34図 鹿背山1号窯実測図

控え(棒状物か)の跡とも考えられるが、詳細は不明である。

隔壁の下部には、横1列に並ぶ2か所の分焰柱と3か所の通焰孔が存在する。通焰孔は磚を鳥居形に組み、丁寧に仕上げられている。3か所の通焰孔のうち西側の通焰孔だけ天上部に磚を使用するが、側壁の構築材に平瓦と板石が使用される。通焰孔に使用された磚は須恵質で、1辺約30cm×厚さ7cmを測る。通焰孔の底面は、粘土を貼って仕上げる。焼成部の床面は通焰孔よりさらに下がった位置にあるが、今回の調査では床面の検出にいたっていない。

燃焼部の平面形は隔壁側から焚口方向にかけてすぼまる状況にあるが、焚口部分を含め詳細は不明である。焼成部の埋土中には、壊れた窯壁の焼土に混じって平瓦や丸瓦の破片が存在した。

鹿背山2号窯(第35図)



第35図 鹿背山 2号窯実測図

1号窯から東に約12m離れて存在する。窯跡の主軸方位は、北から東に約2°振る。1号窯と同じく保存状態は良好であるが、燃焼部と焼成部の天井部分が失われている。また、2号窯では焚き口部分を検出することができたが、焚口東側が壊れていた。燃焼部と焼成部の間には隔壁が存在する。焼成部で精査を実施したところ、良く焼けた3面の焼成部奥壁を検出した。最低2回の焼成部の造り替えがあったことが判明し、造り替えの度に焼成部の奥壁がおよそ0.6mの間隔で隔壁側に移動し、その都度奥行きが短くなる。焼成部の幅はほとんど大きく変化はしていないと考えられる。検出した隔壁と焚口は最終操業時に伴うもので、操業開始時の施設の状況は明らかではないが、焚口の位置と燃焼部の規模は大きな変更はないものと考えられる。

操業開始時の2号窯は焼成部が縦に長い方形プランをもち、中軸線上の奥壁外側にやや離れた位置に1か所の煙出しが存在する。操業開始時の焼成部(C)は、隔壁から奥壁間まで約3.2mの規模を測る。焼成部は、最終操業時壁体の外側に並行に据えられた丸瓦が存在することから、この丸瓦の下に操業開始時か造り替え段階の壁体が存在する可能性が高い。

1回目の造り替えに伴う焼成部(B)は、ほぼ正方形のプランで隔壁から奥壁まで約2.4mを測る。焼成部Bと焼成部Cの奥壁間は約0.6mを測り、その間の埋土中に3か所の煙出しが設けられている。検出面では焼成部Cの埋土には補強の瓦等が認められない。焼成部Bの奥壁には粘土が貼られ、良く焼けている。

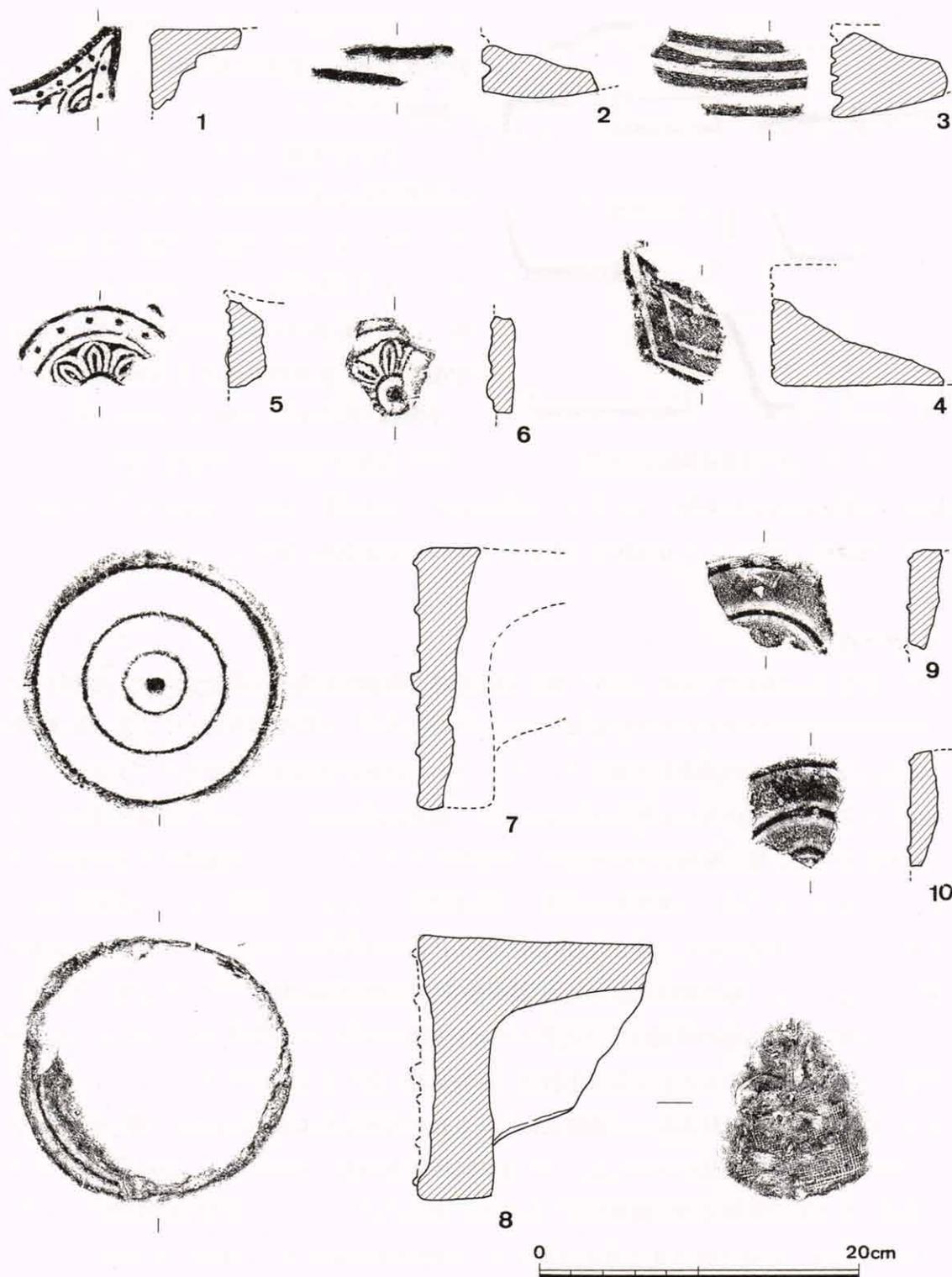
最終操業時の焼成部(A)は、さらに奥壁が隔壁側に近づき、やや横に長いプランとなる。焼成部Aは隔壁から奥壁までの長さは約1.8m、幅は約2.2mの規模を測る。焼成部Aの奥壁は、焼成部B奥壁からさらに約0.6m隔壁側に近づく。焼成部Bの埋土部分には、窯体奥壁の補強とみる平瓦が縦横に丁寧に積み上げられ、瓦の間には粘土が充填されている。

燃焼部は丘陵南裾側の焚き口に向かって幅をせばめ、逆台形のプランとなる。検出した焚口から隔壁までは約1.3mの長さを測る。隔壁は、通焰孔・分焰柱の状況が把握できないが、上端部での厚さは0.25mを測る。

焚口は丘陵裾の地山を垂直に削り出したカット面に存在し、石積みが存在した。焚口西壁側では、人頭大の川原石が一部に約0.65mの高さで垂直に積み上げられている。焚口底面は未確認であり、石積みの基底部の状況は不明である。焚口東側は壊されており、石積みは確認されない。焚口の前面の状況は明らかでないが、やや離れて灰原が存在している。灰原内から重圏文軒丸瓦が出土した。

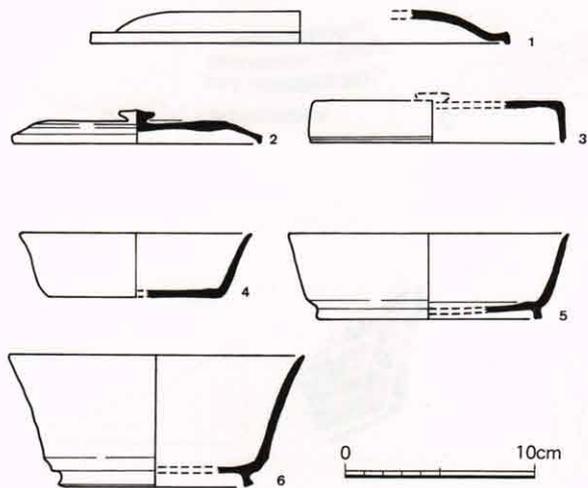
#### 4. 出土遺物

今回の試掘調査では、縄文時代のサヌカイト製石匙、奈良時代に属する瓦・埴・須恵器・土師器、中世に属する瓦器・土師皿・陶磁器などの遺物が出土した。なかでも大多数を占めるのは瓦類で、次いで須恵器の出土比率が高い。瓦類は2基の窯跡とその周辺部、第1トレンチ検出の灰原からの出土が多数を占める。中世遺物は、丘陵西裾の第6トレンチと丘陵上の第18・19トレンチに分布する。



第36図 出土遺物実測図1(軒丸瓦・軒平瓦)

瓦類(第36図) 整理コンテナに約50箱の出土をみた。丸瓦と平瓦が大多数を占め、軒瓦と博も少量含まれる。平瓦は1枚造りであり、縄目タタキと布目圧痕をもつ。ここでは、主要な軒瓦について図化した。1は、平城京6685型式の均整唐草文軒平瓦であるが、これまでの類例(A種～F種)とは、外区上部の珠文の位置が異なることから新種の可能性が高い。2・3は、重弧文もしくは重郭文軒平瓦の一部である。このうち3の瓦当面では砂粒の引き傷があることから、重弧



第37図 出土遺物実測図2(土器)

灰原から須恵器の出土をみた。1～2は、杯蓋であり、3は壺蓋である。4は杯Aで、底面はヘラ切りで未調整である。5・6は杯Bである。いずれも平城Ⅲ期に属する。

## 5. まとめ

今回の調査は試掘調査ではあったが、鹿背山瓦窯跡で最初の本格的な調査となり、瓦窯跡・灰原・柱穴等の遺構を検出する大きな成果を得ることができた。丘陵南斜面部から2基の瓦窯本体跡を検出したが、内部の調査を実施していないことから詳細は現時点では明らかではない。

検出した2基の瓦窯のうち1号窯は平窯であり、隔壁に設けられた3か所の通焰孔は博を鳥居形に組み合わせた、他に類例がみられない丁寧な作りをもっていた。2号窯は焼成部が最低2回大きく作り変えられており、窖窯から平窯への変遷過程がうかがえる窯跡である。操業開始時の焼成部は縦に長い窖窯である。第1回目の造り替えに伴う焼成部は方形プランの平窯で、奥壁外に煙出しが存在する。第2回目の造り替え(最終操業時)の焼成部は横長プランの平窯へと変わる。出土瓦の特徴から、窯跡の時期は聖武天皇の平城京遷都(745年)前の時期と考えられる。灰原内や丘陵上の遺物包含層から出土する須恵器は、平城Ⅲ期に属するものである。

出土した軒瓦のうち、軒丸瓦には重圈文軒丸瓦と複弁蓮華文軒丸瓦(平城宮6313系)の2種がある。このうち重圈文軒丸瓦については、これまでに出土例の無いものである。外縁の張り出しのない重圈文軒丸瓦は伊勢地域に類例がみられるが、有心でないことから鹿背山瓦窯跡例とは異なる。<sup>(注10)</sup>軒平瓦では、重郭文軒平瓦と重弧文軒平瓦、均整唐草文軒平瓦(平城6685系)が出土している。<sup>(注11)</sup>

丘陵上で検出した柱穴は、瓦窯跡に関連する建物跡の柱穴と考えられることから、工房建物跡や付属施設が丘陵状に存在する可能性が高い。

以上の調査成果から、鹿背山瓦窯跡は平城宮や平城京内の主要施設の造営・改修に深く関わり、国が管理した官営瓦工房の一つであると考えられる。また、2号窯は窖窯から平窯への造り替えがあり、過渡期の窯跡として特に重要な位置を占める窯跡である。(竹原一彦)

### (3) 赤ヶ平遺跡(第4次)

#### 1. はじめに

調査地の所在地は京都府木津川市木津赤ヶ平、東小林ほかである。標高は約50mを測る。平地部分との比高差は約20mである。

赤ヶ平遺跡は北側に木津川を見下ろす丘陵の縁辺部に位置している。西眼下には南北方向に切れ込んだ谷地形(釜ヶ谷)があり、この場所(釜ヶ谷遺跡)からは奈良時代前半の人面墨書土器や土馬、斎串など水辺の祭祀遺物が多数出土している。また、その谷の対面には今回報告した内田山古墳群・内田山遺跡<sup>(注13)</sup>のほか、燈籠寺遺跡などが所在する内田山丘陵が派生している。

遺跡の調査は昭和59年度に第1次調査、平成13年度に第2次調査、翌14年度に第3次調査を実施した<sup>(注14)</sup>。

第1次調査においては試掘トレンチを7本入れ(面積合計366m<sup>2</sup>)、1か所のトレンチ(7bt.)で石器を中心とした遺物集中地点を確認するに止まったが、第2次調査では第1次調査の遺物集中地点(7bt.)を拡張することによって、その部分が竪穴式住居跡であることが確認された(第1・2トレンチ)。主な検出遺構として弥生時代中期の竪穴式住居跡(SB15)や同前期とされる石器製作に伴う廃棄土坑(SX16)、中世の鏡埋納坑(SX41)などがある。第3次調査は第2次調査の結果を受けて第1・2トレンチの北側および南側を拡張し調査をおこなうとともに遺跡の範囲確認を目的としたトレンチ調査を実施している。第1トレンチでは遺物包含層が部分的に認められ、この包含層を介し上下に2面の遺構面が確認されたが、遺構に伴う出土遺物が乏しく各遺構面の時期は不明である。また第2～5トレンチではわずかに土坑、溝、木棺墓などが検出されたが、出土遺物が乏しく各遺構の所属時期は不明である。

#### 2. 調査の概要

今回の調査は昭和59年度に実施した第1次調査の結果を受けて丘陵北側縁辺部に設定した4・5bt.の拡張調査とその西側の面的調査を実施するとともに、過去に試掘調査を実施していない丘陵平坦面西側の遺構の分布状況を確認する目的で試掘調査をおこなった。調査面積は本調査部分が1,000m<sup>2</sup>、試掘調査部分が2地点各300m<sup>2</sup>の合計1,600m<sup>2</sup>である。今回の本調査地は第2次調査で竪穴式住居跡などが検出されたトレンチの西側隣接地にあたり遺構の広がりが見られるか否か成果が期待された。

発掘調査は樹木伐採および伐採木の搬出後、重機により表土および耕作土を除去し、その後人力掘削に切り替えて遺構の検出に努めた。以下に調査概要を述べる。

##### (1) 1～3トレンチ(第39図)

京都府立木津高等学校の実習農園跡地に3か所の試掘トレンチを設定した。耕作土直下で東西方向を主体とした耕作溝および暗渠排水溝を多数検出した。時期は近世～現代にかけてのもの



第38図 調査地位置図

考えられる。それ以前の遺構は検出できなかった。

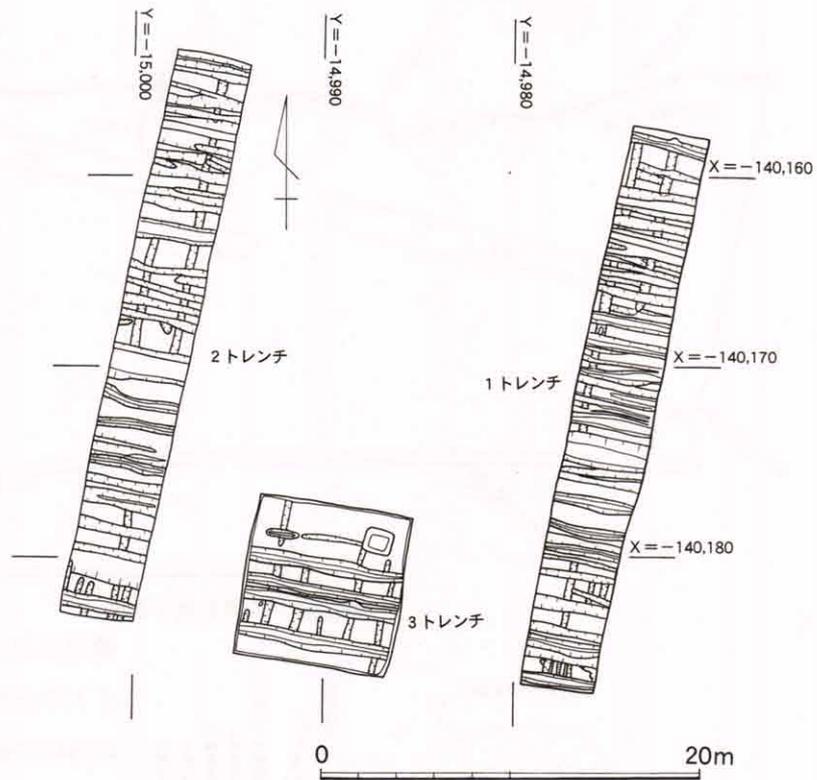
(2) 4 トレンチ(第40図)

農場進入路の形状に合わせて東西および南北方向の「L」字状のトレンチを設定し、重機により掘削した。地山面と思われる安定面で遺構検出をおこなったが、現地形に見られた地境溝や攪

乱土坑などを若干確認した以外、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。

(3)本掘部分(第41・42図)

第1次調査の4・5bt.部分を取り込むかたちで重機により掘削をおこなった。調査の結果、近世段階と考えられる耕作溝や地境溝、奈良時代の土器を含む楕円形の土坑などを検出した。土坑SK01は長軸約3.1m、短軸約1.7m、深さ0.2mを測る。土坑の埋土中から須恵器の蓋、杯の破片、土師器の破片などが出土した。遺物に伴って若干の焼土塊も見られた。また遺構に伴う遺物ではないが弥生土器の破片や石器素材となる石材(サヌカイト)も出土した。

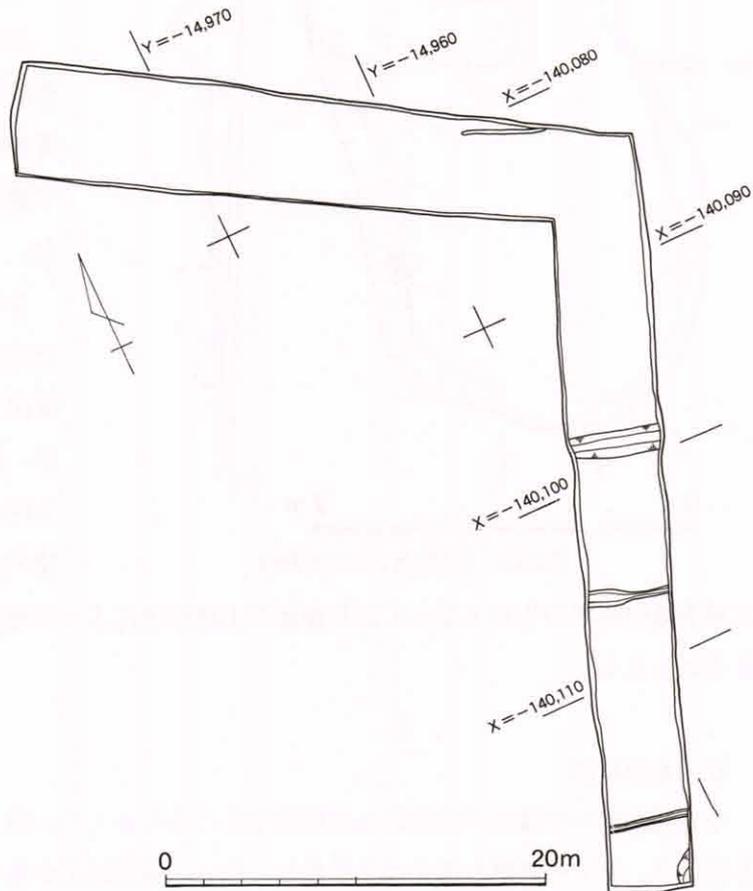


第39図 1～3トレンチ平面図

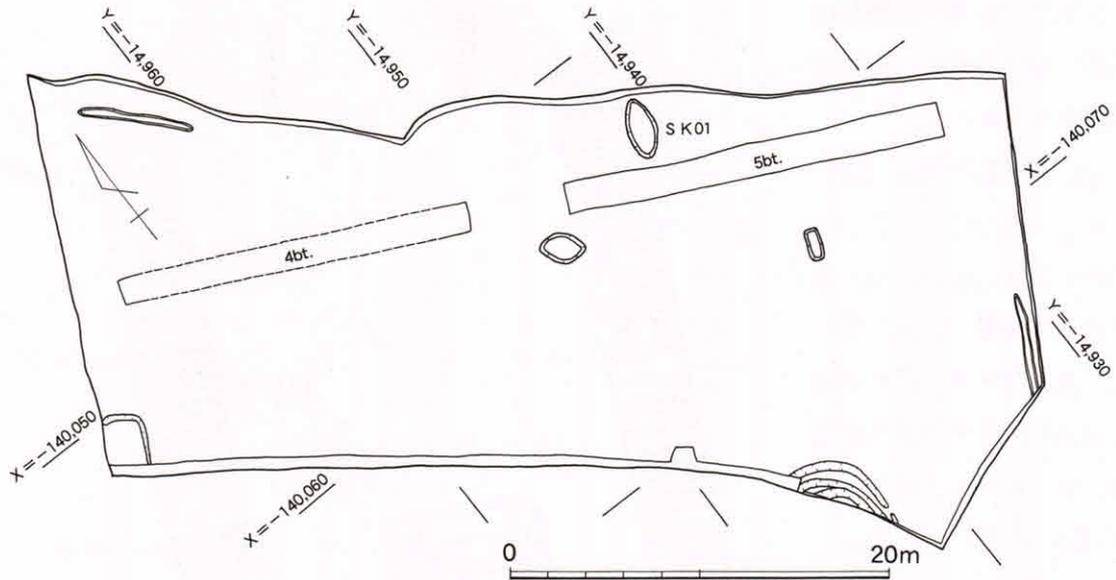
3. 出土遺物(第43図)

土坑SK01(1～3)、弥生時代の遺物包含層(4)、近世の畝溝(6・7)、表採資料(5)を図示した。

1は須恵器杯蓋である。2は須恵器杯Aである。3は須恵器甕の体部上半部の破片である。外面は格子タタキおよびカキメ、内面はナデ調整である。4はサヌカイトの剥片である。特に

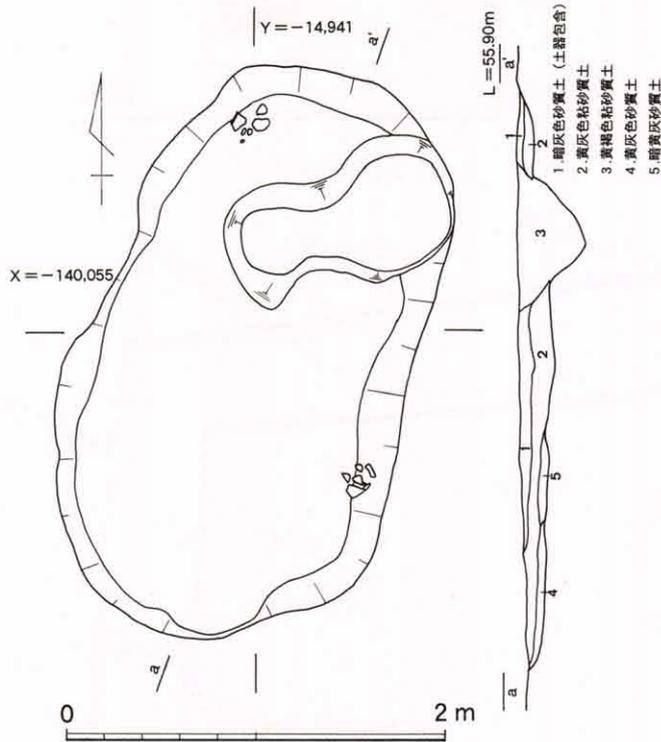


第40図 4トレンチ平面図



第41図 本調査地平面図

細部の加工は見られない。5はサヌカイトの石核である。表面にサヌカイト以外の夾雑物の結晶も認められる。



第42図 土坑(S K01)実測図

#### 4. まとめ

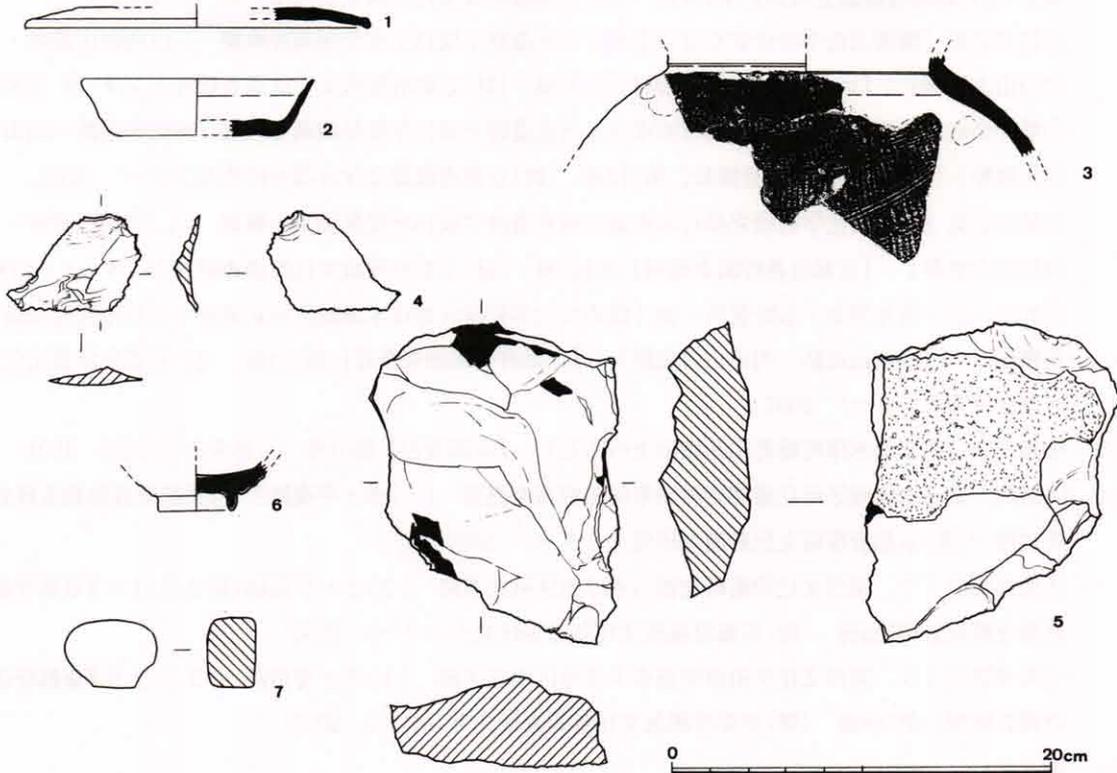
丘陵平坦面に設定した1～3トレンチは、近代～現代の畑の耕作に伴う畝溝や暗渠排水溝などが検出されたのみで顕著な遺構・遺物は出土しなかった。

また、今回の本調査地は第2次調査で弥生時代中期の竪穴式住居跡などを検出した調査地の西側部分に当たるが、弥生時代の遺物(土器、サヌカイト片)がわずかに出土したものの、遺構の広がりには確認できなかった。これ

は調査地の現状が竹藪となっており後世の土地利用によって地形が全体に改変された結果であると考えられる。

#### 5. おわりに

今年度が赤ヶ平遺跡の面的調査の最終年度にあたるため、第1～4次調査の調査を総括することにより、赤ヶ平遺跡の調査のまとめとしたい。調査結果から全体として遺構の遺存状況は後世の開発により極めて悪い。第2次調査における調査成果がもっとも良好なものとなっている。遺



第43図 出土遺物実測図

構として弥生時代前期の石器および石器製作に伴う剥片廃棄土坑S X 16や、直径約6 mを測る平面形が円形をなす弥生時代中期の竪穴式住居跡S B 15などがある。

第1～4次調査において明確な弥生時代の遺構はこれらの遺構のみであり、第4次調査では包含層中よりかなり磨滅した凹線文土器の破片とサヌカイトの剥片、表採資料ではあるが、自然面を残すサヌカイトの石核も出土した。

しかし先ほども述べたように後世の土地利用により遺構面自体が削平を受けた可能性が高く、弥生時代の集落の広がりや把握することは不可能である。ただし遺構が平地との比高差約20mを測る丘陵上に立地しており、かつてはこの丘陵上に集落が広がっていた可能性もある。

当遺跡の周辺には府立木津高等学校地内に所在する弥生時代後期の燈籠寺遺跡をはじめ、木津城山遺跡、白口遺跡や内田山遺跡など後期の竪穴式住居跡が多数確認されており、内田山遺跡の弥生時代の遺構も同様に高地に営まれた集落の一部と考えられる。

(柴 暁彦)

注1 平成19年3月12日に相楽郡木津町・同加茂町・同山城町が合併し、木津川市となった。平成18年度の調査中は、調査地は木津町に属するが、本文中では全て新住所表記を用いることとした。

注2 ①筒井崇史「木津地区所在遺跡平成11年度発掘調査概要 (1)内田山遺跡・内田山B 1号墳」(『京都府遺跡調査概報』第95冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000

②筒井崇史・山内基樹「木津地区所在遺跡平成12年度発掘調査概要 (2)内田山遺跡・内田山古墳

- 群) (『京都府遺跡調査概報』第101冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
- ③筒井崇史「関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡平成14年度発掘調査概要 (3)内田山遺跡・内田山古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第109冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003
- ④筒井崇史「関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡平成15年度発掘調査概要 内田山遺跡・内田山古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第113冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2004
- ⑤筒井崇史「関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡平成16年度発掘調査概要 (1)内田山遺跡・内田山古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第117冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2006
- ⑥竹原一彦・筒井崇史・永野英樹・他「関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡平成17年度発掘調査概要 (1)内田山遺跡・内田山古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第124冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2007
- 注3 中島 正「相楽郡木津町鹿背山瓦窯出土の古瓦」(『京都考古』第61号 京都考古刊行会) 1991
- 注4 ①黒坪一樹「木津地区所在遺跡昭和59年度発掘調査概要 (1)赤ヶ平遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第17冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- ②筒井崇史「7. 関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡 (2)赤ヶ平遺跡(第2次)」(『京都府遺跡調査概報』第105冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002
- ③筒井崇史「3. 関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡 (1)赤ヶ平遺跡(第3次)」(『京都府遺跡調査概報』第109冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003
- 注5 調査参加者(順不同)
- 調査補助員 渡辺理気・大谷博則・土屋菜摘子・坂下 実・永野英樹・田中拓史・河原智也・田邊恵里香・金原裕美子・山崎香織・喜多萌夏・兼子拓也・鈴井宣雄・大江克己
- 整理員 山田三喜子・岡野奈知子・田中智子・鷲田紀子・寺尾貴美子・清水友圭子・川村真由美・久米政代・藤井矢壽子・藤井聖名子・田中 博司・中井光三
- 注6 周壁溝は腰板や網代壁など住居跡壁面の養生材下端部を固定する溝と考えられ、養生後は埋め戻されたとみられている。SH40では、周壁溝内底面に炭化材が落ち込む状況から、焼失前の住居跡床面に周壁溝が埋まることなく存在していたことを示している。ただし、住居存続中から周壁溝が開いていたものか、住居廃棄に住居壁養生材を取り除いたことで溝が掘られたものか、今回の調査では確証が得られない。
- 注7 この稿を書くにあたって同志社大学大学院上峯篤史、吉村駿吾両氏より指導、助言を得た。ここに記すことにより感謝の意を表したい。
- 注8 ①麻柄一志・古森政治「土坑1の剥片生産技術—縄文早期の石器群の分析—」(『二上山・桜ヶ丘遺跡—第1地点の発掘調査報告—』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第三十八冊 奈良県立橿原考古学研究所) 1979 118~152頁
- ②石神幸子「久宝寺遺跡(北地区)縄文時代包含層出土集積サヌカイトについて」(『河内平野遺跡群の動態Ⅴ 近畿自動車天理~吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—南遺跡群—旧石器・縄文・弥生時代前期編』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター) 1992 105~399頁
- ③岸本道昭「縄文時代」(『久宝寺北(その1~3) 近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター) 1987 18~33頁
- ④山田昌久「縄文時代における石器研究序説—剥片剥離技術と剥片石器をめぐって—」(『論集日本原史』吉川弘文館) 1985 219~252頁
- 注9 川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』第64巻第4号) 1978

注10 竹内英昭「伊勢地方における官系瓦の分布～奈良時代後半期の軒丸瓦の様相～」(『齋宮歴史博物館研究紀要』2 齋宮歴史博物館) 1993

難波宮式瓦(重圈文)の出土遺跡として、鈴鹿市広瀬長者屋敷遺跡など、7遺跡が知られている。

注11 『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』奈良市教育委員会 1996

注12 有井広幸「木津地区所在遺跡平成6年度発掘調査概要 (3)釜ヶ谷遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第68冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996

注13 注2に同じ

注14 注4に同じ

注15 ①伊賀高弘「(1)木津城山遺跡 3. 木津地区所在遺跡平成9年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第85冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998

②伊賀高弘「(1)木津城山遺跡 4. 木津地区所在遺跡平成10年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第90冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999

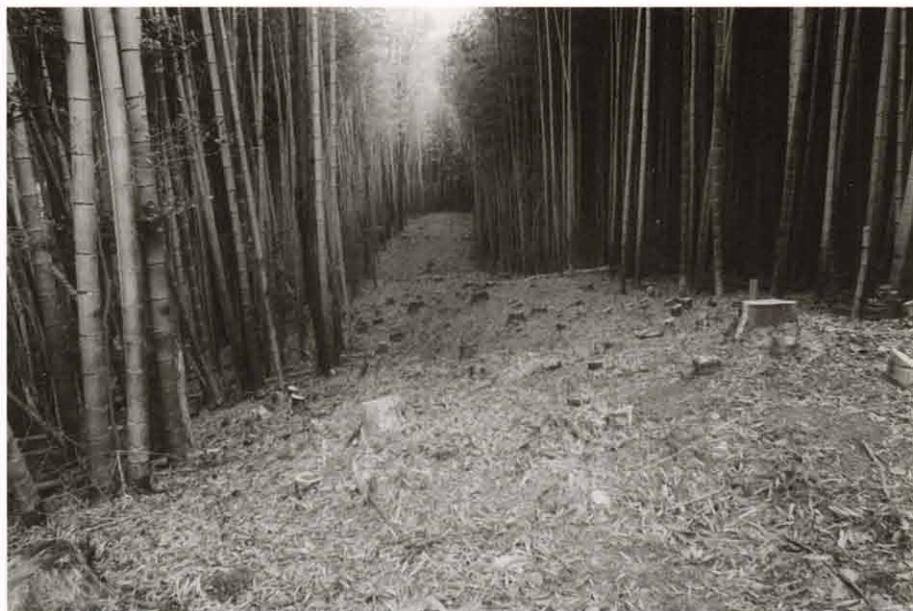
③筒井崇史ほか「木津城山遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第32冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003



# 圖 版



(1) 内田山遺跡・内田山古墳群  
第 7 次調査地(北から)



(2) 第 7 次試掘対象尾根(南から)



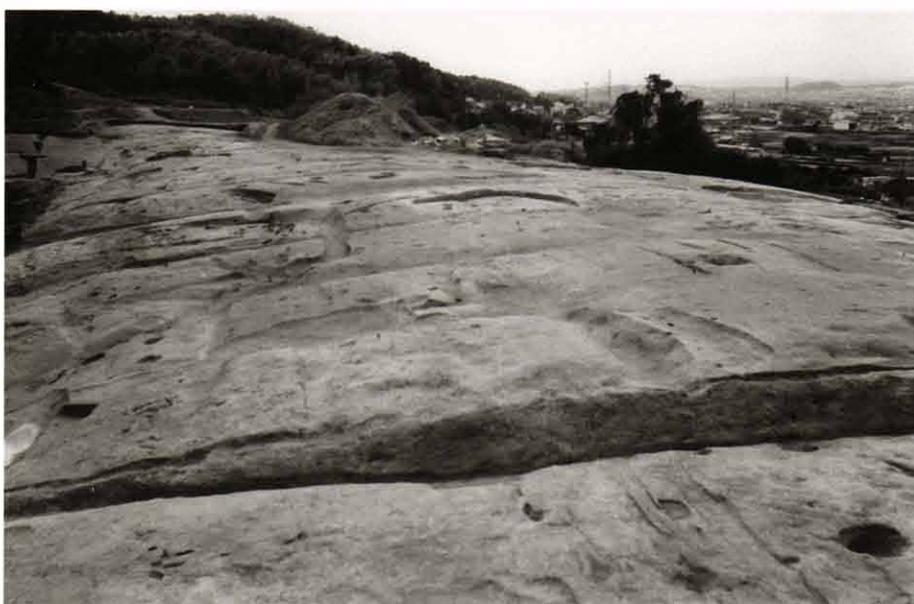
(3) 第 7 次試掘調査トレンチ全景  
(北から)



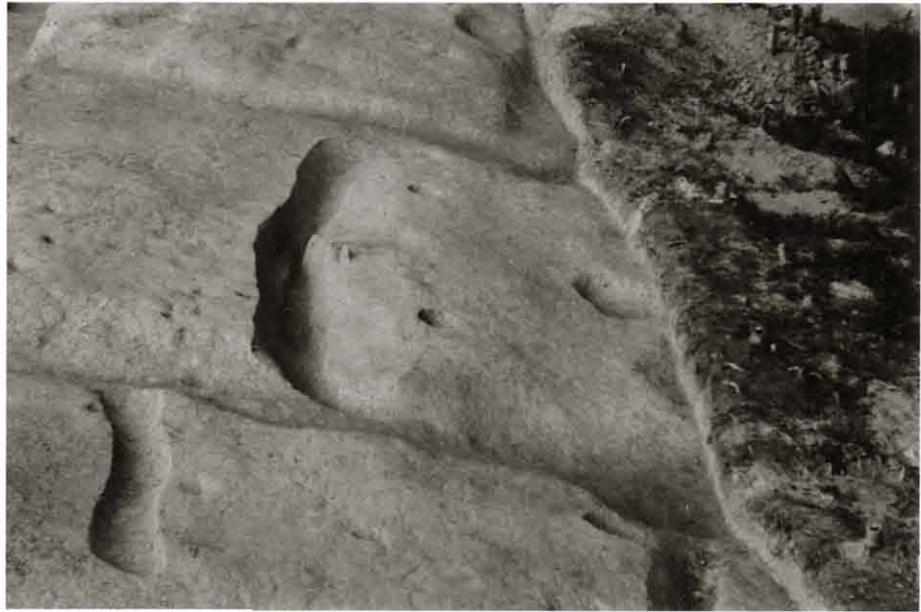
(1) 第 7 次調査地全景(左が北)



(2) 第 7 次調査地全景(南から)



(3) 第 7 次調査地(北から)



(1) 竪穴式住居跡 S H48(南から)



(2) B 7 号墳下層検出  
竪穴式住居跡 S H10(西から)



(3) 竪穴式住居跡 S H30(北から)



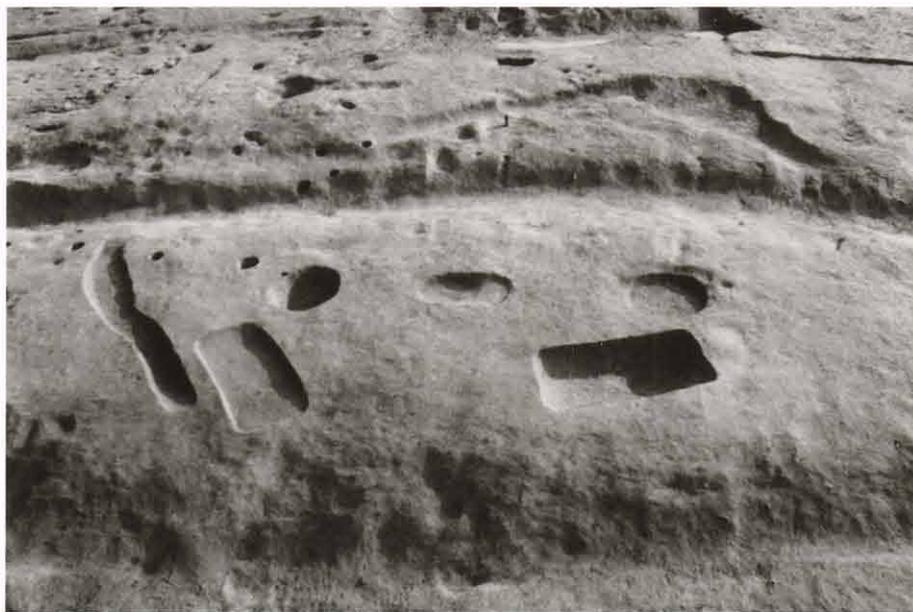
(1) 竪穴式住居跡 S H40  
炭化材・焼土検出状況(西から)



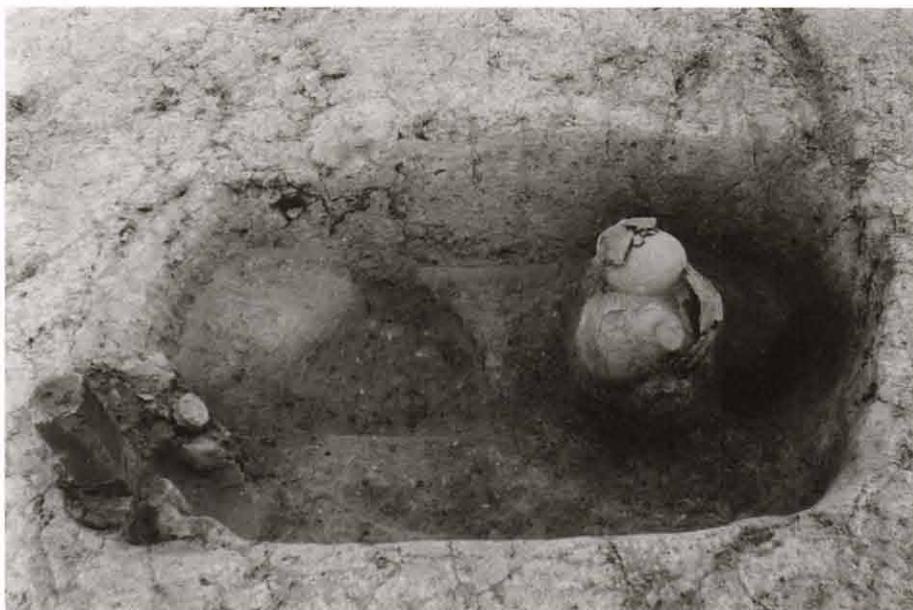
(2) S H40周壁溝内炭化材検出状況  
(北から)



(3) S H40完掘状況(北から)



(1) 方形周溝墓検出状況(北から)



(2) 土坑 S K 49(南から)



(3) 落し穴 S X 51(東から)



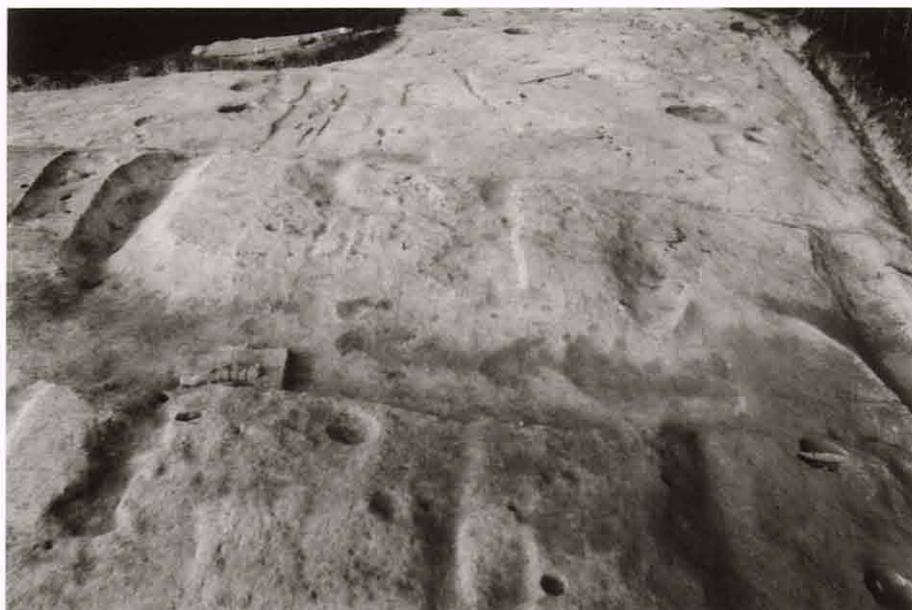
(1) B 3 号墳全景(東から)



(2) B 6 号墳全景(南から)



(3) B 7 号墳全景(西から)



(1) B 4 号墳全景(南から)



(2) B 4 号墳周溝内埴輪検出状況  
(南から)



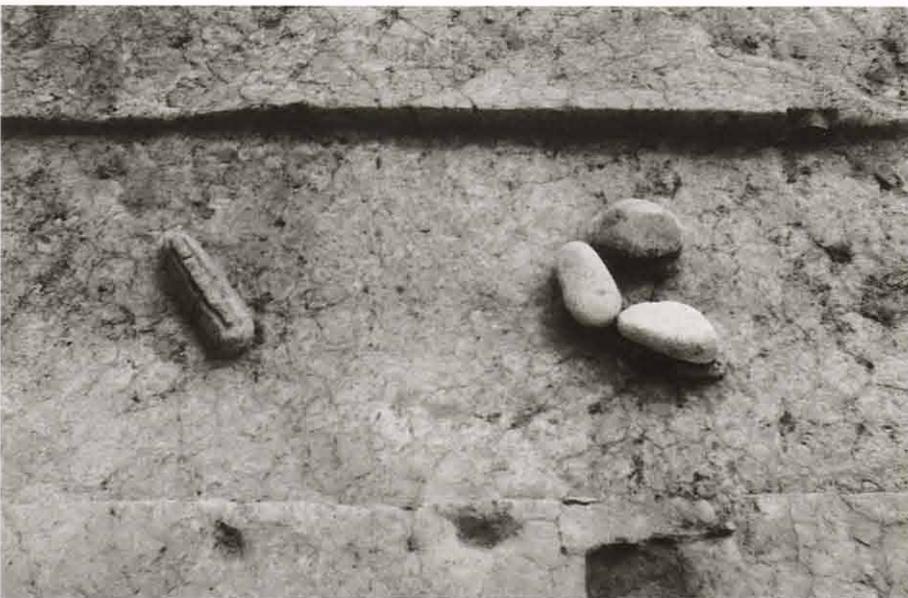
(3) B 4 号墳周溝内埴輪棺 S X 35  
検出状況(北から)



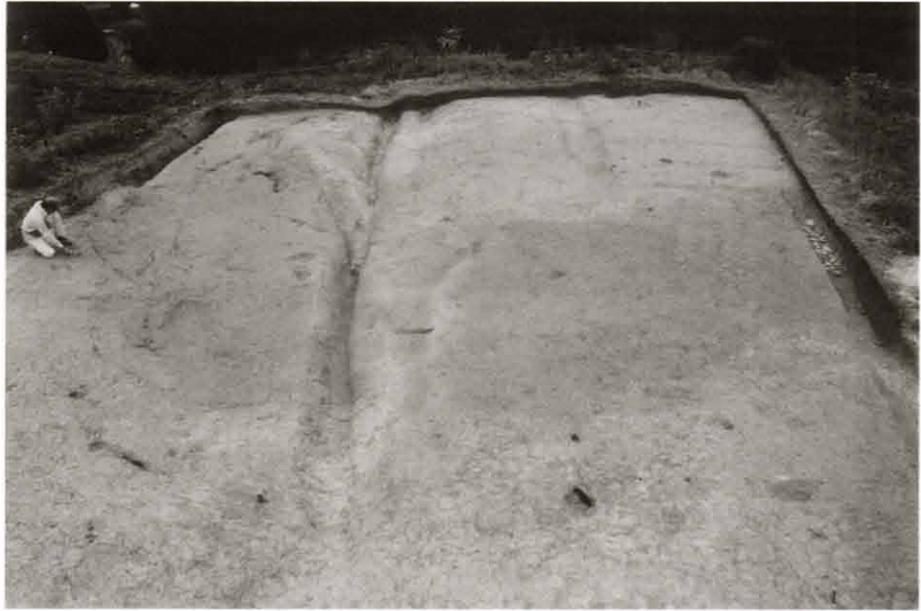
(1) B 5号墳全景(南から)



(2) B 5号墳埋葬施設 S X29  
(西から)



(3) S X29棺内鉄製刀子と枕施設  
(北から)



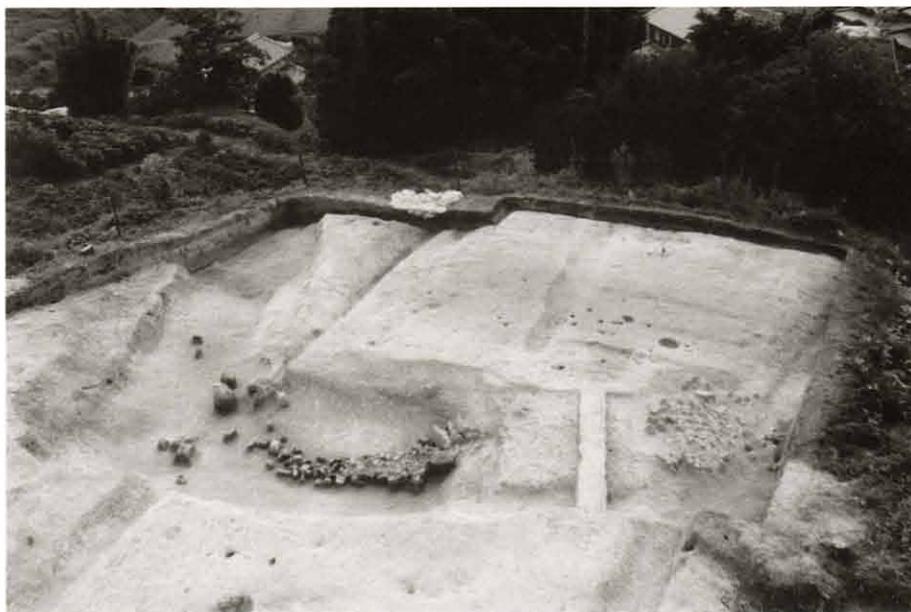
(1) B 8 号墳周溝検出状況  
(東から)



(2) B 8 号墳周溝掘削状況  
(東から)



(3) B 8 号墳周溝セクション  
(南から)



(1) B 8号墳全景(東から)



(2) 陸橋北側周溝内埴輪破片群  
(西から)



(3) 陸橋南側周溝内家形埴輪  
検出作業(南西から)



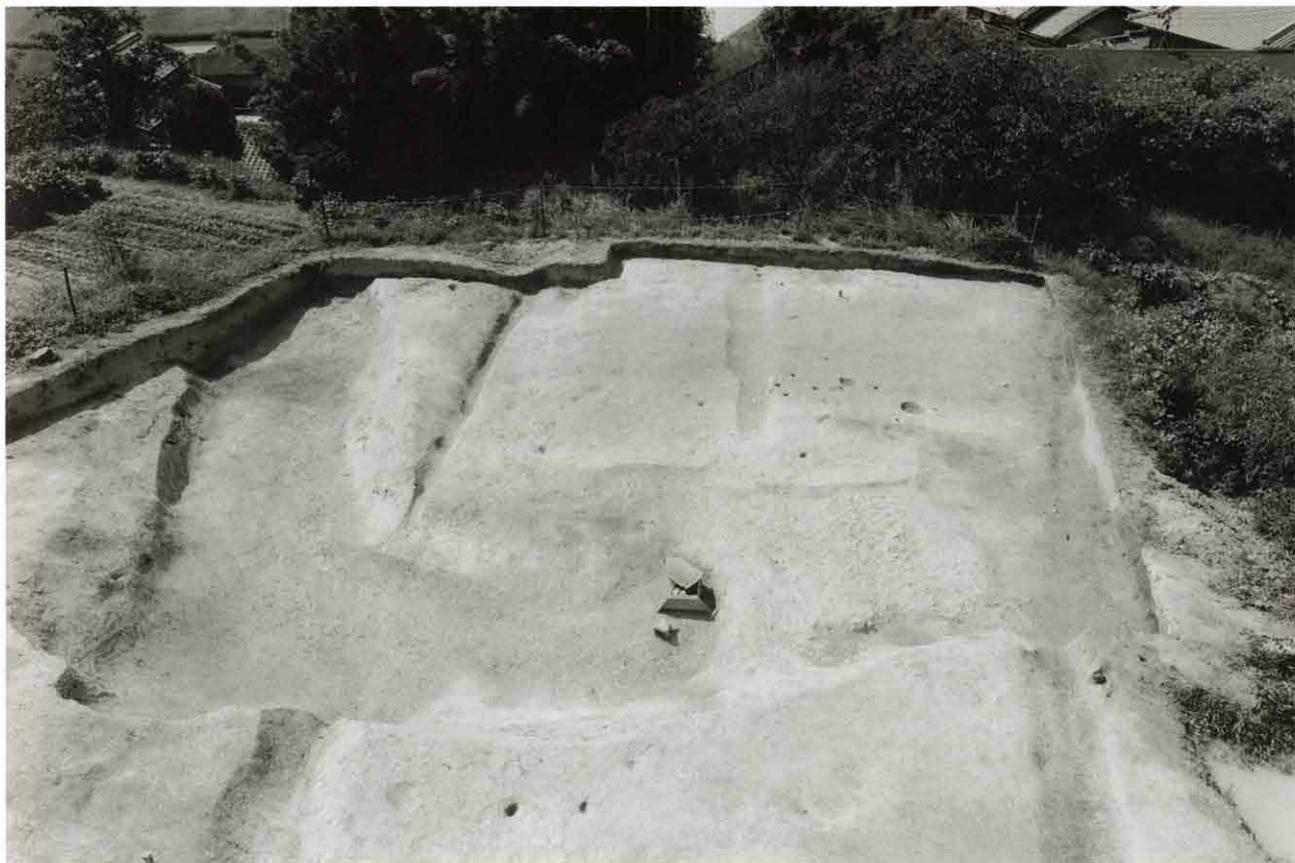
(1)陸橋南側周溝内家形埴輪  
検出状況(東から)



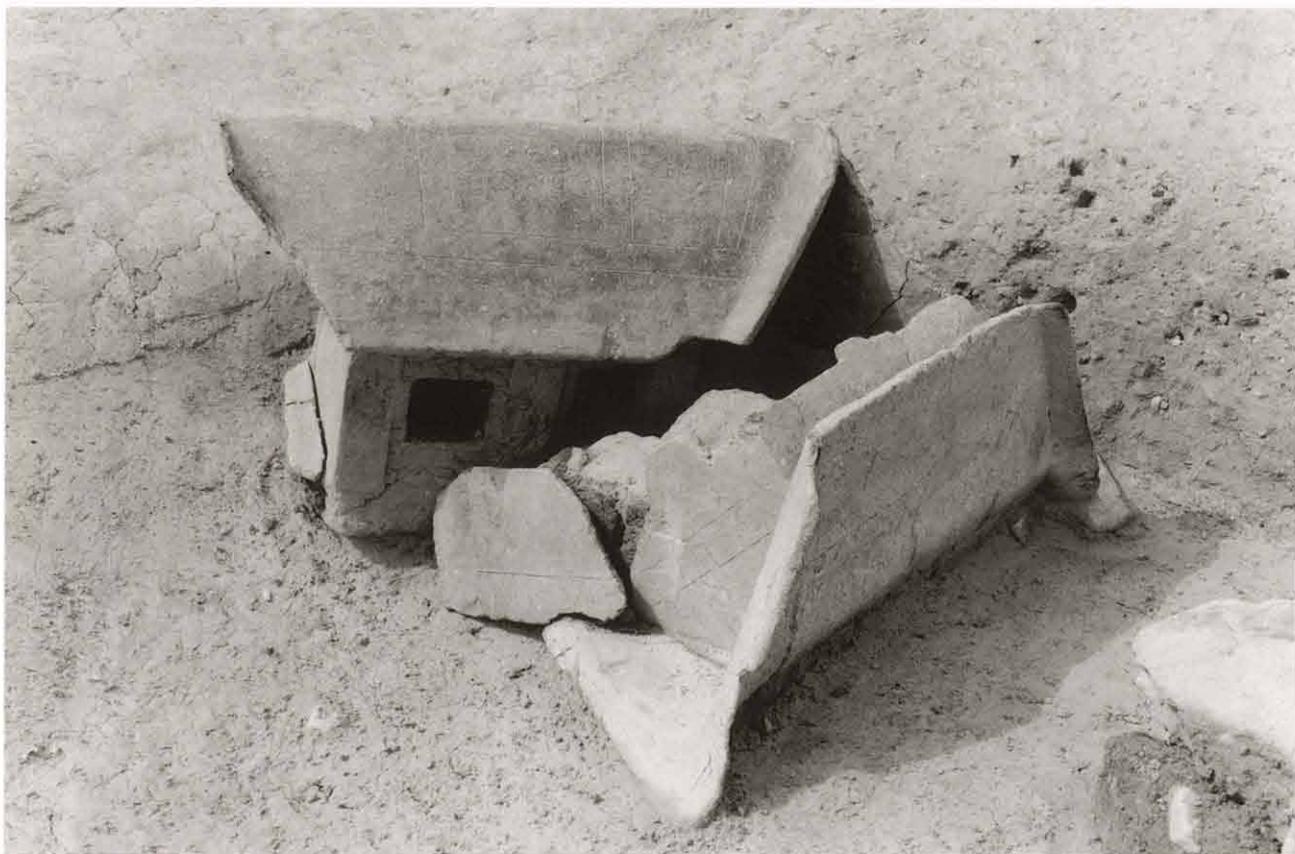
(2)家形埴輪検出状況(南西から)



(3)家形埴輪破片群中層面  
(西から)



(1) B 8 号墳全景(東から)



(2) B 8 号墳周溝内家形埴輪 1・2 出土状況(南から)



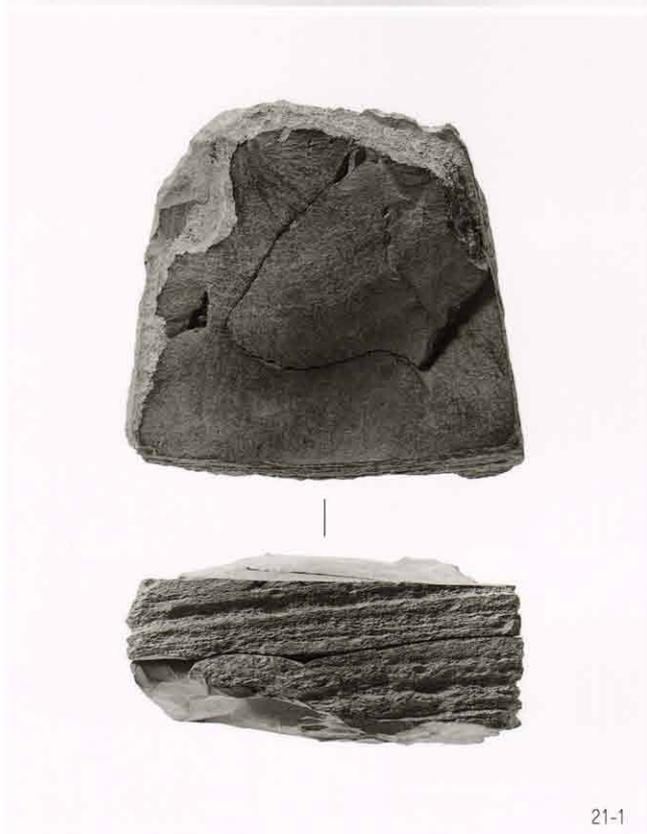
(1) 埋葬施設 S X52 (北から)

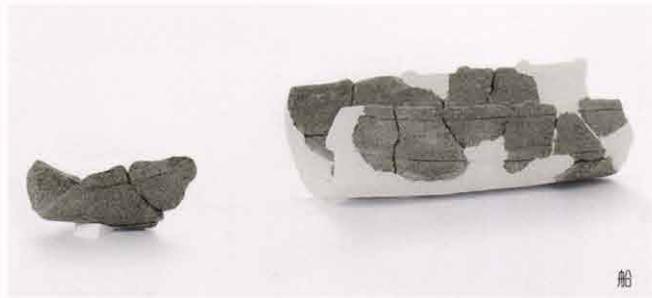


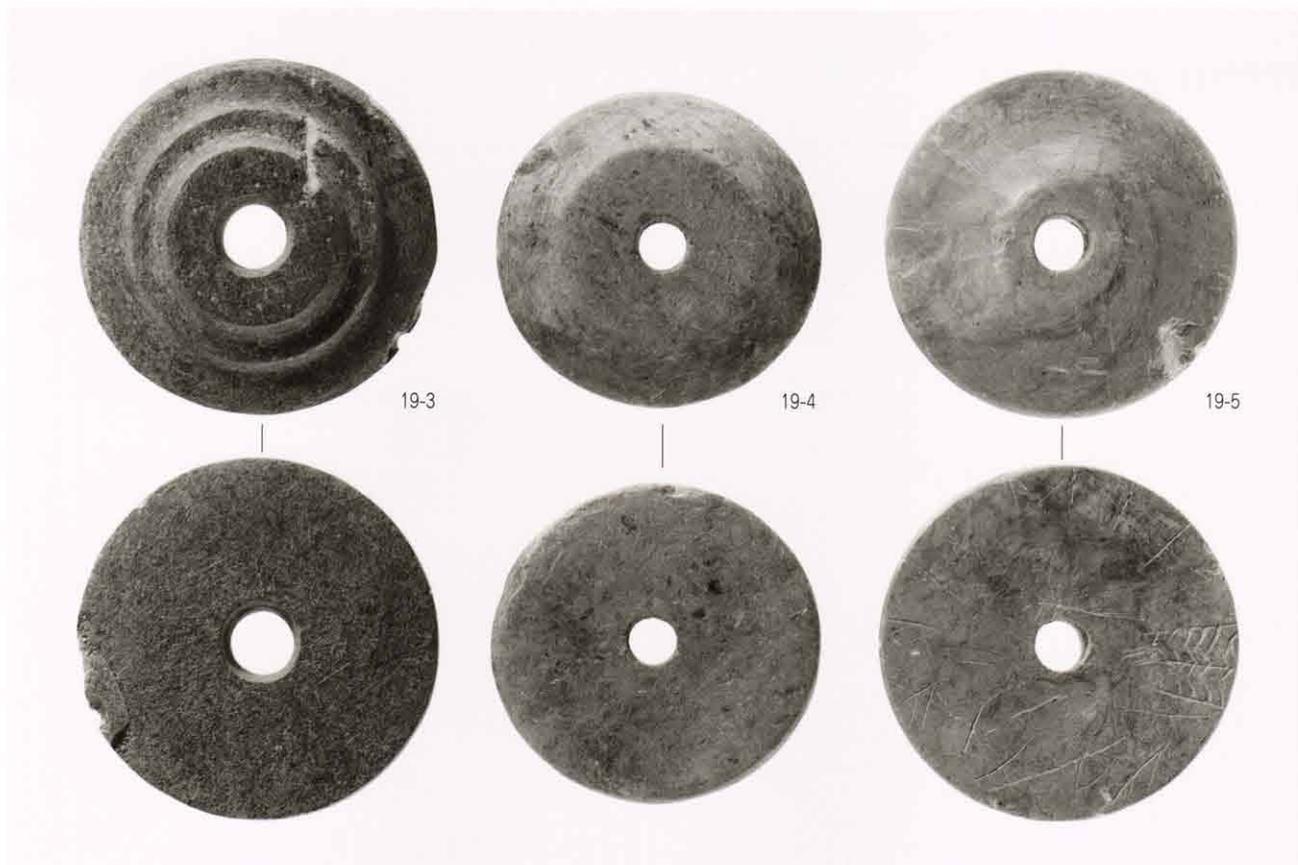
(2) S X52鉄製刀子と石製紡錘車  
(北から)



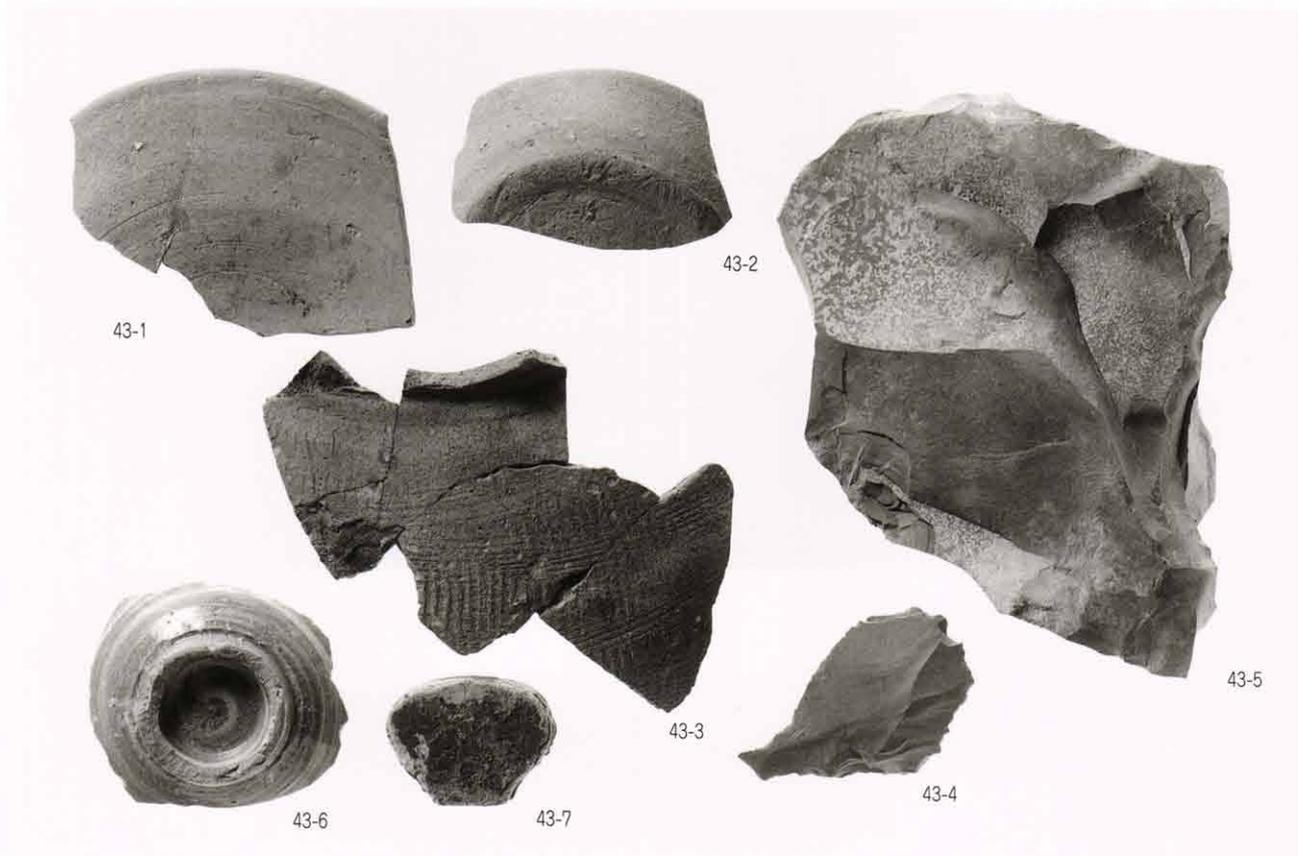
(3) S X52土師器椀 (北から)







(1)内田山古墳群出土石製品

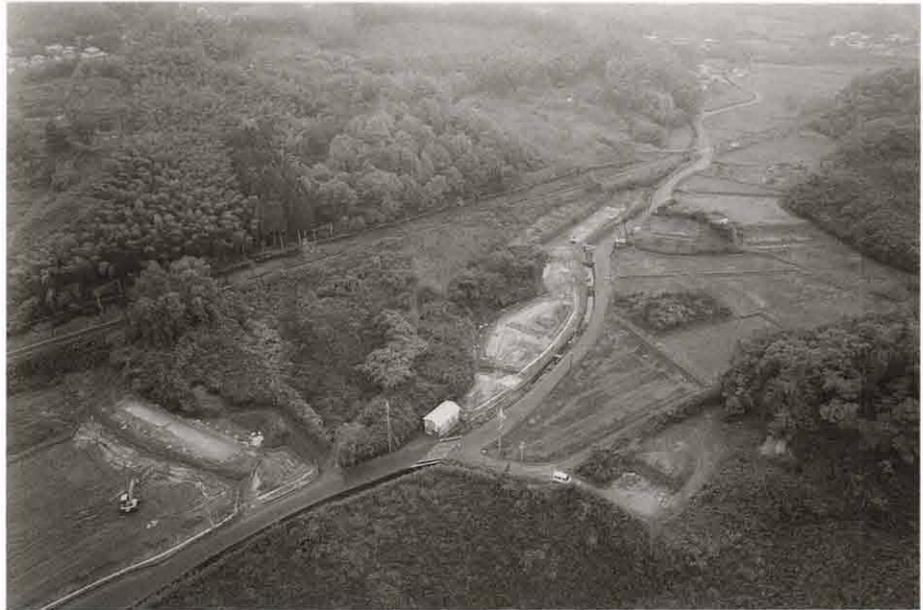


(2)赤ヶ平遺跡出土遺物

鹿背山瓦窯跡第1次



(1) 鹿背山瓦窯跡遠景1 (西から)



(2) 鹿背山瓦窯跡遠景2 (西から)



(3) 鹿背山瓦窯跡遠景3 (南から)

鹿背山瓦窯跡第1次



(1) 第7トレンチ東部(東から)



(2) 第8トレンチ(東から)



(3) 第10トレンチ(東から)

鹿背山瓦窯跡第1次



(1) 第20トレンチ(南西から)

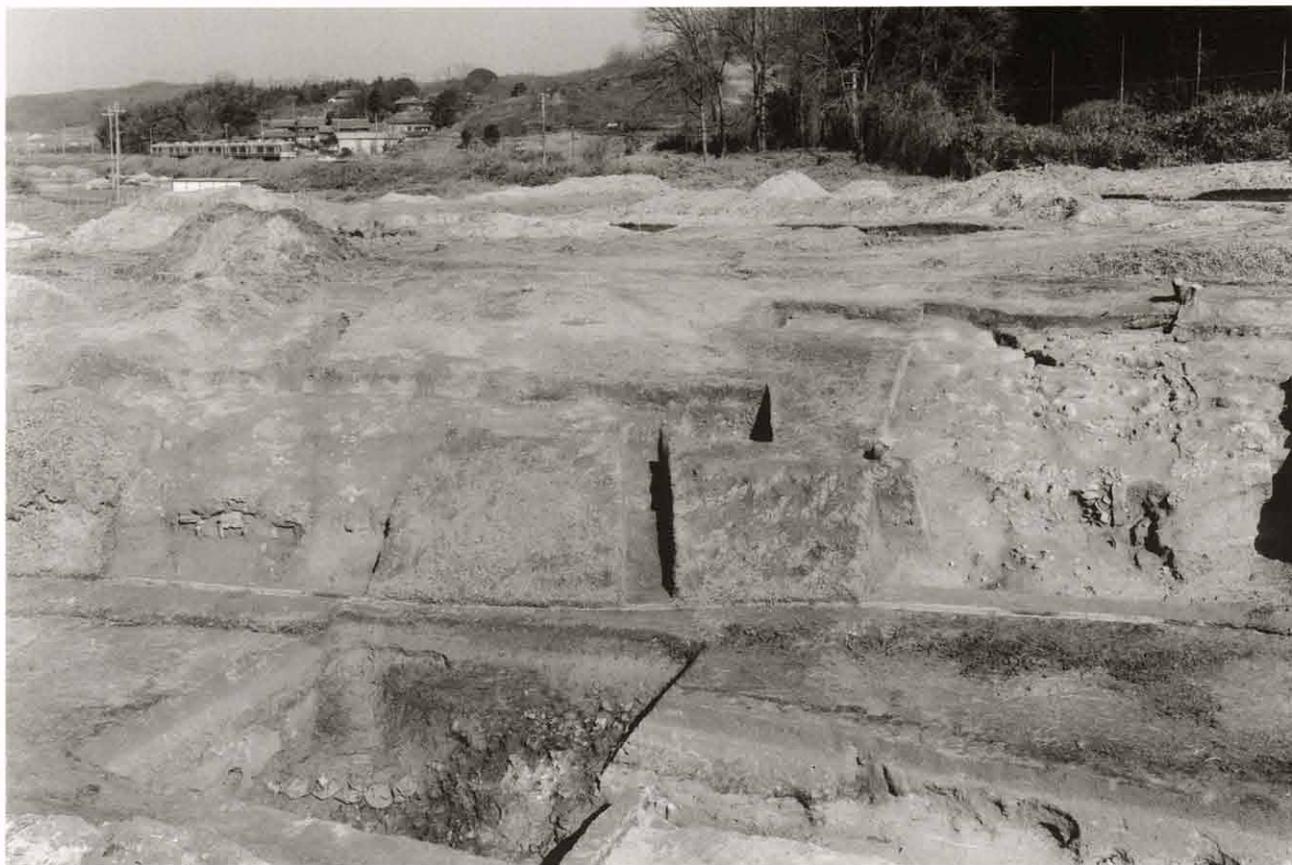


(2) 第6トレンチ(北東から)



(3) 第18トレンチ(南東から)

鹿背山瓦窯跡第1次



(1) 鹿背山1号窯・2号窯全景(南から)



(2) 鹿背山2号窯全景(南から)

鹿背山瓦窯跡第1次



(1) 2号窯焼成部奥壁検出状況1  
(南から)



(2) 2号窯焼成部奥壁検出状況2  
(東から)

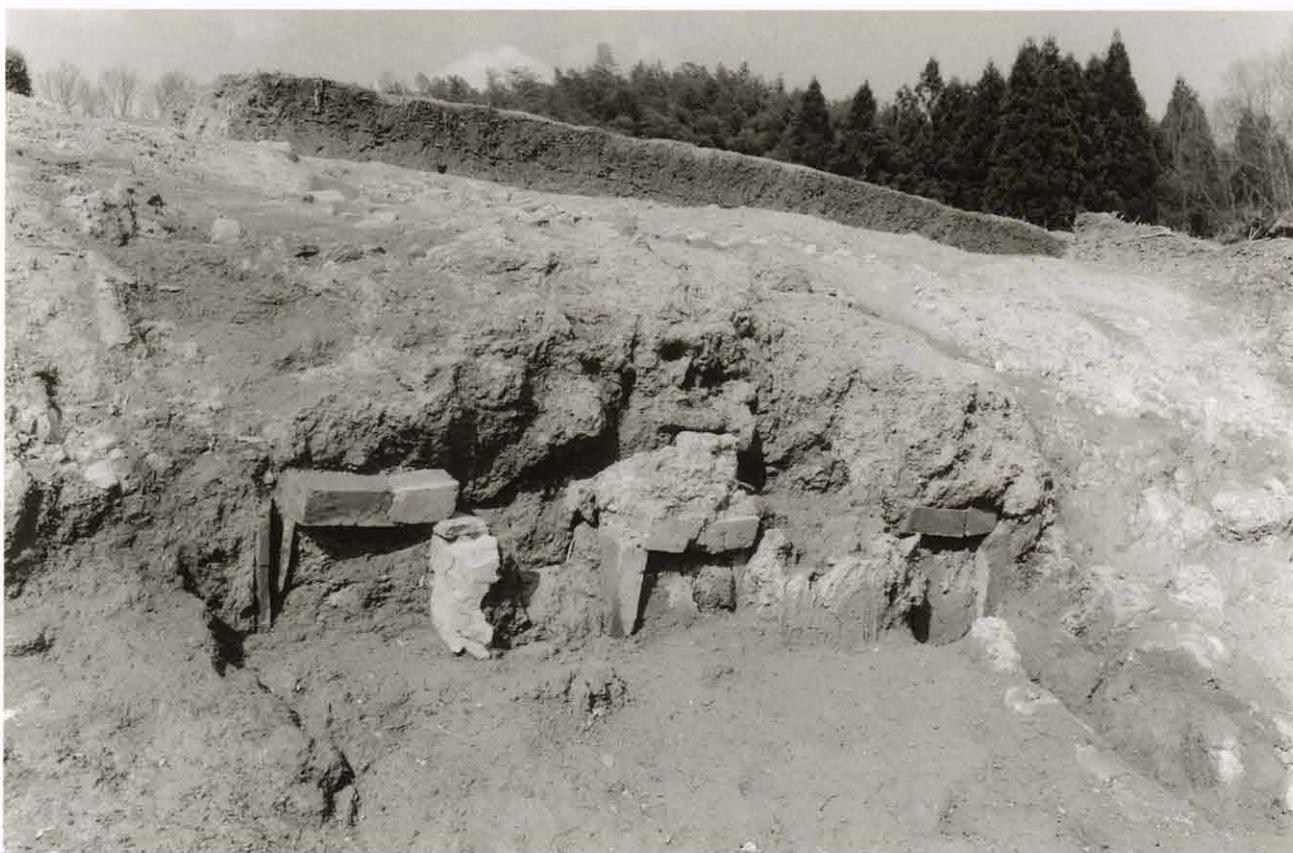


(3) 2号窯焚口周辺部(南から)

鹿背山瓦窯跡第1次



(1) 鹿背山1号窯全景(南から)



(2) 1号窯隔壁通焰孔検出状況(南西から)

鹿背山瓦窯跡第1次



(1) 第1トレンチ西端部灰原  
SX1 (東から)

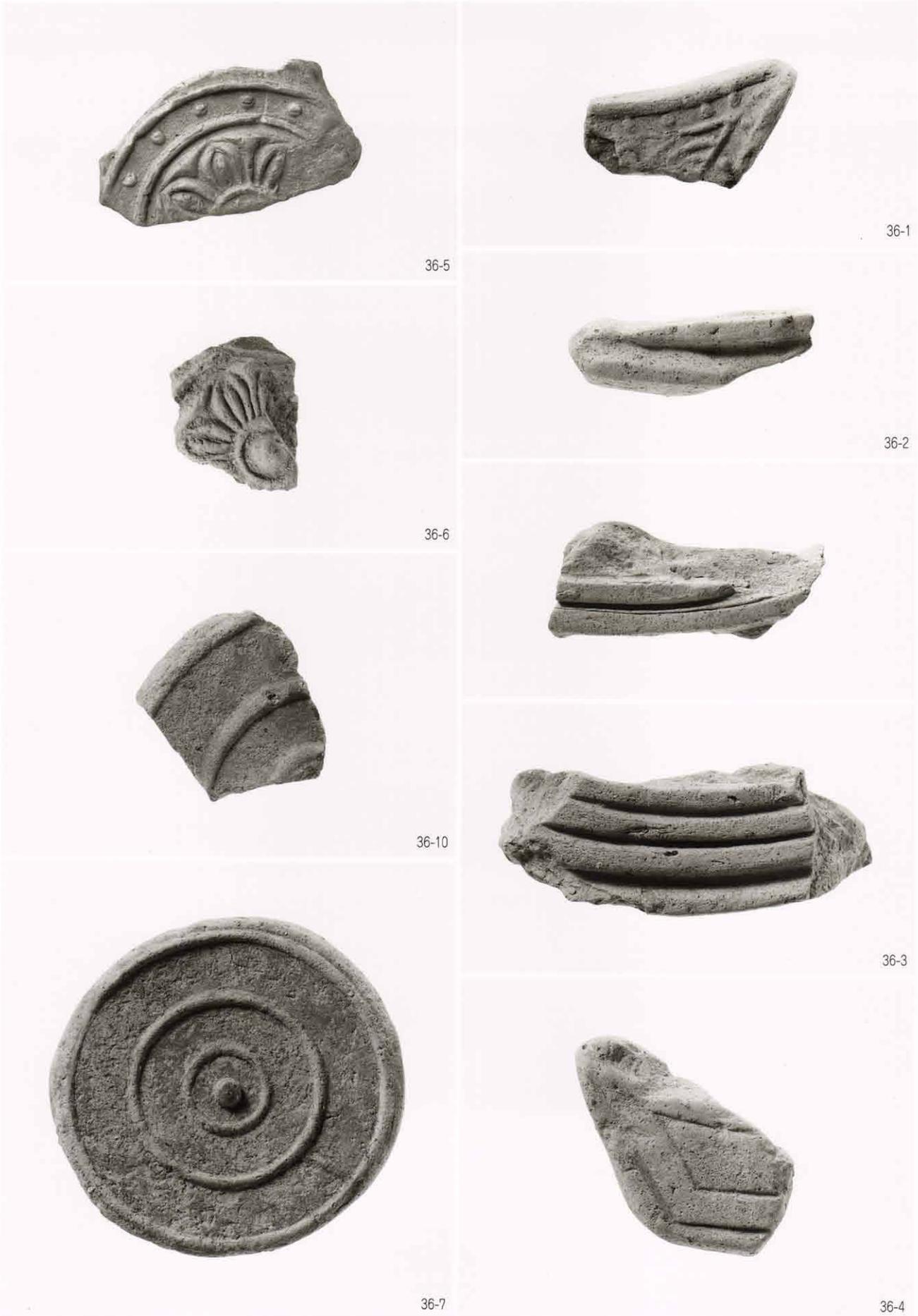


(2) 灰原SX1 (南から)



(3) 第1トレンチ中央南側東壁の  
河川堆積層 (西から)

鹿背山瓦窯跡第1次



出土遺物(軒先瓦)



(1) 調査地遠景(南東から)



(2) 調査地全景(東から)

赤ヶ平遺跡第4次



(1) 調査地全景(北東から)



(2) 4トレンチおよび本調査地(上が北西)

赤ヶ平遺跡第4次

(1) 本調査地調査前の状況  
(南西から)



(2) 1～3トレンチ調査前の状況  
(東から)



(3) 1トレンチ全景(北から)



赤ヶ平遺跡第4次



(1) 2 トレンチ全景(北から)



(2) 3 トレンチ全景(北から)



(3) 1 トレンチ断面(西から)

赤ヶ平遺跡第4次



(1) 4トレンチ(北東から)



(2) 4トレンチ(南東から)

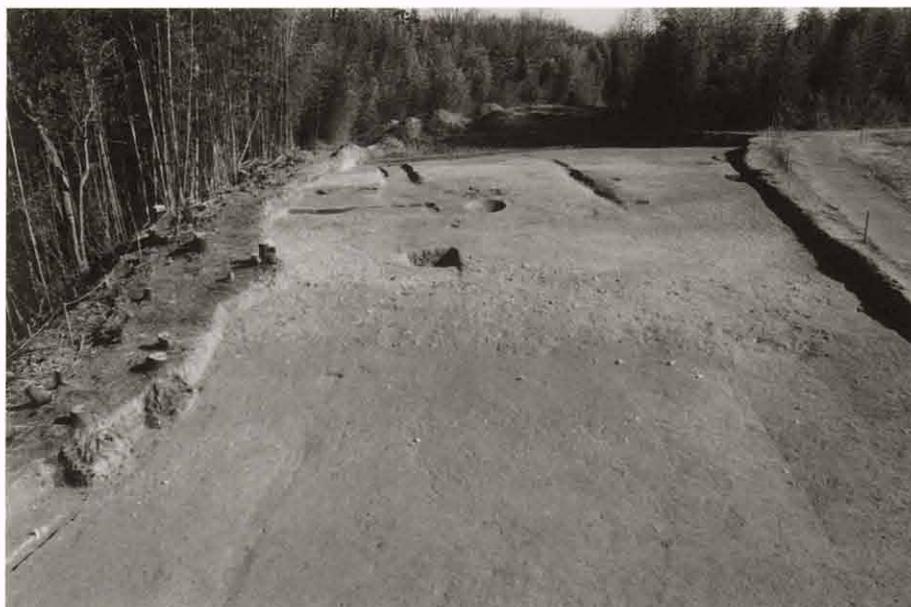


(3) 4トレンチ断面(北東から)

赤ヶ平遺跡第4次



(1) 本調査地全景(南東から)

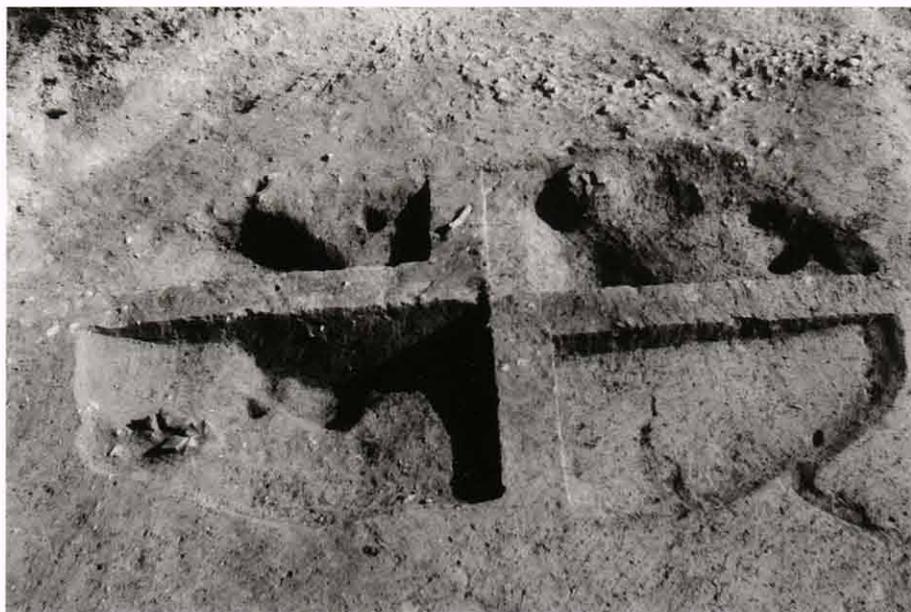


(2) 本調査地全景(北西から)



(3) 本調査地南西壁断面  
(北東から)

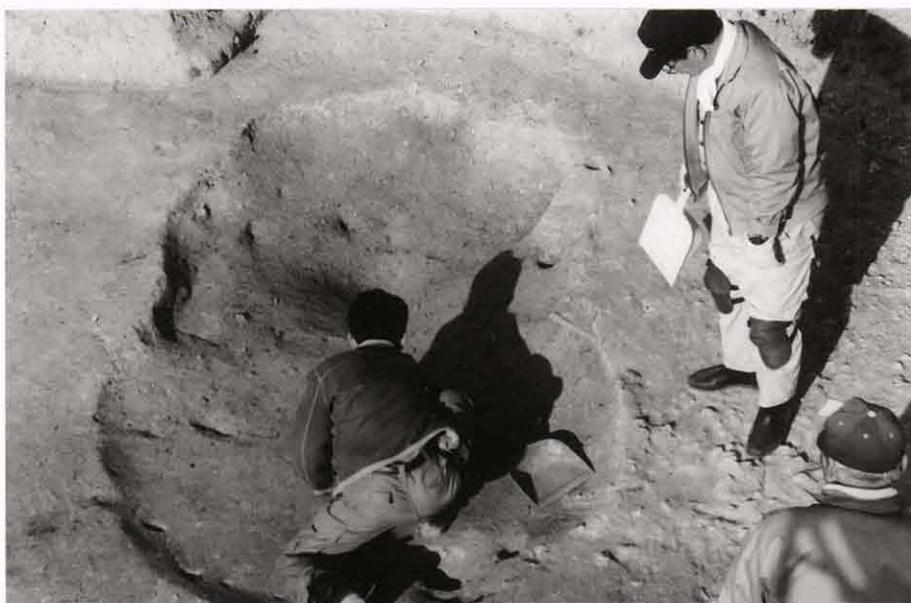
赤ヶ平遺跡第4次



(1)土坑S K01検出状況  
(北西から)



(2)土坑S K01検出状況(南から)



(3)土坑S K01調査状況(南から)

赤ヶ平遺跡第4次



(1)土坑 S K01遺物出土状況  
(北西から)



(2)土坑 S K01遺物出土状況  
(南東から)



(3)土坑 S K01完掘状況(南から)